

「アジアにおける日本研究」 講演会

崔 喜植 Choi, Hee-Sik
趙 寛子 Jo, Gwan-ja
権 肅寅 Kweon, Sug-In
林 少陽 Lin, Shaoyang
劉 岳兵 Liu, Yuebing
徐 禎完 Suh, Johng-Wan
王 中忱 Wang, Zhongchen
山 泰幸 Yama, Yoshiyuki
鍾 以江 Zhong, Yijiang



G J S

Global Japan Studies

「アジアにおける日本研究」講演会

国際総合日本学ネットワークは、日本研究の国際化を推進する組織として、2014年4月に東京大学内に設立されました。英語名はGlobal Japan Studies Network、通称GJSです。現在は研究部門を東洋文化研究所が、教育部門を現代日本研究センター(2020年7月に設立)が、それぞれ責任をもって管理しています。

この「ブックレットGJS」は、国際総合日本学ネットワーク(GJS)での研究活動や運営経験を踏まえて、その現場から生まれた知見を記録するためのシリーズです。

- 1 はじめに…………… 1
鍾以江/Zhong Yijiang
 - 2 GJS「アジアにおける日本研究」講演会シリーズ第1回…………… 3
徐禎完/Suh Johng-Wan
「韓国における日本研究の現状と課題：翰林大学日本学研究所の目指すところ」
趙寛子/Jo Gwan-ja
「ソウル大学日本研究所の活動：日韓における生活世界の危機を直視し、
新たな連帯を求める」
山泰幸/Yoshiyuki Yama, 鍾以江/Zhong Yijiang
 - 3 GJS「アジアにおける日本研究」講演会シリーズ第2回…………… 50
崔喜植/Choi Hee Sik「韓国の日本研究：国民大学日本学研究所を中心に」
山泰幸/Yoshiyuki Yama, 鍾以江/Zhong Yijiang
 - 4 GJS「アジアにおける日本研究」講演会シリーズ第3回…………… 78
権肅寅/Kweon Sug-In「韓国人類学の日本研究：1980年代から現在まで」
山泰幸/Yoshiyuki Yama, 鍾以江/Zhong Yijiang
 - 5 GJS「アジアにおける日本研究」講演会シリーズ第4回…………… 98
「ラウンドテーブル 方法としての「日本」？ 中国における日本研究の課題
と可能性」
劉岳兵/Liu Yuebing
王中忱/Wang Zhongchen
林少陽/Lin Shaoyang
鍾以江/Zhong Yijiang
- 著者紹介…………… 132

1

はじめに

—— 鍾以江（東京大学東洋文化研究所 准教授）

GJS 研究教育ネットワークは、2014年に東京大学で立ち上げられた研究教育ネットワークである。その目的は海外の日本研究を東京大学または日本国内の日本研究とつなげることにある。そのため、これまで定期的に講演会、セミナー、書評会を開催し、教員インタビュー、大学院授業、短期教育プログラムなどを行ってきた。2021年度は、GJSの活動の一環として、アジア各国の日本研究を日本語話者のオーディエンスに紹介し、海外と日本国内の日本研究者が交流を深めるために、「アジアにおける日本研究」講演会シリーズを企画した。夏学期（4～7月）は、韓国、中国、香港の日本研究の専門家をお呼びして、四回にわたる講演会を開催し、それぞれの国での日本研究を紹介していただくこととなった。韓国の先生がたへの講演依頼は、長年韓国の日本研究者と共同研究を行ってこられた関西学院大学の山泰幸教授にお願いし、多大な労をおとりいただいた。この場を借りて山教授にお礼を申し上げたい。

本書に収録した四回の講演会は下記の通り。

■一回目

日時：2021年4月16日（金）15：30～18：00

会場：オンライン（zoom）

講演者①：徐禎完（翰林大学日本学研究所長）

講演タイトル①：韓国における日本研究の現状と課題：翰林大学日本学研究所の目指すところ

講演者②：趙寛子（ソウル大学日本研究所 副教授）

講演タイトル②：ソウル大学日本研究所の活動：日韓における生活世界の危機を直視し、新たな連帯を求める

企画趣旨説明とコメンテーター：山泰幸（関西学院大学 教授）

司会：鍾以江（東京大学東洋文化研究所 准教授）

■二回目

日時：2021年5月11日（火）16：00～17：30

会場：オンライン（Zoom）

講演者：崔喜植（国民大学日本学研究所 所長・教授）

講演タイトル：韓国の日本研究：国民大学日本学研究所を中心に

企画趣旨説明とコメンテーター：山泰幸（関西学院大学 教授）

司会：鍾以江（東京大学東洋文化研究所 准教授）

■三回目

日時：2021年6月22日（火）16：00～17：30

講演者：権肅寅（ソウル大学人類学科 教授）

講演タイトル：韓国人類学の日本研究：1980年代から現在まで

コメンテーター：山泰幸（関西学院大学 教授）

司会：鍾以江（東京大学東洋文化研究所 准教授）

■四回目

日時：2021年7月20日（火）15：00～17：30

講演者：劉岳兵（南開大学日本研究院 院長・教授）

王中忱（清華大学日新書院 院長、中国言語文学学部 教授）

林少陽（香港城市大学中文及歴史学部 教授）

講演タイトル：ラウンドテーブル 方法としての「日本」？ 中国における日本研究の課題と可能性

司会：鍾以江（東京大学東洋文化研究所 准教授）

2

GJS「アジアにおける日本研究」 講演会シリーズ 第1回

—— 徐 禎完（翰林大学日本学研究所長）・
趙 寛子（ソウル大学日本研究所 副教授）

日時：2021年4月16日（金）15：30～18：00

会場：オンライン（Zoom）

講演者：

徐禎完（翰林大学日本学研究所長）

「韓国における日本研究の現状と課題：翰林大学日本学研究所の目指すところ」

趙寛子（ソウル大学日本研究所 副教授）

「ソウル大学日本研究所の活動：日韓における生活世界の危機を直視し、新たな連帯を求める」

企画趣旨説明とコメンテーター：山泰幸（関西学院大学 教授）

司会者：鍾以江（東京大学東洋文化研究所 准教授）

使用言語：日本語

鍾：時間になりましたので、今日の講演会を始めたいと思います。先生方の講演が始まる前に、まず、国際総合日本学について簡単にご紹介します。国際総合日本学というネットワークですが、英語では Global Japan Studies といい、GJS と略称しています。GJS 研究教育ネットワークは、7年前に東京大学で立ち上げられ、その目的は、海外の日本研究を、東京大学、または日本国内の日本研究とつなげることです。そのため、定期的に研究会やセミナー、書評会、教員インタビュー、短期教育プログラムなどを開催してきました。私は、国際総合日本学ネットワークの企画と運営に携わっている鍾以江と申します。今日の司会を務めさせていただきます。また、私の他に国際総合日本学の運営メンバーは、内田力さんと、園田茂人教授がいます。

今日の講演会は、国際総合日本学の活動の一環として、アジアの日本研究

を、日本語のオーディエンスに紹介し、海外と日本国内の日本研究の交流のために企画した、「アジアにおける日本研究」講演会シリーズの1回目です。今学期は、韓国、中国、中国の香港の日本研究の先生をお呼びして、それぞれの国での日本研究をご紹介していただくことになっています。今日は、韓国の翰林大学の日本学研究所長の徐禎完先生と、ソウル大学の日本研究所の趙寛子先生にお願いして、韓国の日本研究についてお話ししていただきます。今日の企画は、関西学院大学の山泰幸教授のおかげで実現できたことです。企画の段階から韓国の先生へのご依頼まで、山教授が関わっていただいて、今日の講演会の司会として大変ありがたく思っています。では、翰林大学の徐先生の講演会を始める前に、山先生に企画の趣旨のご説明をお願いできるでしょうか。

山：ありがとうございます。ただ今ご紹介していただきました、関西学院大学の山泰幸と申します。私は長年、主にアジアの、中国や韓国、台湾などで、研究活動、交流をしておりますが、特に、日本研究をされている研究者の方々との交流が長くて、そこで大変多くのことを学ばせていただきました。日本は比較的、アジアの中では、近代史において、いろんな意味で大きな役割を果たしてきたところがあると思いますが、日本がアジアについて研究して、日本からアジアについて見るということについては、随分、われわれ日本の研究者は慣れていると思いますが、それ以上に、アジアの国々から日本を見る、アジアの人たちから日本がどう見られているのかということも、それ以上にすごく大事な問題だなというふうに、日々、感じています。特に、年々、日本で留学されて、帰国されて、ご自分の国で日本研究の専門家として、大学等、研究機関に勤められている方もすごく増えてきていますし、また、それだけではなくて、日本で研究もしますけれども、それ以外の、欧米で、日本研究の専門家としてトレーニングを受けて、かつ、日本を対象に研究をして、帰国されて、日本研究の専門家になられている方も非常に増えているのですね。そういった中で、私も韓国の日本研究の先生方と交流が多いのですが、ほぼ、日本で流行しているというのですか、日本で最新のトピックとなっているような研究テーマで学位を取って帰られて、即、ご自分の国で活躍されている研究者も多くて、ほとんどタイムラグがなく、ある研究テーマが同時

代的に進行しているという現象が、近年、すごく強まっているというふうに感じています。また、それだけではなくて、日本での研究テーマというのを、われわれも日々チェックしながら、同時代的に確認はしていますが、一方で、そういったようなことを踏まえた上、日本の動向をしっかりと押さえた上で、自国に帰られて、そこでの関心事とか、そこでの視点でもって、また別の切り口で日本研究を深められていっているという、特に若い方々も非常に多くなってきているのですね。そういう意味では、私も、アジアの日本研究の方々と交流させていただくことで、本当に、新たな視点というのですかね、今まで見慣れたようなテーマであるとか、今まで、もう既に蓄積があるような研究テーマであっても、見る視点が違ったり、どこから見ているのかということ、随分違ったものが見えてくるという、そういうように教えられたり、刺激を受けるという経験が、ここ近年、すごく増えているなというふうに思っています。

日本の政治、経済、社会、文化、さまざまな面にわたって、実は、もしかしたら、日本にいる日本研究者よりも、アジアの、特に非常に近い国々で、研究者の層も厚い地域の研究者の人たちのほうが、もっと日本のことが、実は詳しくて、日本のいい面、悪い面を含めて、よく、トータルに見ているのではないかなというふうを感じることも多いと、そういう経験から、今回、「アジアにおける日本研究」というシリーズの企画のほうを、今日は、協力、お手伝いさせていただくことになりまして、今回、第1回目ということで、韓国の研究機関の、特に日本研究の専門研究機関である翰林大学の日本学研究所、こちら、韓国の日本学研究では非常に伝統のある研究所の所長の徐禎完先生、そして、ソウル大学の日本研究所、こちら、韓国を代表する日本研究の研究機関ですけれども、こちらの趙寛子先生、このお二人に、今日は第1回目ということで、それぞれの研究所の研究活動の取り組み、どういことをされているのかということ、概要を紹介された上で、特に、先生方が現在、その立ち位置から関心を持たれている日本研究の論点というのでしょうか、関心事について、自由に語っていただこうということで、こういった企画をさせていただいています。

また、お二人とも、ご発表の際に、少し自己紹介をされるかもしれません

が、大変、日本とはつながりが深く、日本での留学経験もあり、日本で学位を取得されて、それで帰国されて、韓国の日本研究の中心を担っている方々おふたりということで、今日は非常に楽しみにしているところです。それでは、簡単ですけども、私のほうからの趣旨説明はこれで終わりにしまして、司会の鍾先生のほうに返させていただきたいと思います。よろしく願います。

鍾：山先生、ご説明・ご紹介ありがとうございます。それでは、これから、翰林大学日本学研究所の徐禎完先生に講演をお願いしたいと思います。徐先生と趙先生の講演が終わってから、山先生から短いコメントをしていただき、その後、質疑・討論に入りたいと思います。では、徐先生、どうぞよろしくお願いいたします。

徐：それでは始めさせていただきます。本日は、「アジアにおける日本研究」講演会シリーズの第1回目ということで、すごく負担になっております。実は、今朝の午前2時あたりから急造したもので、ちょっと完成度が低いのですが、普段、私の考えていることをできるだけまとめてみようかなという方向で取り組みました。もう一点は、研究所の紹介もさることながら、韓国における日本研究の成立みたいなもの、それに関係する現状と課題も含めまして、もちろん、私見でありますけれども、皆さんに、韓国における日本研究というのがどういう状況なのかということを考える上で、少しでも参考になればという気持ちで作りました。

私の専門は能楽です。お能ともいう中世の芸能です。博士論文は、能の中でも、いわゆる幽玄とか美意識とか、そういうものではなく、私が関心をもちましたのは、いわゆる芸能史の変遷でありまして、今日いわれる、世阿弥的な能とか、そういう、いわゆる理論的なものが実証されるためには、世阿弥時代から今日までの能の作品に、要するに、異同があってはいけないという前提の下で、それが本当に異同はあるのかなのか、あるならどういう方向になるのかということ、史料的に指摘したのが、92年に学位を取った博士論文でして、その後、もっと勉強がしたくて、近代の能を近代の歴史という観点から勉強したいという気持ちがありまして、もう一度、在職中に、日本の国立大学に籍を置きまして、勉強をさせていただきまして、去年、もっ

と長くいたかったのですけれども、危険だから出ろと言われて、しょうがなく出ましたが。

それで、近代の歴史としての能楽研究を始めた理由といたしますのは、日本の能楽史の中で、一番、中身が、内容的に、要するに充実しているのが中世と近世なのですよね。近代という時代に関しては、あまり相対的にはされていないにもかかわらず、600年、または700年続いている日本の伝統芸能、能という、一種の理論といたしますか、イデオロギーといたしますか、そういうものがある中で、それを具体的に調べてみたいというところから始めました。私は、92年に翰林の日本学科に赴任しまして、2007年から研究所に勤めております。そういう形の中で、日本研究に関する、いわゆる経過みたいなものを簡単にお話しすることで、皆様のご理解に少しでもお役に立てればと思っております。

まずは、本題に入る前に、春川（チュンチョン）というところ、春の川と書きますけれども、具体的にどこかといたしますと、ここにあります。ここがソウルでして、この点線がいわゆる休戦線で、ここから上は全部、北朝鮮となります。春川の人口は30万に満たない小さな都市でして、仁川空港の仁川から東海岸の安陽（アンヤン）までを横断するとした場合に、ちょうど真ん中らへんにあるのが春川であります。ソウルの竜山（ヨンサン）駅から電車で70分ぐらいの距離で、車ですと大体1時間少し、1時間20分ぐらいの距離ですけれども、ここに、今、大学がございまして、そういう意味では、この線の上には大学はありませんので、ある意味で言うと、韓国で最北端の日本研究所、日本研究機関ということになるかなと思います。

基本的に、今日の発表の中で、日本で勉強して韓国で教鞭を執っている韓国人の日本研究者というのが私のポジションになるかと思えます。問題意識という大きなものではありませんが、おおよそ、次のような考えを普段持っております。例えば、韓国による日本研究とは何かということ、普段あまり考えずに自分の研究だけをやっているという傾向があったのですけれども、赴任してから3年目、4年目ぐらいからは、こういう問題を自然に考えるようになりました。その理由は後で若干述べますけれども、韓国の日本研究は何を担うべきであって、その研究者は何を探求すべきなのか、研究機関

というのは何をどうすればいいのかということ、ただ単に、目の前の、要するにプロジェクトをやればいいのかということを含めて、いろんな考えを持つようになりました。

例えば、日本の日本研究との差別化、独自性という問題もございます。このあたりも、院生のころ、留学しているころは、全く考える必要のない問題でした。また、韓国の中の人文学としての日本研究の位置付け、関係はどうか、どのように発展させるべきなのかという問題も、日本で院生をしながら勉強に励んでいるころは、全く考える必要のない問題でした。それよりも重要なのは、目前に迫っている演習の準備をすとか、そういう、論文を書くとかだけで精いっぱいでしたので、このあたり、いわゆる、国境をまたがっての日本の日本研究、または韓国の日本研究、また、韓国の人文学の中でのポジションなどの問題は、全く考える余裕もなければ、特にする必要もなかったというような状況でした。つまり、留学時代の私がやっていた学習、勉強、研究というものは、日本で日本の日本研究として行われている、それも、日本人の恩師から、いわゆる、学知と方法論を教えていただき、踏襲しながら、自分のものにしていく過程であったというふうに言えます。

先ほど、立ち位置ということばにも触れましたけれども、これを、今、ここで、日本で日本の日本研究としての学知と方法論を踏襲する作業といえますか、過程を、日本人の同期や先輩後輩の院生と同じことを行いながら、競争しながら評価を受ける、そういう時期であって、それ自体は特に問題のない学びの過程だったと言えます。ところが、日本での院生生活を終えて、突如、ある日、韓国に戻り、大学の教員になって、立場が全然違う立場になってしまったとき、もちろん、最初の1～2年は、韓国での生活や環境に慣れるために、何も考える余裕がなかったのですが、少し落ち着いてきて、2～3年目になってくると、院生のころにやっていた、同じ目的、同じ視点、同じ方法論を、ただ何も考えずに繰り返して、論文を書いて研究していればそれでいいのかと。つまり、学習者や院生から、いわゆる教授者へと身分が変わりまして、日本で日本の日本研究として行われたものを、韓国で日本の日本研究として行うことの違い、または、先ほども出ました、差別化とか独自性とかいうものが必要なかどうなのか、逆に言えば、院生のころに教わった方

法論や資格や学知の方法論をただ繰り返すということを、それを韓国の地で、日本の、例えば文学研究を繰り返すということを、自分の一生涯の研究課題として持っていて、それでよいのかと。でも、実際には、留学中に比べますと、当時は、インターネットも何もない時代でしたので、いわゆる、研究サークルという輪からどんどん外れていって、孤立と断絶という中で研究を続けなきゃいけないという問題もありますし、いろんな複合的な環境の変化の中でどうすれば良いのかということ。

例えば、能であれ、平家であれ、または漱石であれ、韓国で韓国人研究者が、日本で日本人研究者がやっていることと同じことを続けることの意味、先に申しあげました、日本の日本研究との差別化、独自性、または、韓国の人文学としての関係性、または位置付けという疑問なのですけれども、つまり、これを続けるということで、自分で満足して、それで、自分の、つまり、社会的な関わりも含めまして、あとは、学生に何を教えるのかということだったら、極端に言えば、私の学生に、私がやっていることが日本で同じことであれば、別にここで勉強せずに、そのまま日本に留学したほうが早いのではないかみたいなことも言えますし、そのようないろんなことを、赴任2～3年目あたりから、ちょっと真面目に考えるようになりました。

このようなお話をしたのは、決して、私個人の話をしたというのではなくて、このような、私個人の悩みといえますか、考えていたことの行き着くところ、それが、いわゆる、韓国の日本研究が考えるべき問題ではないのかなというふうに思っているからであります。学習者と教授者では立場が変わります。自己満足、自己達成と社会との関わりという問題を考えるようになります。研究サークルの、いわゆる中心といえますか、その中にいたのですけれども、当時の環境ですと、全く資料も何もないような、孤立したところで、研究を続けるということが、現実的には不可能に近かったという状況。つまり、自己達成を目指す学習者から、韓国の大学で学生を教える社会的責務を有する教員への転換という、自分自身のポジションの変換の前で、社会への関わりを意識することになって、つまり、これが韓国の日本研究が何を目指すべきかということとつながるのではないかという問題だったと思います。

ここで、韓国の日本研究の形成を簡単にまとめました。もちろん、ここに

全てが網羅されているわけではなくて、多分漏れているのもありますし、管見に入った限りである点を、まずはご了承願いたいと思いますが、61年に、韓国外国語大に日語科という学科ができます。もちろん、45年以降に、個人的な日本関係の研究などをするという動きはありましたけれども、公的な教育機関で日本関係の学科が設置されたのは61年です。ただ、これは、国交正常化の4年前なので、当時は国内で大きな反発があったというふうなお話を伺っております。その翌年に、国際大学、今は西京大学、西の京の大学というところでできましたし、その後、学会としては、73年に韓国日本学会というのができました。その同じ年に大学院日本語科ができて、あとは、高等学校第2外国語として日本語が採択されました。その後に、大学での学科、研究会、学会などがつくられていきまして、右側に行きますと、92年に私のところに日本学科ができました。ここで、注意、注意というか、以前は全部、日語科とか、日語、日文学科なのですよね。基本的に、日本語、または、日本語と日本文学を中心にカリキュラムを組んで、いわゆる日本に関して教えるという学科だったのが、日本学という名前を銘打って出始めたという意味では、相当早い時期の学科の設立でした。その2年後に日本学研究所ができて、その後、高麗大にもできて、ソウル大にもできて、漢陽大学にもできるという感じで、こういうふうに見ることができます。としますと、おおよそ、60年代、70年代あたりには、学科中心にどんどん設置が進み、80年代後半から90年代、2000年代あたりまでは、研究所がどんどんつくられながら、学会もつくられていったというふうに見ますと、70年、80年ぐらいから動き始めたとした場合に、約40年ぐらいの、いわゆる経歴といえますか、そういう経過があったというふうに見ることができます。

ここでの問題は、初期のころですけれども、日本語、日本文学中心の学部設置でありましたので、当然のことながら、当時、61年とか、60年代、70年代初めあたりには、専門家、教授者の不在という問題がありました。ですから、初期のころは、学士、だから、学部を出ただけの方が教鞭を執ったりするような状況だったのですけれども、そういうところで、日本語、日本文学専門者を育成しなければいけないという、いわゆる、社会的な要求でしょう、需給、需要ですけれども、それができて、80年代あたりから、日本語、

日本文学関係の専門を目的に留学をする人たちが日本に渡り始めました。ところが、この当時はそれで問題なかったのですけれども、彼らが帰国して、90年代以降に、各大学の学科とかに赴任されていくと、基本的に何が起こるかという、語学、文学中心の、いわゆる専門領域の隔たりといいますか、不均衡というのが、実際にできます。それで、特に、韓国における地域研究に対する認識というのは、政治、経済などが優先するような環境、雰囲気がありまして、それで、あともう一つは、学会の中で、例えば、日本のように、説話文学会とか和歌文学会みたいな細分化された学会はほとんどなくて、ほとんど、いわゆる大型の、日本関係の全ての領域を網羅するような学会が多いわけですが、その中で、基本的な仕分けといいますか、日本語があって、日本文学があって、3つ目に、学会によって違いますけれども、日本文化、または日本学みたいな名称で、仕分けが行われています。

それと、何が問題かという、では、文化や文学、または語学は、地域研究ではないのかという基本的な疑問が生じますし、また、日本語、日本文学は、日本文化ではないのかと。つまり、日本語があって、日本文学があって、その外に、第3のセクションとして日本文化を設けているわけですから、そのあたりの、要するに、問題が生じると。これは、ただに、単に、学問的基準による体系を整えた日本研究としての基礎づくりが不備のまま、いわゆる、現実として、語学、文学専門者中心の領域別の傾斜が、そのまま、学問的領域として固定化した結果であって、これは、それ自体が問題というよりは、韓国の中での、いわゆる人文学としての日本研究、日本学の自立性の問題に関わってくるのではないかというふうに、私個人は考えております。

ここで一つ、実際に興味深いデータを見ますと、先ほど、73年設立の韓国日本学会ですけれども、70年代、80年代に、この学会の、いわゆる学術雑誌に掲載された論文を見ますと、語学、文学、70年代よりは、その他の領域のほうが圧倒的に多いのです。ところが、80年代になると、語学、文学が圧倒的に増えて、逆に、その他の動機が半減してしまうというような結果で。ちなみに、参考までに、73年に、または74年に出ている、掲載されている論文は、このような、古代日本語というものもありますけれども、いわゆる、今の日本語学ではなくて、国語学に近いものですね。あとは、芭

蕉の問題、永井荷風と Zola の問題、あとは、美学界の草創期、あとは、日本中国学会報および東京支那学会報所収論文目録とか、韓国の憲法と日本の憲法の特質みたいなものもあったりして、逆に、今よりは、日本学だから、語学、文学以外のものが多様であったような、そういう側面が見受けられません。

こういうような、70年代、80年代における、韓国における日本研究の現状といえますか、それを受けまして、94年に研究所がオープンしたのですが、そのときに、今は亡くなられた、翰林大の創設者である、初代理事長の強い意志で、日本学研究所の設置が進められました。ちなみに、翰林大学には、日本学科以外に、中国学科とロシア学科があります。にもかかわらず、中国学科があるにもかかわらず、理事長の強い意志で、日本学研究所を先に設置したといういきさつがございまして、そのときの理事長の日本学研究所設置の目的というのは、趣旨ですね、いわゆる、ここに書きましたように、隣国という不変の関係があると、これは好き嫌いで選べる問題ではなくて、これは不変の関係であって、韓国が、日本がどこかに引っ越しするわけにもいかないのだと、そういう関係の中で、善意の競争による、要するに、相生のパートナーとしての日本という見方が必要であって、東アジアという力学間構造の中で、未来を見据えるための研究所が必要であると。

個人的には、これはすごく、とても立派な発想かなと思っておりまして、そういうふうな研究所が設置したときに、初代所長に赴任されたのが、池明観先生という、いわゆる、『韓国からの通信』をご存じかと思えますけれども、73年から88年まで、オリンピックのときまで、雑誌『世界』に投稿された、『韓国からの通信』のT・K生が池明観先生ですけれども、いわゆる、朴正熙政権下で日本に渡って、反政府民主化運動を繰り広げた先生で、東京女子大を定年されて、すぐ帰国されて、研究所の初代所長に赴任されております。その後、日本の大衆文化開放とかの座長を務められるなどの活躍をされまして、それで、T・K生のときに書かれた、その以後もあるのですが、『池明観日記』というものを研究所に寄贈していただいたのですが、これはいわゆる、韓国の近代化、または、現代史の中でとても重要な部分を占めており、資料的価値があるという判断のもと、当初は、本にして出そうかなと

思っていたのですけれども、出せなかった理由は、記事の日記の中には、あまりに多くの人名や協会名、特に当時、反政府活動をされていたネットワークが全部出ていますので、亡くなられた方も多く、そういう遺族の方を全部訪れて、連絡を取って、実名を出すということに許可を得ることができないと判断しましたので、取りあえず、今は、研究所内での閲覧だけをしているという状況です。2代所長は孔魯明先生で、外務大臣をされた方で、その後、2007年から私がやっているのが日本学研究所なのですけれども、基本的には、知の蓄積と、社会、学界への貢献ということをモットーにしまして、研究というのは研究ですから当然で、特記すべきは、日本学図書館というものを運営すると、あとは、出版活動をちょっと頑張ってみるとい、あとは、DBということも視野に入れております。教育と、これは、地域人文学センターというのは、今やっているHK+の関連なので、ピンクを除いても、ブルーの4点が、研究所の主要事業の柱ということになります。

具体的には、出版ですと、日本学叢書というのが100冊完結しております、これは池明観先生のときに始めたものでして、私の代で100冊完結しました。これは、研究所設置の94年の段階では、日本学研究、日本研究の必要性は、社会的にも、需要というか要求があったのですけれども、基本的なテキストがほとんどないような状況で、池明観先生の判断で、いわゆる、岩波新書とか、あのあたり、日本の研究者が日本の文化や歴史や思想などをまとめたものをハングルに訳しまして、韓国の研究者や学生などに提供するという趣旨で始めました。これは研究所が出す本でして、いわゆる、100冊全部赤字です。商業性はないので、当初から、社会事業のつもりでやるのだという意気込みで取り組んでおりました。その後、日本学新叢書を始めて、このシリーズが出ておまして、『翰林日本学』というのは雑誌ですけれども、これを全部含めて、約、今、200冊ぐらい出したという実績がありますし、あと、日本学図書館というのが、研究所では力点を置いているのですけれども、韓国図書館協会に登録された韓国唯一の日本学専門図書館で、蔵書、約6万5,000点あって、継続して拡充しております。この他に、研究所といえますか、私のほうが介入しまして、仲立ちをしまして、大江志乃夫日本近代史文庫なるもの、大江先生の2万点を、大学図書館に入れましたし、あと、

阿部猛先生の寄贈図書 8,000 点も大学図書館に入れましたし、最近では、去年ですけれども、関口榮一先生、東北大学の先生でしたけれども、日本学研究所のほうに 2,500 点を入れておりました。これを全部合わせると、約、翰林大学には、9 万点に上る、日本語による日本関係の専門書がある図書館ということで、いわゆる、研究所と図書館を合体させた、新しい研究所の運営の仕方という点で、それなりの評価を受けております。

あと、日本学 DB は、『朝日新聞外地版』の記事名索引を作成しております、今現在、1915 年から 29 年までと、35 年から 45 年まで、全部できておまして、残り、1930 年から 35 年の前半あたりまで、約 6 年分だけをやれば、15 年から 45 年まで、30 年間の『朝日新聞外地版』の記事名の索引が完成します。これを、研究所のホームページから、自由文字列検索可能な記事名索引データベースをつくって、公開する予定であります。

持っている資料は大ざっぱにこんなものですが、新聞資料だけを見ましても、基本的には、個人では入手できないような、そういう基礎資料を中心にそろえるように努力しております。だから、新聞記事とか、このあたりは、例えば、今、東大とか、日本の大学にいれば、図書館に行けばいつでも閲覧できるのですが、韓国内ではそれができずに、見るところがないので、そういう研究のインフラを、研究所という立場で担っていかうような発想で、図書館の拡充はずっと継続しております。

研究に参りますと、1 と 2 というのは、池明観先生のとときのプロジェクトでして、「近代朝鮮知識人の〈民族我〉形成に関する研究」とか、「日本植民地統治の終焉と大韓民国建国に関する調査研究」というのが、主な、大きなプロジェクトでありました。3 番と 4 番が私になってからですけれども、「帝国日本の文化権力：学知と文化媒体」というのを、2008 年から 17 年まで、9 年間やりました。ここには、今日いらっしゃっている、趙寛子先生もご一緒していただきました。それが終わって、自然な形で、いわゆる、帝国日本だったものが、ポスト帝国という、45 年以降、つまり、文化権力というキーワードから、帝国の文化権力というものが、45 年以降に、それぞれの国民国家が建設される過程で、帝国時代の帝国の文化権力がどのような形で取り入れられたり、排除されたり、変容したりするのか、それが、今日の、いわゆる

文化権力とどのような影響関係にあるのかということ、東アジア——帝国時代は、帝国日本といえば東アジアが入っていたのですけれども、東アジアという言葉に取り換えて、ポスト帝国という時間軸を延ばしたという、そういうプロジェクトを、2024年までの予定ですることになっております。強いて意味を付与すれば、地方の小さな大学の小さな研究所が、16年間、文化権力に集中するということだと思います。2024年が、ちょうど研究所の30周年なので、これを節目に、やれることをやっていきたいなと思っておりますし、個人的には、これが終わったら、多分、2024年になると、定年まで2年しか残らないので、ここまで来たら、やめて、あとは、残り2年は自分の荷造りでもしようかなというふうに考えております。

文化権力に関しましては、基本的に私の個人研究のほうから出たアイデアでして、能というものが、いわゆる権力との距離を至近に保つことで、時代と権力を乗り越えて存在しているということから始まりまして、権力と文化とか、戦争と文化とか、特に戦争は、日清戦争以降ですけれども、あとは、600年以上続いた日本の、今は700年という現実もありますが、600年以上続いた日本の伝統文化を代表する能という、いわゆる、一種のイデオロギーかもしれないけれども、そこにはつくられた伝統、近代と伝統、権力と伝統、または、権力の認知などの問題があるというふうに考えておまして、もう少し詳しいことは後で若干述べますが、そのような感じで、文化権力という言葉をつくり、問題意識をつくり、そこから、先ほどの2つの、3番と4番のプロジェクトを進めたという経緯がございます。

戦争と文化というのは、一人の人という立場から見れば、戦争こそ最たる災害でありますし、権力が極大、極限化される状況下での文化、芸能をどう見るのか、または、権力が文化、芸能を切り取ったりする、いわゆる動員とか統制の問題、戦争による芸能文化の萎縮というのはありますけれども、逆に、権力と結託という言葉は強過ぎますけれども、権力と、いわゆる、迎合でもないですし、いわゆる、権力と協力することによって、特定芸能が、その時代、その国、社会の中で、一層、地位が上昇するという面も、いわゆる両面性がありますので、このあたりも注目したいと考えておりますし、近代と伝統といった場合には、例えば、幕府の公儀だったものが、維新という政

治的変革によって、パトロンを失って存在基盤が揺らぐという過程がありますが、例えば、いわゆる、人心風俗に関係するところ少なからず候につきという感じで、いわゆる能というものは人心風俗に影響を及ぼすんだと、だから、要するに、教部省のほうで、一切を本省の管轄にという感じで、取り締まらなければいけないというような発想をしているのが1874年の後で、その後、日清、日露戦争を経ることで、国家芸能として、権力に新たに認知されることで、その時代の、能というものの位相が、今、上昇すると。

ところが、1920年代には、民主化要求とか、35年には大衆化運動ということで、これは、基本的に、能舞台、能の専用の舞台をやめて、いわゆる、一般の劇場でやれという要求なのですけれども、これは何かといいますと、能というのは、日本精神の国粹というイデオロギーができていたのですね。だから、日本精神の国粹なので、日本人であれば、正確に言えば、大和民族であれば、謡の一つぐらいできなきゃいけないというのがありまして、そのためには大衆化をしなければいけない。ところが、専用の能舞台だとなかなかできないということだと、そういうような、拡散していくような流れの一方に、詳しいことは省略しますが、芸者証とか民衆化運動によって、いわゆる統制を受けるという、そういう過程を経て、つくられた伝統といえ言葉は有名ですけれども、実は、コンテンツは不変、同質なのですけれども、それをどのように認知するかということによって、こうにもああにもなる、というのが、権力の前における芸能の基本的な立場ではないかと。そういう中で、600年以上続いた日本伝統芸能、能というものを、国民国家のイデオロギーとして見る場合に、何が言えるのかという、例えば、能を中心に考えますと、このような文化権力の問題を、ポスト帝国にまで延長しようというものです。

例えば、隠蔽された負という観点で私は見ておりますけれども、独立行政法人日本芸術文化振興会の本で見ると、こういうふうにしております。いわゆる、広くわが国の文化芸術の振興、わが国古来の伝統的な、わが国における現代の舞台芸術というふうになっておいて、国立能楽堂においても同じような。これは別に日本だけではなくて、いわゆる、国民国家の中で、どの国も同じようなスタンスで持っているあれだと思っていますけれども、取りあ

えず、能ですから、日本の場合を見ますと、いわゆる、古来の伝統芸能の保存および振興は国家が担当すると、遂行して運営すると、それで、日本が世界に誇る舞台芸術であるという認識とプライド、これはいわゆる、帝国の偉観を表象する国家芸能、日本精神の国粹である能、謡、国体護持のための芸能報国などと何がどう同じで違うのかという問題を、一度は考えなければいけないのではないかと。

これは、例えば、負と正がありまして、偉観を表象する芸能としては、日本を代表する芸能として、プラスというイメージ。ところが、天皇家の不敬問題を警戒される能というものがあります。江戸時代には全く問題のなかった、皇族が舞台に登場して、例えば、盲目になるとかというストーリーの曲がありますけれども、それが、江戸時代までは全く問題がなかったのが、近代の天皇制下では、それが不敬であるというような感じで、変更させたり、上演を中止させたりというようなことが起こるわけですね。どちらが正でどちらが負なのか。つまり、一番下にある、その負の領域までをも語ることで、600年受け継いだ能楽史が完成するのではないかというふうな立場に私は考えております。

その一環として、東アジア文化権力学術フォーラムというのをやっていまして、伝統と正統性、その創造の統制と隠滅というようなタイトルでやっておりまして、このような感覚で、一介の芸能が権力の盛衰を超越して存続し得るのかと、誰が、何が日本を代表するのか、正統性を伝えるのが伝統ならば、それはいつの正統性で誰が認定したのかという問題を、能を中心に私は考えておるといことでして、このような感じの問題意識、問題の所在と研究ということで、いわゆる、文化権力、もちろん、私のやっている能は一部でして、他にもっと広い社会とか国全体とか民衆とか、いろんな面から接近可能ですが、そのようなことをやっております。この辺はちょっと、能の話なので飛ばしまして。

ポスト帝国の文化権力と東アジアの目的と意義という観点から見ますと、これは、2017年に、プロジェクトを企画するときの文言、文章から取ってきました。この地に民主主義が根を下ろし30年になる2017年に、これからは、われわれが東アジアの過ぎし時代を振り返り、整理する責務を果たす

べき地点に来たと。いわゆる、臣民から国民へ、そして、国民から市民へと発展、成長してきたこの地の近代の旅程と、その中のわれわれの営みの姿を振り返ることで、未来を描き計画すると。3つ目ですね。東アジアでの民主主義の後退だとか、新冷戦時代がほのめかされる中で、HK + アジェンダの、ポスト帝国の文化権力と東アジアは、日本学研究所が、2017年当時、去る24年間、一貫して蓄積してきた力量を結集して、今後7年間、いわゆる、東アジアの相生と共存への貢献を目指すというのが企画の趣旨でありました。

このような必要性というものは、これは、ここまでは2017年ですけれども、これは、上から飛んできた矢印のように、中国、日本、アメリカが、それぞれ、東アジアのポスト帝国時代の同床異夢という感じで、逆に言えば、閉鎖的な、または、いわゆる、アメリカファーストみたいな発想で、どんどん、まず国際関係が変わってくると。ここには、基本的には、復活する帝国の記憶と欲望があるというふうに見まして、帝国の記憶と欲望、または願望が、1945年を境に消えてなくなったのではなくて、隠蔽され、身を隠しながら息づいていた、それが、2017年当時には、国際情勢に表れるように、帝国への欲望復活の信号が公的に表れていると、そういうふうに見て、そういう状況の中で、人文科学は一体何ができるのかというのが、アジェンダの起点でした。

目的は、基本的には和解と協力、あとは共存ですね。このような、ポスト帝国時代の帝国の記憶と欲望に対する批判的認識、または、生活者の転覆的経験の発掘と省察とか、あとは、脱帝国の統合的展望と東アジア学というものこの構築を、どこまでできるか分かりませんが、こういうことを目指して頑張っていきたいというふうに思っております。

ところで、こういうような背景には、韓国の民衆の立場から見た近代の展開というのが、どうしても、韓国人であり、激動する時代の中で生きておりますので、こういう、歴史的、民衆という立場から見た近代の展開という意識を、どうしても持つようになります。45年から87年まで見た場合に、ずっと大きな事件ばかりでして、例えば、いわゆる朝鮮戦争という韓国戦争がありますし、ベトナムの派兵もありますし、それに、4.19革命で、李承晩政権

が学生のデモにより崩壊しますけれども、その後、5.16 軍事クーデターで、朴正熙が政権を握り、それで、1979 年には朴正熙暗殺があって、80 年には光州民主化運動が起こって、87 年に民主抗戦があると。こういう感じの時代でしたね。もちろん、1987 年の民主化獲得は、決して単発のものではなくて、70 年代後半から始まった、大学を中心とする民主化運動の蓄積の結果だったのですけれども、このような過程を経て、いわゆる、88 年のオリンピック。つまり、民主主義を勝ち取った民、民衆と、民主主義を守るという強いエネルギーが、例えば、17 年の朴槿恵大統領弾劾にもつながっているのだというふうな見方が、韓国では一般ではないかと思っております。

これを、例えば、表にまとめると、こういうふうな、1945 年から歴史の展開を、大ざっぱですが、まとめると、こうなります。違う話ですが、例えば、こういうような歴史の展開の中、1960 年初頭に、日本関係の学科が大学に設置され、73 年に日本の学会ができたということはどう捉えるのかということも、考えてみても意味があるのではないかと思います。つまり、先ほど申しました、翰林大学の初代理事長の、隣国という不変の関係という意味をもう一度考えることができるのではないかというふうに思っております。

つまり、大韓民国憲法の第 1 条 2 項の、大韓民国の主権は国民にあり、全ての権力は国民から出ると、つまり、国家とは国民にあるという話、つまり、憲法第 67 条の、いわゆる、大統領直接選挙、これだけのために、そういう、10 年近い民主化運動があったと、そういう意味では、最近の、例えば、ミャンマーとか、去年の香港のあたりは、いろんなことを考えさせられるという部分があると思います。

次は、これは『1987 年』という映画なのですが、映画を見ている時間的余裕がございませんので、後ろのほうに、エンディングに実写の部分がありますけれども、そこだけ少し見たいと思います。これは、延世大学の前で、催涙弾の直撃を受けて亡くなられた李韓烈さんの写真ですね。彼が映画の主人公になっております。これは彼の葬儀のときですね。葬儀のときの写真で、これはデモ中の写真で、これは光州事件の、80 年もそうでしたけれども、これは 87 年の写真、映像だと思います。こういう感じで、白いハンカチとかで手を振ったりしているのが、学生のデモに民衆が賛同しているというあ

れでして、各地方における学生のデモとか、タクシードライバーのあれとか、そういう映像、当時の映像、これは趙寛子先生が私よりもずっと詳しいと思いますが、こういうような状況で。私は84年に留学に行ったので、民主化抗争のときは日本にいました。ただ、学部に入學したのが80年入學だったので、大学にほとんど1年間通えずに、完全に、要するに、空挺部隊によって校門前が閉鎖されていたりという時代の中で、民主化運動を行ったという経歴が、というか、その時間がそういう、まだ昔ではないという、民主主義に対するいろんな熱望みたいなものを持っているというあたりが、韓国の、例えば、朴槿恵大統領の弾劾にもつながっているというように考えております。時間がちょっとかかりますのでこの辺で飛ばしますけれども、これは、葬儀のときに、ソウル市庁前に集まった、要するに、市民たちですね。おおよそ100万人が集まったといわれております。87年の4月9日の葬儀のときで、この時点では、既に、大統領直接選挙を受け入れるという宣言があった後の葬儀であります。

次に参ります。つまり、先ほど出したものと同じページですけれども、例えば朝鮮王朝時代、または帝国植民地時代の臣民、公民として要求されていた民衆ですね。それが、韓国（朝鮮）戦争の後には、軍事政権が入ってきて、要するに、善良な国民であることを要求されている時代、それが徐々に、市民として積極的に、国の政治とかいろんなことに声を出すようになったと。市民への転換というのが、民衆という立場から見たときの、韓国の民衆の立ち位置の変化であったというふうに捉えております。ポスト帝国の文化権力というときに、やはり、権力側から要求するいろんなことへの構造化に反発するような、市民、民衆の動きというものも重要な要因ですので、そこには、このような、実際に韓国で起こった、民主化運動の内容というものが含まれているのではないかとこのように考えております。民というものを中心に置いて、われわれがどうするかによって、次の世代が、例えば、国民とか、公民とか、市民とか、などなど、いろんな民となれるのですが、それが決まってしまうわけですね。

東アジアほどナショナリズムの強い地域はないというように、私個人としては思っております。日本と韓国は、単一民族主義というイデオロギーを標

傍していることで、より排他的な境界線を明瞭にしているという、自ら解決すべき問題を持っており、中国は広大な国土を持っており、単一民族を主張できないという現実から、中華というような、またはそれに代わるイデオロギーを持っています。このような国民国家論を、現実的に完全に排除することは難しいと思いますが、民がもっと尊重され、中心になるような方向へ行くべきだという感じで思っております。

つまり、ポスト帝国の文化権力と東アジアというようなテーマで今やっております。これだけではなくて、これは私が全てやっているわけではなくて、初代の池明観先生からずっと継承している、翰林大学日本学研究所の方向性といえますか、それを、私は踏襲してやっているだけなのですが、それはやはり、アジアの和解と共存ということにあると思います。こういうことに、とてもとても微力であるかもしれませんが、何か貢献することができる研究所であることを目指しております、そのための研究所としての責任、責務を果たしながら、研究をしながら、図書館やデータベースを充実するということをやっております。

ちなみに、池明観先生は、今、約 100 歳でありますけれども、まだ元気でいらっしゃって、今でも日韓関係のことをとても心配されておりますし、このような状況ではいけないというようなことをおっしゃっております。先ほどの『池明観日記』を含めて、池先生のインタビューを記録して後代に残すということも、東アジアの和解と共存という問題に、少しでも寄与できる、貢献できる作業になるかなと思いつつながら、基本的には、所長の私の能力不足で、思っているようにはいかないのですが、そこは、そのうち、次の所長がいつか入ってくれば頑張っていたきたいということで、今できることをやりながら、東アジアの和解と共存ということ、もう一つは、これをやるためには、いわゆる、韓国から見た日本研究という二項対立的な、支配者と被支配者、加害者と被害者という二項対立的な視点だけではなくて、アジアの中の日韓関係であり、東アジアという観点から捉えるという視野の拡大も、われわれ韓国の日本研究には必要ではないかというふうに感じております。

ちょっと大ざっぱでまとまらない発表で申し訳ありませんけれども、今朝、作り始めた、夜中の 2 時から作り始めたものですので、ちょっとまとまりが

ないというのを申し訳なくと思いますが、このような感じで、こういうことをやっている小さな研究所が韓国にあると、それで、韓国の日本研究と、日本の韓国研究が、また協力しながら何かできるような、小さな起点になればと願いながら、お粗末な発表ですけれども、この辺で終わりたいと思います。

最後に、こういう感じで、出している本は、右側にあるのが、これが、『朝日新聞外地版』です。取りあえず本で出していますけれども、先ほど申しましたように、最終的にはデータベース化します。これは、日本学叢書は、100冊完結しているやつで、このような本をハングルに訳して出しているというのが、先ほどの出版事業です。これは大学の全景ですね。こんな感じで、ここが春川市で、山があり川が流れていて、ここが大学です。大学というところで、こういうところで、のどかなところですけども、人口30万に満たない、ここで研究をやっているのが翰林大学の日本学研究所です。以上、ご清聴ありがとうございました。

鍾：どうもありがとうございました。(拍手) 非常に内容の濃い、刺激的なお話で、大変勉強になりました。非常に内容が多くて、ちょっと時間をかけて消化したいですね。次の趙先生をお願いする前に、5分ぐらい休憩をとりたいと思います。徐先生、どうもありがとうございました。

徐：いや、どうもありがとうございました。

山：ありがとうございました。

鍾：講演会を再開したいと思います。趙先生、もう始めて大丈夫でしょうか。

趙：はい。

鍾：では、講演会を再開したいと思います。先ほどご紹介いたしました、ソウル大学日本研究所の趙寛子先生に講演をお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

趙：皆さん、こんにちは。こういう場にお招きいただいて、本当にうれしく光栄に思っております。私は、ソウル大学日本研究所の活動をご紹介した上で、自分の研究を紹介しろという、そういうふうに言われましたが、先ほど、徐先生も、ご自分の能の研究を語られたのですが、私も少し、それを加える形で発表をいたします。

このシンボルマークが、ソウル大日本研究所のシンボルマークです。設立されたのは、先ほど徐先生が2003年と書いてくださったのですが、実は2004年ですね。2004年に国際大学院に設立されました。でも、その前の基盤になったのが、1995年の日本研究室という一つの研究室だったのですが、これは、地域研究センターの地域総合研究所の中の一つの研究室でありました。この地域研究センターが、後ほど国際大学になって、そこで、研究所として門を開いたのですけれども、このとき、日本国際交流基金の支援がありました。最初に立ち上げた方は、金容徳先生です。初代所長の金容徳先生は、アメリカ留学帰りの方です。アメリカのハーバード大学で、日本の地租問題を専攻された方でした。この方は、本当は人文大学の東洋史の先生です。本来は、この方が人文大学に日本研究所を開こうとしたら、すごく反対されて、その後、社会科学大学の、だから、理工系ではなくて人文社会系に日本研究所をつくろうとしたら、やはり強く反対をされて、それで持ってきたのが、この国際大学院であります。国際大学院は、当時、新しく立ち上がった、つまり、97年に大学院として出発したのですね。そこで、ちょっとオープンな心、マインドが開いているところだったので、ここでは、大学内部での日本専攻の先生方、学生、大学院生方が、ここで自由に集まって、濃密な研究をここから始めたというふうには私に言われました。この当時、私は日本におりましたので、この事情は後で聞いているわけです。

この研究所が自分たちの力を発揮するようになったのが、2008年からです。何かというと、当時、韓国で、HK事業といって、人文韓国、Humanities Korea という、こういう特別な研究プロジェクトを立ち上げました。そのとき、日本研究所が、海外地域研究所として選定されて、10年間、年に人件費を含めて8億ウォンと、かなり多額の研究費を受けることになりました。そこで、10年間に、HK教授を、専任の教員ですね、研究所の専任の教員を6名採用しました。私は、こちらに2010年9月に採用されました。それで、8年ぐらい、この事業を一緒にやらせていただきました。その後、いろんな活動の中で、一応、ここに書きましたが、いろんな活動をしましたが、先ほど、徐先生や他の会議の先生もおっしゃったと思いますが、東アジア日本研究者協議会の設立に、当時の朴喆熙さん、国際大学院の日本学研究の先

生ですが、政治学ですね。この先生を中心に、日本研究所がずっと中心的な役割を積極的に働いたという意味で、ここに書いておきました。

ただ、ソウル大学の内部にいろんな事情がありますね。どういう事情かというと、このHK事業で活躍している研究所が5つあります。つまり、HK事業に選定された研究所が5つありますが、その5つの研究所で、HK教授という専任を雇っている。この雇っている先生方を中心に、研究所を中心に研究活動をやるという、そういう意味ですけれども、つまり、学部の先生方、実際に授業をされている先生方から、この体制、研究所中心の研究活動を支援する体制は、不平等、公正ではないという、一応、学部の不満もあるわけですね。だから、こういう問題で、人文学研究所というところで、研究所と大学の中で意見が一致しないということで、何かというと、HK事業を続けると、HK+事業、これに応募することができなくなりました。だから、5つの研究所の中の一番大きな研究所であった人文学研究所が、HK事業を一段落したとき、10年間の事業を一段落して、その後のHK+という事業に入れなくなったのです。大学の内部の事情で応募ができなくなったのです。そういう問題で、一応、今現在、ソウル大学でHK+事業をやっている研究所は、日本研究所だけです。1つだけです。徐先生の翰林大学の日本学研究所も、HK+事業を今やっておられるのですが、HK+事業を、研究所を中心にやるということ自体が、必ずやりやすい状況ではないということをもまずご理解していただきたくて、事情を説明させていただきました。

ただ、ソウル大学の日本研究所は、学内のこういう利害衝突問題、つまり、学内の葛藤のような問題からは、ちょっと遠ざかっている。つまり、ソウル大の中で日本研究をされている教員の方、先生方は、ある程度、マイノリティの立場ですね。みんながそれを共有しておりまして、お互いに協力し合おうという雰囲気になっているので、今の日本研究所は、それほど大変な立場ではなく、何とかやっていけるような状況ではあります。そこで、日本研究所の場合、大学の中で研究所評価をしておりますが、それを3年に1回、評価する制度がありますが、そこで、3回連続、最優秀研究所として選ばれました。やはり、HK事業というものをやっているもので、その分、業績が出ている、そういうことで、この評価を受けることができました。

ただ、先ほど申し上げたように、1年間の空白があります。2018年の8月にこの事業が終わって、その後、1年間、応募することができなかったので、先ほど申し上げたような大学の事情で、この研究財団に、うちが、HK+事業を続けてやりますという、そういう応募をすることができなかったので、1年間の空白の時期は基金がなかったのですね。そのときに、研究所の教員が、みんなちょっと緊張して、お金をどこからか持ってこないといけない、稼がないといけなかったのです。そのお金稼ぎというか、言い方は悪いのですが、それをちょっと気にしていたときに、幸い、企業のほうの奨学財団から支援を受けることになりました。それで、冠廷というところと、日本の東芝国際基金から支援していただいて、1年間の空白を、運よく乗り越えることができました。さらに、2019年9月に、7年間続ける、HK+事業に選ばれました。ちょっと説明がくどくなりまして、申し訳ありませんでした。

日本研究所は、先ほど、金容徳先生のとくに設立されるとき、日本研究の活性化と日韓相互理解の増進というのを目標として立ち上げました。金容徳先生が歴史学の先生だったので、日本の昨日と、歴史性を強調しますね。あと、今日、現代性ですね、を通して、人類の未来像を描きますというような、そういう設立の精神です。つまり、日本を歴史的に理解し、また、同時代の問題を研究して、その展望を人類社会、もっとより普遍的な、そういう未来を開けるところに、私たちが何か寄与したいという、そういう希望で、日本研究所は出発しております。人文科学と社会科学の学際的な研究と、日本の現場を大事にするような、そういう研究のスタンスもっております。さらに、現代社会の問題、日本社会の問題が、グローバル社会の問題であるという、そういう認識から、いろんな問題にも取り組んでおります。現在、日韓の未来志向的な関係を構築するために、うちの研究所の先生方は、新聞のコラムとか、世論を動かすオピニオンリーダーとして活躍される先生方も結構おられます。朴喆熙さんもそうだったし、今現在は、南基正先生と、ご存じの方が結構いらっしゃるかもしれませんね、頑張っておられます。HK事業などに基づく共同研究、学術活動を大事にするし、あとは、HK事業自体が、社会的な還元を大事にする事業なので、どのように社会に還元したのかとい

うので、研究所の評価もされております。

主な研究活動は、ファンドによる活動ですけれども、共同研究と研究支援、学術会議、または講演会を開くというふうな形です。専任の教員が6名で、HK事業をやると、非専任を雇うことができます。以前、HKの1段階のときは、非専任の方を3人か4人までも、一緒に研究されたことがあります、今現在は2人の方です。他に、学内で兼任の教員が加わるし、学内外で、韓国のみならず日本でも参加されることがありますので、共同研究もおられるし、あと、客員、招聘研究員がおられます。HK事業はもう終わりましたが、研究アジェンダは、「現代日本の生活世界研究における世界的拠点の構築」です。大げさに世界的な拠点という、書いてありますが、これはやはり、HK事業で選ばれるためには、こういう大きな展望を出さないといけないという戦略もありますが、でもそれは、政治的な戦略だけではなく、韓国で日本研究をやる立場として、より普遍的な世界の問題に取り組み、世界的な展望、世界的な視点というものを常に逃さないという、そういう意志の表れでもあると私は思っております。東芝の基金を2019年の危機のときに頂くことになりまして、3回の学術会議を3年間にやります。

そのとき冠廷という韓国の奨学財団から、結構大きな金額、2億5,000万ウォンを頂いたので、それで共同研究も行い、共同研究支援も行いました。つまり、日本学研究支援というものがありまして、これで、ソウル大の人類学の権肅寅先生と、日本の関西学院大学の研究グループ、山先生もそこに参加されていますが、両者が一緒にこの研究支援を恐らく受けておられると思います。それから、HK+事業に参加して、今現在はポスト地域学というタイトルを付けて、「ポスト地域学時代の日本生活世界探求」と書きました。先ほど、生活世界研究ということについては詳しく説明していませんでしたが、これはやはり、いろんな共同研究をやるのに、こういう生活世界というタームで、いろんな概念を含める、つまり、より良い研究の土台をつくらうとした、そういう方針でキーワードにしたのですが、それを続けながら、それを継続させながら、どういう新しい研究視点を提示するかという、それで、研究所の専任の6名がいろいろ会議をしました。そこで出したのが、このポスト地域学という概念です。

なぜかという、90年代から、韓国で日本学が、地域学として盛んになりました。それで、多くの研究成果も出したと思います。そこで、地域学としての日本学が、今後、もっとより良い方向で発展するためには、やはり、今までの地域学から少し拡張しないといけないという問題意識があったのです。それで、日本研究ということに閉ざされないために、ポスト地域学の概念をとっているし、あとは、この時代の地球、全ての地域の問題が一つにつながっていろいろ問題が起こっているということをもっと含んで、それで、新しい知識生産が、もっと新しい視点での、新パラダイムの何かの研究をしないといけないという、そういう焦りもあって、だから、ポスト地域学とは何だ？と言われても、確実な答えはまだ用意できてはないと思います。でも、そういう問題意識で常に挑戦していています。

それで、Japan Foundationの支援も続けていただいているので、日本専門家招聘セミナーというところは、韓国で博士学位を取った新人の研究者を招聘することもあるし、海外におられる、日本人でもいいです、日本学の専門家が韓国にいらしたときに、この場所、ここで講演することができます。皆さんの中でも、こういう、韓国に来られる機会があったら、ぜひ、研究所に連絡していただければ、こういう場を、チャンスを与えられると思います。火曜セミナーといって、火曜日にやっております。

さっきのHK事業は、10年間続けたので、3段階に分けて、このような順序でやりましたが、生活世界の構造変動というのがキーワードでした。戦後日本社会が、90年代以降、大きく変わっている、その側面をどのように捉えるかというのが課題でした。4つの研究室でこの研究をやっております。後で、ホームページでご紹介できればと思います。また、ポスト地域学自体の研究としては、キーワードが2つありまして、日本型資本主義研究、日本型民主主義研究。つまり、日本の景気、つまり、失われた20年、失われた30年が続く日本の状況をどのように見るかということと、あと、韓国では、日本が保守化している、右傾化しているというふうなことを常に言っているのですが、日本の民主主義の現在とはどうかという、それをまず点検するような研究を始めようとしているのです。詳しいことは、また、ホームページでご覧いただければと思います。これは2つの研究クラスターということで、

ちょっと形を変えました。冠廷プロジェクトで、先ほど、関西学院大学との共同研究を支援するのは、高齢化社会、災害問題をテーマにしております。

全ての活動は出版につながっております。『現代日本生活世界叢書』というのは、これは、HK 事業の成果です。『SNU 日本研究叢書』というのは、日本学研究支援での結果、成果をここに出版します。あと、学術誌、雑誌として、『日本批評』というのを年に2回刊行しております。韓国で、いろんな、日本学研究の優秀な論文を英語に翻訳して紹介する、『Seoul Journal of Japanese Studies』という雑誌も発行しております。また、さっき、講演会とか、いろんな方の講演会の中で、韓国の大衆に紹介したいものは、『Reading Japan』といって、教養図書として出しております。また、日本研究所の先生6人が、一つの本を出しました。これは、『日本を理解する六つの視線』というのですけれども、理解しにくい、理解するのにちょっと複雑な隣の日本をどう見るかということですね。ナンガーマーニューウというのですが、直訳すると、困ったな、隣の人、困ったなという意味ですが、直訳すると、また誤解も生じますので、これは一応、韓国語にしましたが、今現在、韓国で、反日感情がちょっと高まった時代に、研究所の教員たちが、何か社会に、日本をもっと理解するような、そういう、分かりやすい本を出そうとして、出しました。でも、これは、うちが企画したよりも、うちの研究所で、つまり、大衆講演、青少年向けに、大衆講演をやりました。その企画を見つけた出版社の編集者が、ではこの本を出しましょうということで、そういう依頼を受けて、この本が出るようになりました。かなり反応はありました。それで、日本研究所の活動をちょっとご紹介させていただきました。

それから、私の研究ノートというか、これに移りたいと思います。私の場合は、ナショナリズム思想にこだわってきました。それを見る観点というのは、単に、日本ナショナリズムを理解しようとするだけではなくて、日韓のナショナリズムが背中合わせの同時代の知であるという、そういう観点から見ることです。

もう一つは、現代、戦後になり、もっと戦前からそうかと思いますが、戦後の日本認識や韓国認識は、左右、やはり、イデオロギー的に左派と右派が別々の視線で見ているわけですね。その問題を含めて、でも、実際の歴史の

変動というものは、単なる対立だけではなくて、それがこじれた形でもあるし、意図しないで、でも合作している。つまり、思わぬ効果としては、左がこのように動くと、右がこのように動くとか、こういう歴史の動きの真相をもっと明らかにしようとして、それで、左右合作という視点から歴史を見ようと、そういう2つの視点があります。

そこで、この視点をもう少し自分の研究で説明させていただきますと、私が最初に、日本のナショナリズムに興味、関心を持って研究したのが、修士のときの本居宣長でした。本居宣長が、日本という和合の場をつくり上げるために、どういう、統合と排除の道、その方法をとったのかというのを見たわけですが、でも、その論文を書いた後に自分が感じたのは、私にとっては、宣長が問題ではなかった。韓国のナショナリズムが問題であったということ、それに気が付きました。それで、博士課程に上がったときに、韓国の2人のナショナリストがいますが、申采浩という人と李光洙です。申采浩は、非妥協的なナショナリスト、つまり、日本に常に抵抗していた、それで、旅順の監獄で死んだ人ですね。もう一人は李光洙という人で、妥協している、つまり、韓国では親日反逆者として、この当時、広く叩かれる、批判される人でした。でも、私は、この人からは、ナショナリズムではない、同時代の暴力批判思想の可能性をもっと浮き彫りにするような、そういうアプローチをして、また、李光洙の場合は、この人こそナショナリストであったというふうに、むしろ、逆転的な解釈、逆説的な解釈をしました。それで、親日ナショナリズムという言葉が付けたときに、韓国では、これは形容矛盾である、成り立たない、両立できない言葉というふうに見る人もいたのですが、やはり、こういう視点が必要であることを認められる方も多かったのです。また、日中戦争期の朝鮮学が、当時の日本における日本学ブーム、国学ブームですよ。それといかに連携しているのか。つまり、韓国では、朝鮮学ブームは、日本に抵抗するような知として捉えてきたものだったのです。そうではなくて、これは連動して、抵抗精神がなかったわけではないのですが、日本の欧米に対する抵抗精神と肩を並べて一緒に動いていたんだということを証明するような、そういう論文でした。

その後、2006年に書いた論文は、植民地時代の知識人が北朝鮮に上がつ

て、どういう運命をたどるかという問題だったのですけれども、やはり、戦時総動員の体制みたいなのは、冷戦を迎える朝鮮半島でも、同じく反復されている。だから、韓国のナショナリズムは日本の植民地主義に対する抵抗であるというふうな、二項対立的な捉え方を乗り越えようとしたもの、そういう視点でした。それを、ここまでの作業を集めて、有志舎で、こういう、『植民地朝鮮／帝国日本の文化連環』という本を出しました。ここで、私が反復する植民地主義と書いたときには、韓国内部における植民地主義を批判しながら、自分の内部の植民地主義がいかに働いているのかということまで書いたつもりですが、読者がそこまで読んでくださったのかは、まだ私も分かりません。

それから、この2つの論文ですが、HK 教員は、授業をやらない分、研究業績が多くないと困ります。首になります。ということで、私はこの論文を *Inter-Asia Cultural Studies* という英文雑誌に発表しました。やはり、これは、50年代の朝鮮学校の民族教育運動を捉えているのです。でも、2010年代以降、当時日本では、朝鮮学校に対する学費支援をしなかったということで、かなりもめている時代だったのですね。そこで、私は、50年代のこの時点で、在日朝鮮人の民族運動が、いかに、日本の日本共産党を中心とした民族運動、つまり、アメリカ帝国に抵抗するような、そういう日本のナショナリズム復興とつながっていたのか、一緒に連帯していたのかを明らかにしたものです。その後、これは、つまり、右翼思想ですね。右翼思想の復興と左右合作の思わぬコラボレーションというふうな、そういうことですが、意図しないコラボレーションというのですが、これは、私は、橋川文三のような方は、若いときに日本共産党関係の雑誌に勤めたことがあります。こういう、ナショナリズムの、むしろ協同主義的な、そういう側面を捉えようとした、新しいナショナリズム研究のブームが、50年代末ごろから日本で盛んになっていくのですね。それで、北一輝に対する再評価とか、石原莞爾のアジア主義に対する研究とかが、いろんな場面で、左右ともに浮かび上がったと思うのですが、こういう流れは、やはり、50年代の朝鮮戦争の時代に、日本のナショナリズムが復権された。つまり、ナショナリズム自体を、アメリカに対する抵抗の思想として捉えようとする動きが、単に在日朝鮮人だけではなくて、

日本のナショナリズム運動にも影響し合ったという、そういうことを明らかにしようとしたものでした。

ちょっとおかしくなりましたが、それで、2010年9月にソウルに滞在してから、2018年ごろまでの自分の問題意識は、さっきの話とつながりますけれども、やはり、韓国における歴史認識の二項対立のフレームを、それを乗り越えようとしたものです。だから、複合的な関係性の真相をもっと明らかにしようとするものだったと言えます。在日朝鮮人の知に関する自分の関心は、日本にいるときから少しずつたまっていったのですが、でも、日本にいたときは、在日朝鮮人研究をできなかったのです。でも、韓国に戻ってから自分が書いた論文が、『『民族の主体』を呼びかける在日朝鮮人』といった、この論文でした。ここでは、これと、時間がなくて少し合わせてご説明させていただきます。

それから、2016年に、やはり、在日朝鮮人、知識人の民族ディスコースを、ちょっと批判的に見ようとした論文を書きました。これは何かというと、韓国に戻っていったら、徐京植さんとか、金石範さんとか、在日朝鮮人の知識人の方が、いろいろ韓国に戻られてとか、その本が翻訳されて、いろいろ活躍されるのですが、そこには、こういう複合的な関係性が伝わらない。つまり、抵抗民族主義、だから、日本はいまだに植民地主義を続ける国であって、在日朝鮮人はそれに抵抗することが正しいというふうな、そういう観点が常に、90年代以降、2000年代以降の韓国で、その形で繰り返されるのはちょっとおかしくないかというのが私の考え方だったので、もっと在日朝鮮人の立場が、いろいろ、在日朝鮮人の顔が1つではないと、声が1つではないということも、もう少し韓国に訴えようとしたものがこの2つの論文でした。あと、嫌韓問題が、韓国社会でも問題になったとき、嫌韓の問題と反日の問題が、いかに融合しているのかという、そういう、だから、お互いに対立しているけれども、お互いの声に応えようとして、エコーで鳴らす、そういう嫌韓、反日という問題を論文にしました。

あと、その後、2015年に書いたこの論文は、「在日朝鮮人の言説に示された『棄民意識』を越えて」というのです。これは何かというと、在日の方が、北からも捨てられて、日本からも捨てられて、韓国からも捨てられたという

ふうな、こういう棄民意識を持って、自分のアイデンティティーを在日として立ち上げようとした。そこで、政治的な主体性を、こういうふうに、3つの国からの問題から切り離して、主体性というのは、私は成り立たないと思うのですね。だから、その主体性というものを、もう一度、3つの国からの関係性に着目して、そこからどのように読み直そうかという、そういう問題提起をしようとしたものではあります。でも、やはり、この時代の自分の観点というのは、まだ未熟であって、そこには何があったかという、北朝鮮が変わっていない。非核化の問題とか、改革開放をなぜしないかという、そういう、北に対する自分の焦りというものが、在日朝鮮人の知識人に投影されて、北の問題について触れていない在日朝鮮人を何か批判している自分がこの中にはありました。今それをちょっと反省的に見ているのですが、なぜかという、今の自分の考えは変わっているからです。

どのように変わっているかという、北は変化したくても、変化できないのではないかというのが私の読み方です。というのは、北が核を放棄するためには、朝鮮半島、韓半島自体が、完全な武力によって干渉されないような状態にならないといけな。もちろん、このとき、北は自分の権力を保つためにそうなんだよというような反論もあり得ますが、でも、それ以前に、私は、北の政権を悪にするという立場よりも、誰も悪にしない、だから、つまり、今までの歴史の矛盾は誰のせいにもしないで、お互いが協力し合って新しい秩序をつくるためには、新しい方法が必要である、完全に新しい観点が必要である。というのは、日本に対しても同じです。私たちは、日本が、今、再武装をしようとしている、あるいは、日本の政治が右傾化しているというふうに批判していますが、日本としては、今の国際秩序、今の米中紛争の中で、日本を守ろうとして、こういう、武装化しようとする、そういう動きに流れていくんだと、これが現実である。この現実で安倍政権を批判しても、また、北の政権を批判しても、回答は出ないんだというのが、今の自分の考え方です。

今、自分はなぜこういうことを言うかという、非核化が問題ではなくて、韓国、北朝鮮の統一というものは、完全な非武装の、武装しない平和統一であって、これができたときに、本当の日本の平和憲法も守れるんだと。今ま

では、平和憲法を守ろうとしない日本を批判してきたり、あるいは、核を諦めない北が問題だと思っていた自分が、今はちょっと考え方が変わって、東アジアの平和のためには、韓半島も日本も、軍備競争から自由になれる、完全に解放されるような、そういう状況を一緒につくり上げないと、武力による防衛論とか、それを維持するための政治的な抑圧は脱皮できない。つまり、それを止めることはできないんだと、こういう意識を今は持っております。それで、全ての犠牲、今までの犠牲を擁護する場合、私は、日本の帝国主義を、今までは、帝国主義は悪として批判したこともあります。でも、その帝国主義までも、ある意味で、長い目で、長いスパンで歴史を見るときは、現在の歴史的な矛盾を育むような動きであって、帝国主義の矛盾を完全に乗り越えるための過去の犠牲を保証するような、そういう課題を私たちに提示した、そういう動きである。今、かなり抽象的な話をしているので、自分の言葉もちょっと整理しにくくなりましたが、中国の軍事大国化を批判したり、米中紛争を批判したりしたときも、私たちは常に、中国が帝国化しているんだとか、そういう批判のやり方をしていますよね。でも、帝国主義が駄目なとき、それを、駄目な方向性を変える方向性というものを新しく見つけるために、過去の矛盾もあった。その矛盾を、私たちが批判するだけではなくて、その矛盾から解答を探すことに、本当の意味の批判のチャンスがあるんだというような、そういう意味での話をしたかったです。ちょっとこんがらがってすみません。ごめんなさい。

もう時間になっているかもしれませんが、私が韓国に来て、ナショナリズムの研究をやったものを、2018年にソウル大出版文化院から出しました。この本は、日本の近代、戊辰戦争から始まっています。つまり、日本近代を、内戦から始まって敗戦に終わったということで、私たち韓国人は、近代日本は最初から侵略の欲があって、朝鮮半島を支配したんだというような歴史認識を持っているのです。そうではなくて、当時の日本がいかに、帝国主義に対する危機意識を持っていたのか、そこで自分が帝国主義の国になっていったのか、その矛盾を明らかにしようとしたのです。だから、帝国主義の矛盾を克服する、さらに、韓国人が日本を批判するだけではなくて、本当の、植民地主義から脱植民、脱冷戦の課題を果たすとは何かというのをここに提

示したかったのです。さっき、私がうまく説明できなかった課題を、ここで、東アジア地域秩序のための思想課題を探るという形で、もう少し書きました。でも、ちょっと時間がないので飛ばしていきます。

さっき申し上げたとおりの、この本を執筆したときの自分の狙いというものです。だから、日本も、最初から帝国主義ではなくて、日本も、本当にばりばりの抵抗の民族主義から始まったんだというようなことをここに書いてあるわけです。そこから始め、日本のナショナリズムを理解しようとしたわけです。本当に、ナショナリズムというものを不偏不党に見るときに、理解しようとするときに、新たな歴史の未来も一緒に探ることができるんだという観点から、左派も右派も批判せずに、何かと一緒に、全ての思想的なバイアスが持つ対立を乗り越えるようなことはどのようにできるかというのを、ちょっと描きたかったわけです。

今現在の自分の関心ですが、今現在、私は、新たな人間科学が必要だと思っています。さらに、教育、文化コンテンツの研究、開発が本当に必要な時代だと思うのですね。この会議は、この前、3月に日韓会議でやりました。4セッションで、コロナ危機と日常の死角地帯ということで、日韓の自殺問題をここで取り上げています。最近、近年、自殺が増えたりとか、また、児童虐待のニュースが、韓国では本当に、この事件の報道が恐ろしいほど連続しています。恐らく、日本では、セルフネグレクトの問題とか、日本でも、児童虐待、ネグレクトの問題は取り上げられると思いますが、こういうことを、一緒にどうやって対応するかという、これが、今後の日韓の研究の課題であると私は本当に思っております。

ここで、『ポストコロナ 何を準備すべきか』という本が、2020年4月に出了たときに、これは3月に、私に原稿を書けという依頼がありました。2週間で原稿を書き上げて、出たのは5月だったと思いますけれども、本当に、売るために作った本でした。売るために作った本でしたが、でも、私はここで、自分の本当の、研究者としての自分の方向性が見つかったと思うのですが、この本を出した後に、大衆講演が、自分に依頼がありました。その大衆講演の依頼があったのは、障害者団体とか、こういう社会問題を抱えているところから依頼があったので、自然に自分も、こういう問題に関心が移り変

わって、今は、市民たちとの研究会もやっていますけれども、これは、100歳時代の生き方はどうすればいいのか。きのうも、実はこの会議をやりました。Zoomで会議をやったのですが、ここで、みんなで、怒りについて、この児童虐待でもそうだし、うつ病とか、こういう問題でも、やはり、現代人が怒りを調節できないという、そういう病気をしていると思いますが、私は、この怒りというのは、現代人が、人間としての自分の理解をしていないからだと思うのですね。つまり、今現在、韓国では、コロナの状況でも、コロナの状況をどうやって生き残るかという場合、株式を買うような経済的な生き残りという、お金の問題として捉えることが多いのですね。でも、現代人に本当に必要なのは、やはり人間の精神、魂の問題かなと思うのですけれども。これをなぜここに書いたかという、この前、久しぶりに、自分に、論文の審査依頼がありました。そこで、国学の文献を読むことになりましたが、そこで見つけたのが、造化三神という言葉でした。

これは記紀神話に出るものですが、この造化三神というものに私が気が付いたのはなぜかという、造化三神の思想が、昔の朝鮮にもあったわけです。朝鮮にも、これは天符経というのですが、これは、日本の『古事記』に当たるような本です。ここにも、天地人という三神の思想がありますが、そこで出るのが、神産巢日ですね。神産巢日というのは、やはり、天地が出来上がったときに人が現れるのですね。この、人を産む、授かる神を、日本でも神産巢日神というのですが、韓国では、三神オバアという、サンシンハルミというふうに言うのです。このサンシンハルミの思想、三神のオバアの思想が、日本でも韓国でも、同じ、同時代の知としてあったんだというのが、最近の私の発見です。この時代の人々が持っていた思想の中で、神は人間であると、私は最近そのように思っているのです。神は人間であって、この魂の衰弱、失踪が、今、現代人の問題ではないかと思うのです。つまり、魂というのは理性がないので、感情的に動くのですね。だから、この魂が本当は知識であることに気が付いていないのです。だから、知識というものを、私たちがもっと強くするような、そういうのが教育であって、その教育をきちんとしていければ、現代人の悩みである、急にキレて自分の感情をコントロールできなくて怒るというふうな、そういうことを調整することができる。これ

を、社会教育として、知識人がもっと取り組んでやるべきではないかというのが、私の今の問題意識です。

ここで、魂というのをせっかく出したので、韓国語で一つ、こういう言葉があります。ファネダというのは、これは怒る、相手のせいにするのであれば、ホンネダというのがあります。これは魂を出すという、このホンは魂ですね。魂を出すというのも、これも、やはり、怒ることと似たような意味ではありますが、これは相手のために叱るという意味です。それで、相手のために叱れば、相手のほうが頭が下がる、頭が下がって、それが自分の反省になる。相手が、怒る人が、魂を出して私を叱れば、私はそれを吸収して、自分が間違っているということとか、そういう自己反省ができる。こういう思考のルーツというか、これを発展していくのが大事であって、そのために、人間というものが、単に肉体だけではなくて、こういう精神の生活をもっとすべきだという、こういう観点からも少し、今後、自分が取り組んでいきたいという希望を持っています。

話がまとまらなくて申し訳ありませんが、これで終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

鍾：どうもありがとうございました。とても多岐にわたる、示唆に富んだ講演をいただきまして、ありがとうございます。そしたら、次は、山先生に短いコメントをお願いしたいと思います。その後、質疑討論に入りたいと思います。

山：徐禎完先生、趙寛子先生、ありがとうございました。5分か10分ほどコメントの時間を頂いていますので、少し僭越ですけれども、感想的なことを述べさせていただければと思います。

まず、徐禎完先生のほうのご発表は、最初に、韓国における、主に戦後の日本研究、日本学の流れについて、大変大きな見取り図を出していただきまして、特に大学で、韓国外語大学のほうで、1961年に日語学科ができて以後、日本学、日本学科関係の学部、それから研究所が、どういうふうな流れで出てきたのかということを見せていただきました。その間には、民主化運動とかがあり、その前には、日本への反感から、なかなか、日本学関係の学校、教育研究機関ができなかった時期の話とかというようなことも詳しく

説明していただきまして、そういった、いろんな方々の努力で、韓国のほうの日本研究も充実してきたという経緯が見えてきたかなというふうに思います。

その中でも、初期のころとは別に、中期というんでしょうか、日本に留学して帰ってこられた方々が教員に就かれて、主に日本語と日本文学、語学と文学の先生方を中心に、研究、教育の機関が整備されてきたということで、そちらのほうにやはり研究者の厚みが多くて、政治経済とか社会科学のほうの方々は、その後から少しずつ増えてきている傾向があるのかなというふうに思いました。

それから、また、日本文化という枠で、日本学ですね。日本語学、日本文学、日本学という3つの大きな枠で、主に研究者が分類されているようなところもあって、では、日本文化を扱う日本学の範囲はどこまでなのかというようなことも、いろいろ、韓国の中での矛盾点というか、悩ましい状況があるのかなというようなこともいろいろ考え、状況が非常によく分かりました。

それから、翰林大学の日本学研究所は、今日は、徐禎完先生が少し控えめに説明されていたと思いますけれども、本当に、今の韓国の日本学研究を担う中心的研究機関で、地方の小さな大学で取り組まれているということでしたが、実際は、非常に大きな研究叢書を出されたりとか、資料のコレクションもあって、かなり中心的な役割を果たされている研究所ということです。特に、今日は、人文韓国という、HKといわれるプロジェクトですね。日本で言えば、かつてありました、グローバル COE プロジェクトに相当するようなものだと思いますけれども、億単位の研究費が、数年間にわたって、韓国研究財団ということで、国のほうから支援されるということで、そういった支援で、いろんな大学とか研究所が手を挙げるわけですがけれども、なかなか、その支援を受けられるわけじゃなくて、やはり、そこで選ばれた研究機関が支援を受けているということで、そういうところに、HK と、それからHK + ということで、継続的に、10年、さらにプラス7年の、今は7年のほうの後半に入っていますが、そちらの支援を受けられている代表的な研究所だということも、私のほうから少し付け加えさせていただければなというふうに思います。

それから、HKプロジェクトの、ポスト帝国、帝国というテーマですね。帝国日本、それから、ポスト帝国と東アジアというふうなテーマでずっと研究をされていますが、その中のキーワードの文化権力というのが、一つ、翰林大学の研究プロジェクトの中心的なキーワードになっています。この文化権力というキーワードは、徐禎完先生が、能の、日本の芸能史の中で、能と、時代時代の権力者がどういう関係にあるのかということから着想を得られたキーワードということで、文化権力というキーワードでもって、さまざまな研究プロジェクトが動いています。大きなものから小さなものまで含めれば、いくつもの研究チームがあって、そして、それは年間、いくつものシンポジウムとか研究会が、一年中行われているような状況で、多分、徐禎完先生も、大変、忙殺されて、忙しくて、大変疲れているのではないかと思いますけれども、そういったものを牽引されているリーダーであるというふうなことですね。そのこともお伝え、私のほうから説明させていただければというふうに思います。

そして、特に、きょう、印象的だったのは、徐禎完先生自体が、同時代人というか、韓国の民主化運動を、学生たちが学生運動をしていた時代の空気の中で育って、また、その後の民主化の流れの中で、研究者として日本に留学されて、恐らく、当時も日本に留学するということが自体も、一つの進路として選ぶ上でいろいろ悩まれたと思いますし、日本で留学中もいろいろ考えられて、また、日本で学んだという立場で韓国に戻って、研究者、教育者として生きていくという、その生きていく上でも、いろんな葛藤とか悩みが随分あったのではないかなというふうなことを思います。そうした中で、有名な、池明観先生が初代所長として研究所を始められて、そして、3代目の所長として、長年、それを、今日は、先生は控えめに、思想というのですか、意思というかを、自分は受け継いでいるだけだというふうにおっしゃっていましたが、それを受け継ぎながら、新たな形で展開されているということが、私もプロジェクトのほうに関わらせていただいて、日頃よく知っております。その中でも印象的だったのは、隣国である不変な関係ですね。引越すわけにはいかないと、そういったような状況で、どういふふうにお互い理解していくかという。これは古くて新しい問題というか、常に変わらない

問題として、われわれの、人文関係の研究者にも突き付けられている問題かなということ改めて考えさせていただきました。

また、いろんな映像資料も見せていただいて、当時の雰囲気というふうなものも教えていただいて、こういった、大統領の弾劾の問題であるとか、そういったものが、どういうふうな形で韓国の人に理解されているのかなというように示していただいたので、そういった意味でも非常に勉強になったかなと思います。キーワードにありました、東アジアの和解と共存という大きなテーマ、これはやはり、変わらない、これからも続いていくようなテーマだと思いますので、これは、研究所のミッションのようですけれども、多くの方々が、こういったテーマに共感を持って、関心を持って、取り組んでいただけたらなというふうに感じました。簡単ですけれども、徐禎完先生のご発表についてのコメントとさせていただければと思います。

続きまして、趙寛子先生のご発表ですけれども、最初に、ソウル大学の設立の経緯について、95年ぐらいから日本関係の研究室として出発されて、その後、2004年に、国際大学院のほうで、研究所として出発されて、その後、人文韓国というHKのプロジェクトをとられて、内部のいろんな事情があって、1年あいて、また、HK+を取られたということ、結構込み入ったところも教えていただきましたけれども、これも、恐らく、韓国の中での、日本関係の学科や研究所をつくるということが、実は相当難しい問題だということだと思うのですね。特にソウル大学は、やはり韓国を代表する国立大学ということで、かなりいろんな抵抗もあって、きょう、マイノリティーという言葉もありましたが、日本研究している先生方は、少数派でなかなか苦労されているようなことを聞きました。その話を聞きながら、私も思い出したのですけれども、日本研究所ができてすぐ、2005年の前半ぐらいに、当時の金容徳先生とか韓榮惠先生に呼ばれて、私もシンポジウムに、韓国に行って参加したことがあります。ちょうどそのときに、日本研究所ができて最初ぐらいのイベントだったのではないかなというのを、今ちょうど思い出して聞いておりました。そういった、日本研究所のほうのプロジェクトの中で、関西学院大学が関わっている研究プロジェクトも紹介させていただきました。ありがとうございました。

趙寛子先生のご研究の話のほうに行きたいと思いますが、趙先生は、修士課程ですね。日本に留学されているときに、本居宣長の政治神学ということで興味を持たれて、ナショナリズムの問題に大きな関心を持たれたということで、その関係から、さらに、返す刀でというんでしょうか、韓国のナショナル問題に取り込まれるようになったという経緯についてお話しされていました。ここが非常に、趙先生の自由で面白いところかなというふうに思います。というのは、日本に留学されて、日本研究の専門家をされて、ずっと日本のことをやられる方が多いと思うのですが、同じような問題意識というか、方法論ですよ。自分自身の内側の、自分自身も縛られているような問題に目を向けていくというのは、なかなかできることではないと思うのですが、その後の博士課程では、親日ナショナリズムという、言語矛盾という指摘もされたという話でしたが、そういった問題に取り込まれたと。これは、歴史を見るとときに、今の観点から、左とか右とかいう形で整理することがしばしばなされますが、同時代的な文脈で、知のありようがどうだったのか、そういった思考の枠組みというか、それを支える構造的な縛りの中で、当時の知識人、思想家がどのように葛藤していたのかを見ていこうということかなと思います。

それから、左右合作という言葉もありましたが、これも、右に見えたり、左に見えたり、どこから見るのかによって見え方が変わってくるし、相互に関連しながら影響し合って、1週回ったら、また違ったように見えてしまうといった、複雑な思想の影響関係をどういうふうに把握していくかという、趙先生が考えられた、ある接近の方法として、非常に興味深いお話でした。これ自体についても、また改めて詳しくご講演していただけたらいいなと思いました。

それから、最近の研究テーマとして、コロナですね。コロナ禍が始まってからこの1年間で、先生が取り組まれた話が最後にありました。キーワードとして「魂」という言葉が出てきましたけれども、コロナ禍の中で、経済的な問題でいろんなことを説明しようという方向性が強くなり、それで何かを説明したような気になったりもしますが、一方では、こういった状況で改めて、人はどう生きていくべきか、より良く生きていくにはどうしたらいいか

と考える。魂とか生き方、そういう精神の問題ですよ。キレるとか、魂の衰弱という言葉もありましたが、こういった問題に、研究者としてどういふふうにして関わっていくか。あるいは、社会貢献というのでしょうか、先生は、社会教育という言葉も使われていましたが、そういったところにこれから関心を持って、大衆講演というか、市民向けの講座とか、あるいは道德教育とか、そういったことにも積極的に関わっていきたいというお話もありました。

これらはみんな、さまざまに異なる話のように見えますが、非常に通底しているというか、一貫した関心の下に取り組みられているのかなという印象も受けました。一見すると、児童虐待の問題とか自殺の問題とか、全然違うように見えるのですが、歴史を振り返りながら、あるいは、国際状況を見ながら、今生きている人たちがどう生きていくべきかという、そういった問題に強い関心を持たれているのかなという印象を受けました。ソウル大学の日本研究所では、その他にもさまざまな活動をされていると思いますし、他にもいろいろな研究者の先生方がいらっしゃると思いますので、ぜひ、この機会に交流をさせていただければと感じております。短いですが、私のコメントは以上ということで、お願いいたします。

鍾：山先生の視点で非常にうまくお二人のお話を整理していただいて、とても分かりやすくなっていると思います。ありがとうございます。残り時間は15分ぐらいなのですが、質疑討論に入りたいと思います。

質問者1：UBCのアジア研究科博士課程に在学している者です。私は北米で日本のことを学ぶという立場で、大学院に入ったときに、まず、ポストコロナリズムの問題から勉強したのです。いかに植民地主義や帝国主義が、自分の利益や特権性の土台になっているか、また日本の戦争責任をいかに研究者として関わっていくのか、いかに研究者として担っていくのかということ学びました。今回のお話で、韓国で日本のことを学ぶというポジショニングの中での考え方が、すごく面白くて、すごく感激したのです。そして、皆さんが日本研究を日本語で書かれていることにびっくりしました。それは、日本研究が日本で中心的に行われているから、対話したり問題を共有したりする相手が日本の研究者になる、というのがあると思うのですが、では、英語や韓国語で書くべき必要性みたいなものは、分野の中でどうなっています

か。ざっくりした質問ですみません。

鍾：それは、お二人の先生に対しての質問ですか。

質問者 1：どちらの方でも、お願いします。

徐：私が英語か日本語で文書を書くときという、どうするのかというご質問でしょうか。

質問者 1：やはり、日本語で書くときと英語や韓国語で書くときは、問題設定が違ったりすると思うのですね。あるいは、書くことが違うとか。韓国の日本研究では、例えば、北米の日本研究は、もっと日本語で書いていかなきゃいけないという声が上がっているのですね。対話ができていないという。韓国での日本研究では、どうなっていますか。

徐：私の場合ですと、一般的な韓国人のスタンダードと違ってまして、私は個人的に、日本語で書くほうが楽なのです。1961年生まれなのですけれども、65年に国交正常化で、66年に父親の仕事で日本に渡っています。渡って、大阪にいたのですけれども、それから、8年か9年いて、それで、韓国に戻ったときには韓国語ができなかったのですよ。そういうこともあって、それで、また、高校を出て、大学でまた留学に行っちゃったら、日本語のほうが主流になってしまって、研究そのものを日本語で始めたので、論文は日本語のほうが楽で、プラス、能をハングルで訳すというのが、論文を書く以前に翻訳だけで精いっぱいなのですよ。さまざまな用語がありますから。個人的には、韓国語よりは、研究論文は日本語で書くほうが楽というのがありますし、英語は苦手なので、どうしてもというときは翻訳を頼んでおります。ただ、韓国語で、92年に僕が来たときに、韓国の日本関係の学会で、韓国の投稿者による日本語の論文を受け付けなかったのですよ。それはおかしいだろうということで、僕はすごく反発しまして、当時は、韓国人は韓国語で書いて、日本人は日本語で書けというのですよ。それで、学会に僕はずっと入らなかったのです。それで、多分10年ぐらいかしてから、今は、日本語でも韓国語でもいいことになっています。

質問者 1：そうなのです。それはすごく面白い話を聞けて、ありがとうございます。

徐：そういう状況です。趙寛子先生はまた違うと思いますので、どうぞ。

趙：私は、韓国に来たときに、韓国は、もう既に国際化ということで、日本専攻者であっても英語で発表することが義務でした。私の研究所では、英語で論文発表しないと昇進できないのですね。むしろ、質問者の方がおっしゃったように、欧米で、今、日本語で論文を書こうという動きになっているということは、私たちにはうれしいことです。

この前の3月の会議は、私たちが日韓同時通訳をつけました。でも、最近、いろんな会議がありますよね。YouTubeでストリーミング配信するような会議では、直接、通訳もつけずに英語でやることが多いのです。なぜかというところ、会議は費用がかかるのですね。通訳を使うと、同時中継なので費用が倍かかるのですね。だから、そういう実質的な面で、今後、全て英語の会議になってしまうかもしれないような、危機意識を持っています。ただこれは、AIが同時通訳をやってくれるのではないかと、私は期待しています。だから、言語の問題が一番の問題ではないと私は考えます。むしろ最近、内容があまり新鮮ではない会議が多いので、研究者はこの時代の問題にいかにかえるかということをもっと悩むべきであって、言語の問題はAIに期待しようというのが私の考え方です。

質問者1：ありがとうございます。

鍾：趙先生と徐先生のお話を一緒に考えると、ここ数十年の韓国における日本研究も随分変わってきましたね。日本語の使い方、それから、英語の流行、昇進の基準、判断基準の一つとなっているということは、非常に大きく変化してきていると感じました。

徐：すごく変わりましたね。まず、コロナの前でしたら、卒業前に日本に6カ月とか1年間、留学していない学生はいないぐらいです。ワーキングホリデーだろうが何だろうが、大学でやっている交換留学であろうが、何らかの形で、例えば、1年に1学年40人いるうちに、30人以上は何らかの形で行ってきています。1990年代初期のころだと、予想がつかないような話です。あとは、先ほど、池明観先生のときの大衆文化開放がありましたが、あれの前後によっても全然違ってきたのは、当時は、いわゆる大衆文化が禁止されていたので、学生たちがみんな見たがるわけですよ。教師というのは、留学帰りだから、資料を少し持っているのですね。それで、それを授業で紹介す

ると、みんなすごく集中してくれるのです。だけれども、開放されてしまうと、学生のほうが圧倒的に情報量が多くて、教員がついていけないのです。だから、その手の道具はもう使えなくなりましたね。というぐらいに、今の世代の子たちは、順応力というか、適応能力がすごく早くて、自分に必要だと思えばどんどんやってしまう。逆に、既成世代というのは型が固まってしまって、そこからはみ出るといのは、なんかつらいと、面倒で不便だからやらないという、そのあたりが全然違うので、客観的に見ると、日本の若い世代と韓国の若い世代が、思考というか、どんどん似てきていると。

鍾：そうですね。

徐：国の問題というよりは、いわゆる、環境、文化、生活、流行、その手のほうで共通点ができていて、逆に、政治家や旧世代のほうが、合う合わないということを行っているみたいに、私には見えますね。

鍾：とても面白くて、鋭いコメントだと思います。最近、街を歩きますと、中国語をしゃべっているけれども外見は本当に日本の若者と分からないぐらい似ている人もいると感じていました。恐らく、中国だけではなくて、韓国とか、国の違いは、外見だけでは分からなくなっているのですよね。これはいいことかどうかは別にして、またグローバリゼーションの一部ではないかなと思います。

趙：1つ質問がありますが、この前うちの研究所で、オタク文化について会議をやりました。そのとき、韓国の若者で、日本のオタク文化にはまっている子たちが会議に参加して、二百何十名かが集まってきたのですね。普通の学術会議では、それほどの聴衆があるわけではないのです。かなりの人が集まったのですが、オタク文化というものが、今、日本の若者にとってはどうなっているのでしょうか。研究や動向、オタクの在り方というのをちょっと知りたいのですが。

質問者1：私はまさしくそういう研究をやっていて、今までは、東浩紀とか、いわゆる日本のポピュラーカルチャー文化研究者たちがやってきていたのですが、最近、北米の人たちが始めていて、言説の違いがありますね。日本の研究者は、いかに、そういう、想像力みたいなものがつくられていくのかという話をします。でも例えば、日本のオタク文化は、例えば、ロリコン的

なところがあるではないですか。犯罪的なところ。そういう日本人の想像力みたいなのはどのように説明できるのかといった点に海外の研究者たちは関心があって、アン・アリスンとかは、日本の社会が非常に窮屈だから、そこからの解放を求めるためにオタク文化がとても発達しているといったことを述べたりしています。答えになっているか分からないのですが、すみません。

趙：いえ、ありがとうございました。

鍾：どなたか、趙先生に答えを提供したかったら、ぜひ提供してください。

内田：東洋文化研究所のポスドクの内田です。歴史のことを東大で勉強して研究している人間からすると、オタク文化というのはそもそもアカデミックな話なの？というふうに、最初は思っていましたね。特に学生のときは、アカデミックに研究する対象なのかなとか、そういう浮ついた研究テーマの、浮ついたことに手を出す研究者は、ちょっと自分たちとは違うみたいなことを考えがちでした。ただ私の場合は、途中で1年間アメリカに留学をして、そちらでも割とトラディショナルなことをやっている先生や院生が多かったのですが、日本への留学生とか、日本研究者一般と接するうちに、そういう、現代の大衆文化を研究している人はこんなに多いんだとか、日本語を勉強していく過程で、こういうアニメにこんなに関心を持つ人が多いんだというのを、むしろ再発見していったということが大きいですね。日本で生まれ育った人間からすると、アニメは子どものときに見るものという印象があるので、アカデミックに分析できるとは、ある時期までは思っていませんでした。そういう感じです。

趙：オタク研究者は韓国でも多くはないのですが、この前、会議で、日韓の間でオタク研究者が集まったところ、結構いろんな方がやっておられると改めて感じました。

内田：そうですね。

趙：最近、韓流がはやっているではないですか。研究者の中で韓流を対象にする、そういう動きも出ていますね。

内田：実は、私は韓流の歴史ドラマがすごく好きなので、もし、韓流ドラマを大学生のときとか高校生ぐらいのときに見ていたら、もしかしたら、韓国研究で、こういうドラマのことを調べてみたいとか、なんでこの歴史ドラマ

の隠れたモチーフに共産主義っぽいモチーフが入っているんだろうみたいなのを、すごく勉強していた可能性はあるので、研究関心の向け方というのは、自分の国のときと別の国のときというのは、やはり変わってくるんだなというふうに思います。

鍾：手を挙げている方、お願いします。

質問者2：私は今年、韓国人留学生として東京大学総合文化研究科を卒業して、現在、東京基督教大学平和研究所でリサーチャーをやっております。今日は、大変貴重なお話をありがとうございます。抽象的な質問かもしれませんが、つい最近なのですが、先週、国際基督教大学と長崎大学の共同で、日本と韓国の大学生の、各1,000人ずつのアンケートをとりまして、その内容としては、それぞれの国において平和教育をどのように行うべきかという主題で、アンケート調査を行いました。出版はまだされていないので、結果をここで言ってもいいのかどうかはちょっと分からないのですが、1つだけ気になった結果がありまして、そこは、日本と韓国の若い人たちが、お互いの文化のことはとても大好きだけれども、つまり、興味は持っているけれども、お互いの国のことはよく思っていないという結果が出たのですね。国について興味があって、文化とかは学びたいという、パーセンテージとしては60、70%の結果が出たのですが、お互いの国についてはよく思っていないというのが、日本の大学生は韓国に対して60%で、韓国の大学生は、日本の国に対しては80%の、かなり高い結果として表れたのです。それを見て、私たちが今悩んでいるのは、ではどのように、お互いの国を、若い人たちに教育すべきなんだろうという。こういった、政治的な、社会的なミスマッチが、非常に強く残っている状況の中で、どのような教育を、どのような交流、学生たちの交流を行うべきなのかなというので、今日のミーティングでもその話があったのですが、非常に悩ましいなということだったのですよね。韓国にいらっしゃる先生たちは、学生たちに、日本の学生たちとの交流を考えて、どういった心構えだったりとか、どういった態度で交流を行うべきかという、どのような方向性で教育をしていらっしゃるのかというのがとても気になりまして、手を挙げました。

徐：では私から簡単に。極端に申しますと、そのあたりは教育をする対象で

なくて、情報を与えて、学生に自ら選択してもらえればいいかなと思っています。去年、コロナが始まって以降、あとは、半導体関係で両国に問題があったとき、重なっている時期なのですけれども。翰林大学は春川、江原道にあるのですけれども。江原道と鳥取県というのが姉妹提携がありまして、翰林大学の日本学研究所に關係する研究補助員の学生たちと、鳥取大学の学生を、交換というか、交換留学ではなくて、交流会をするという計画があったのです。そのときに、日本の自治体、または、政府、韓国の自治体、政府から、みんながやめておくと、こういう時期にそんなものをやるのではないと、下手したらもっと環境が悪くなるというふうな反対があったのですが、やっちゃいました。やって、プログラムの内容は、まず、鳥取のほうから日本の学生が、確か15人ぐらいか10人ぐらいか来てから、春川に10日間ぐらい滞在しながら、こちらの学生と一緒に何かをやるのです。それで、いったん帰りますして、2カ月後あたりに、今度はこちらの学生が行くのです。行って、10日間ぐらい滞在しながら、一緒に何かをやるのですよね。こちらのほうから行くときに、僕はそのとき、台湾のほうで学会があつて行って、台湾からソウルに戻らずに、要するに、鳥取に寄ってから来たのですけれども、どういう結果が出たかという、鳥取での交流会が終わって別れるときに、みんな泣いていました。日本の学生が何て言ったかという、日本で、たったの2週間で、こんなに心が通う友達は絶対できないと、ところが、すごく親しい友達がいっぱいできたというふうな反応を見せます。

だから、先ほど、今、韓国人も日本人も、若い世代は共通したものを持って、どんどん近くなっているという、そういう分母みたいなのを共有しているのがありまして、そこに、政治とか国境とか国籍とかが入ってくると、ややこしくなるのです。そうではなくて、友達になれるかなれないかというのは、僕のいる立場から言えば、機会だけ、空間だけをつくってあげればなれてしまうのです。それをする、学生たちが、例えば、僕たちがそのときに、政治とかそういう外交問題は触れちゃいけないよということは全然言っていないのです。プログラムを自由に任せただけです。そしたら、自分たち同士できれいにバランスを取ってやっちゃっていますから。

そのあたりは、逆に、既成世代の政治とか、そういう外交が、外交という

ものは、元々、国益ですんで、国益というのは、基本的に、相手に、要するに損をさせることでこっちが利益を取るというのが基本ですから、それを出すのではなくて、人としての交流、友達になるかなれないかという、そういうふうにやれば、すごく問題ないと思いますし、実際に、最近、新入生をとるときに、以前はなかった現象があって、コロナでちょっと落ちましたが、例えば、面接をするときに、40～50人をする、5人ぐらいは、日本学科で勉強して、一回、日本で住んでみたいと言うのです。なんでと言ったら、文化、面白いのがいっぱいあるからと。決して、政治が嫌いだから、日本に行きたくないという人は、初めから日本学科に来ないのかもしれませんが、そういうのがありますから、あまり既成世代の目線で見るとは、彼らの目線で見れば、もっと自然に行くのではないかなというのが私の持論であります。合っているかどうか分かりませんが。

質問者2：でも、本当におっしゃるとおりだと思います。去年はコロナだったからキャンセルになったのですが、国際基督教大学でも、毎年、韓国の大学と学生セミナーをやっていました。そのときに、学生たちが自分たちで主題を選択して、発表して、その後、学生同士の討論をするという形のセミナーだったのですが、基督教大学の学生たちが選択したのが、在日の差別問題とか、あと、歴史教科書で私たちはこういうのを学んだと、もし間違いがあったら、あなたたち韓国の学生たちの意見をぜひ聞きたいという、そういうスタンスで行ったのですけれども、学生たちは、かなり面白く議論をしたり、討論をしたりという、良い場となったと私は感じたのですが、終わってから、基督教大学に大変な苦情があって、なぜそういうトピックを選んできたのか、と。そういうトピックを選んできたのが、私たち、つまり、韓国の方にとって、あまり良いマナーではないのではないのかという、結構怒られたのですよね。なので、私も先生のご意見に大変同感して、それを別に考えなきゃいけないと思います。話したい放題、交流したい放題に放っておくという、自分たちのほうがもっと楽しくやれるからという感じで思うべきではないかなと、個人的な感想でした。すみません。ありがとうございます。

鍾：趙寛子先生、山先生、もし他にコメントがあればお願いします。

趙：私は、もう知識を伝える教育の時代ではなく、文化的なものを一緒につ

くり上げていけるような、シナリオを対話の中で一緒に完成していくような、そういう出会いであればいいと思うのですね。今は情報がたくさんあるので、その情報をどのように見るかという問題ですね。今後は単に教える教育ではなく、お互いに対話するという教育に、議論して相手のことを理解し合うという教育になっていけばいいなと思っています。

質問者 2：ありがとうございます。

鍾：時間もだいぶ超過していますので、山先生のコメントで終了したいと思います。

山：今のご指摘もありましたが、文化の問題ですね。文化の問題、政治の問題、経済の問題、それぞれが非常に連動していた時代と、ある意味、フラットになって、文化交流は全然関係ないけれども、政治になるとそこでつまずいてしまうという。今は非常に、いろんな領域がフラットで、どちらが上でどちらが下とはならないというのが今の状況かなというふうに僕は考えています。こういったものについて、従来の個別のジャンルの研究者が個別に研究したり、文化関係のシンポジウムとかをやったりすると、関係はすごくいいですよという結論になる一方、政治関係になると最悪な状況だというふうになってしまう。それをトータルで見渡す対話の場みたいなのがあまりつくられていないという印象を、特に2年前ぐらいから、関係悪化が叫ばれる上にコロナを挟んでということで、大いに感じてきました。そういった、従来のジャンルを超えた話し合いというか、認識をぶつけ合うような場づくりというのを、ぜひやっていければというふうに感じております。以上です。

鍾：ありがとうございました。だいぶ時間を超過していますので、これで、今日の講演会を終了にしたいと思います。皆さんご参加、どうもありがとうございました。(拍手)

3

GJS「アジアにおける日本研究」 講演会シリーズ 第2回

—— 崔喜植（国民大学日本学研究所 所長・教授）

日時：2021年5月11日（火）16:00～17:30

会場：オンライン（Zoom）

講演者：崔喜植（国民大学日本学研究所 所長・教授）

講演タイトル：韓国の日本研究：国民大学日本学研究所を中心に

企画趣旨説明とコメンテーター：山泰幸（関西学院大学 教授）

司会者：鍾以江（東京大学東洋文化研究所 准教授）

使用言語：日本語

鍾：時間になりましたので、今日の講演会を始めたいと思います。本日も多くの方々にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

今日の崔先生の講演が始まる前に、まずこの国際総合日本学（Global Japan Studies）について簡単にご紹介します。Global Japan Studies、この研究・教育ネットワークは7年前に東京大学で立ち上げられて、その目的は、海外の日本研究を東京大学、または日本国内の日本研究とつなげることを目的にしています。そのための定期的な研究会セミナー、書評会と短期教育プログラムなどを開催してきています。私はこのGJS、国際総合日本学の企画と運営に携わっている鍾以江と申します。今日の司会を務めさせていただきます。また、私のほかにGJSの運営メンバーは内田力さんと、東洋文化研究所の園田茂人教授がいます。

今日の研究会は、今日の講演会はGJSの国際総合日本語学の活動の一環として、アジアの各国における日本研究を、日本語話者のオーディエンスに紹介し、海外と日本国内の日本研究の交流を促進するために企画した、アジアにおける日本研究シリーズ、講演会シリーズの2回目です。

今日は韓国の国民大学の日本学研究所長の崔喜植（チェ・ヒシック）先生

をお願いして、韓国の日本研究についてお話ししていただきます。またこれまでの企画は、関西学院大学の山泰幸教授の力を借りて実現できたことです。企画の段階から韓国の先生への依頼まで、山教授に関わっていただいて、今日の講演会の司会として大変ありがたく思っています。

これから講演会に入りますが、その前に山泰幸教授に自己紹介も兼ねて、今日の講演の講演者の崔先生のご紹介をお願いできればと思います。崔先生の講演のあとに、山教授にまたコメントしていただいて、そのあと質疑討論に入ります。

山：皆さんこんにちは。関西学院大学の山と申します。この「アジアにおける日本研究」というシリーズで、今日は国民大学の崔喜植先生にご講演をお願いしております。

このシリーズのほうを私のほうで企画等、お手伝いさせていただいているのですが、特に前回から韓国の日本研究の先生方にご講演をお願いしているところです。その理由としては、私自身が基本的には民俗学や思想などを基に、日本の思想や文化を研究している者ですが、20年ほど前に数年間韓国に留学することがありまして、そこから主に韓国の日本研究の先生方とのお付き合いが非常に増えまして、ここ20年ほどさまざまな先生方と交流させていただいています。

そういった形で、日本人による日本研究というのは当然たくさんあるわけですけども、そしてまたそういった先生方が日本に留学されてアジアの国々に帰られて、研究者、教育者になって研究をされるということが長年続いていたわけですが、現在は日本のことは日本の研究者のほうが詳しいとは必ずしも言えなくて、むしろアジアの中でも特に研究者の層の厚い韓国の日本研究の学会等に行きますと、ほとんどもうタイムラグがないといえます。むしろ日本の各分野の最先端の、特に人文社会系のトピックなんかは、むしろ韓国の学会に行ったほうが最新の動向をよく見て取れるような状況で、ほぼ同時的にさまざまなトピックが飛び交っているというふうな状況になっています。

そういったこともあって、ぜひアジアにおける日本研究者が日本というのをどういうふうに見ているのかというようなことを、われわれも、日本の国

内の研究者も学んで、相互に交流していければなということで、今回の企画のほうをお手伝いさせていただいております。

ここで少し簡単ですが、崔先生のご紹介をしたいと思います。崔先生は現在、国民大学の日本学研究所の所長をされています。韓国のほうは、主に日本語・日本文学を中心として韓国の日本学関係の学科、それから研究所をつくられている場合が多いのですが、こちらの日本学研究所は日本の政治、政治学を中心に社会科学に非常に特化した研究所ということで、韓国の中でも重要な位置にある研究機関となっています。

恐らくですが、日本で新聞やメディア等で、韓国における日本研究者で、日本の政治、あるいは日韓関係についてコメント等でよく登場される方々というのは、こちらの国民大学の研究所の先生方がしばしば登場されるので、ご存じの方も多いかなというふうに思います。そういった代表的な日本の政治、社会科学に関する研究所ということをまずご紹介したいと思います。

続きまして崔先生ですが、先生はソウル大学の政治学科で学士、それから修士を取られたあとに、日本の慶應義塾大学のほうに留学されて、そして政治学で博士号を取られています。そしてその後帰国されて、現在国民大学の日本学科に所属されて、およびこの日本学研究所の所長をされているということです。

主な研究領域は、日本の外交政策、それから日韓関係、また日韓の間の領土問題等について、ご研究を深く重ねられておられます。それからまた、主な著書としては、もちろん韓国のほうでもたくさんご著書を出されていますが、日本語でも先生が執筆された著書等が何冊かありまして、代表的なものを紹介させていただきますと、共著になりますが『日韓関係歴史 1965-2015』と、これは東京大学出版のほうから 2015 年に出ています。

それからまた、『歴史としての日韓正常化』、その 2 巻のほうの「脱植民地化論」というところでもご執筆されています。これは法政大学出版会から 2011 年に出ています。それから『北朝鮮と人間の安全保障』ということで、これは慶應義塾大学のほうから出版されていますが、いずれも日本で出された本で、日本語で先生のご研究を見ていただける本ですので、ここで紹介さ

せていただきたいというふうに思います。

今日はこのあと、これから崔先生のほうから「韓国の日本研究」と、特に「国民大学の日本学研究所を中心として」ということで、先生が所属されている日本学研究所の活動を中心に、先生自身が現在関心を持たれている研究課題について、自由にお話ししていただくということになっておりますので、これからお話をお願いしたいと思います。私のほうから、ご紹介は以上ということをお願いいたします。

鍾：では早速崔先生をお願いしたいと思います。

崔：はい。紹介して下さった鍾以江先生と山先生に感謝の気持ちを申し上げます。私は2008年、慶應義塾大学で博士を取って、すぐ韓国に戻って国民大学で働くことになって、2019年から日本学研究所の所長になっております。主な研究主題は日韓関係なので、今日の発表も韓国の日韓関係研究を踏まえて、国民大学日本学研究所の成果も踏まえて、日韓関係に関して主に話そうとしております。私が準備したPPTがあるので、それを見ながらお話しさせていただきます。

韓国には日本学研究所が何カ所かあります。ソウル大学にも日本学研究所があるし高麗大学にもあるのですが、ソウル大学は社会学が中心になって、いろいろな活動、研究をなさっている。また高麗大学は文学を中心にして日本研究をおこなっていますが、国民大学は政治学、国際政治に基づいて日本を勉強している研究所であり、今は日韓関係も少し悪いですが、政治的に敏感な問題を積極的に研究して、日韓関係の改善とか韓国の対日政策に役に立つようなことをやろうとしております。

わが研究所の沿革を見ると、2002年日韓ワールドカップのとき、日韓関係が非常に良かったときに設立されました。設立目標としては、総合的な日本研究の場を設けること、また学際的な日本研究をおこなうことでしたが、だいたいわれわれの研究所の研究員たちを見ると、国際政治学者と歴史学者が半分ずつぐらいです。日韓関係というものを歴史的な感覚で、国際政治的な感覚で勉強している研究所であり、主に日韓関係に重きを置いています。それでわれわれはやはり、研究だけで終わってはならない。社会的な貢献をやらなければならないということで、韓国の対日政策、また日韓関係の改善

に向けて学問的な貢献を果たすということも目標として挙げています。

その意味で、韓国の国民大学の日本学研究所は、3段階によって発展されたということを整理したいと思います。最初のところは2000年代ですよね。やはり日本地域研究の基盤をつくるために、第1代所長と2代目の所長さんが「日本型システムの揺らぎと新しい模索」という大きなテーマで、日本を総合的に見ようとする研究をされました。韓国の研究者の間にはいろいろな事業がありますが、そのときには基礎学問研究事業というものがあって、その支援の下で日本型システムに関する研究をやりました。2000年代までは依然として日本の特殊性を強調しながら、日本にある特殊的なシステム、これを日本型システムと名づけて、これについて研究をなさったのですが、このときには政治学といろいろな社会学の先生がたと一緒に共同研究をやりました。

そして3代目の李元徳先生が所長になられてからは日韓関係に専門化します。そのときにも重点研究所事業と土台研究事業というものがありましたが、これを通じて主に外交文書の収集、また解題、そしてそれに基づいた研究、それをやりました。韓国での外交文書と日本での外交文書を集めて分類し、重要な文書に関しては解題し、そしてそれに基づいて研究するというので、国民大学の日本学研究所から日韓関係研究で優秀な研究所に成長することになりました。

そして『日本空間』という機関誌も創刊しました。今は韓国には学術誌が3種類あります。最初は一般の学術誌があって、その次は登載候補誌というもので、韓国研究財団に登載する候補になっているという意味です。そして一番重要な学術誌には登載学術誌という名前が付いているのですが、われわれが発行している『日本空間』という学術誌は、最高のレベルの登載学術誌になっております。それでいろいろな研究者たちがここに論文を載せたいということで、韓国の日本研究の先頭にあると見られていることを自慢に思っております。

そして私が4代目の所長になり、日韓関係を拡大し北朝鮮と日本との研究も含めて、朝鮮半島と日本の関係をやろうと、今取り組んでおります。これに関しては後に詳しく述べさせていただきます。

このように韓国国民大学の日本学研究所は、日韓関係において本当に世界的にも著名な研究所として知られていますが、その成果に基づき、今日はわれわれがやってきた研究について整理し、日韓関係についてお話して、これを踏まえて私は何をやりたいのかということをお話したいと思います。

日韓関係を構造的に理解してみましょう。表を見ていただくと、10年ごとに日韓関係が悪くなるということが分かります。50年代には久保田発言という、ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、植民地支配に関する発言によって、日韓関係が本当に険悪になったこともあるし、また在日朝鮮人の北朝鮮への帰国事業のため、日本と韓国の関係が悪くなったこともある。70年代には金大中拉致事件、90年代序盤には「慰安婦」問題を含めて歴史領土問題で本当に険悪な関係になったこともあります。そして今、2013年からでしょうか、最悪の日韓関係になる。これを詳しく見ると、やはり国際的な政治構造の変化によって、日韓関係が影響を受けるということが分かります。

その中で日本と韓国が新しい国際秩序にどう向き合うのか、どう付き合うのかを巡って、試行錯誤があったと思いますよね。50年代というのはやはり、脱植民化と冷戦という新しい国際秩序の中で、日本と韓国がどんな関係をつくるのかということ巡って、いろいろな試行錯誤をやって、結局65年、日韓国交正常化をやりました。そしていろいろなことがあったとしても、やはり65年体制とも言われていますが、このようなガバナンスシステムが日韓関係をマネジメントしてきたということです。これを私は、日韓関係1.0とも呼びますが、これがやはり90年代になって変わるしかないのでね。

すなわち脱冷戦、そして韓国の民主化、日本の55年体制の崩壊という、いろいろな国際、そして国内的な構造の変化によって、日本と韓国がどんな関係をつくるのかということ巡って、いろいろな試行錯誤をしました。その結果、98年、日韓パートナーシップ宣言を発表して、やはり新しい未来志向的な日韓関係をつくりましょうということで、日韓関係1.0のガバナンスシステムを変えて、新しいガバナンスシステムをつくったということで、やはり日韓関係の2.0の始まりであったと思います。そしてご存じのように2002年、ワールドカップを共催することになって、そして韓流もあって、

そして韓国では日本文化の開放、すなわち韓国のテレビで日本のドラマを見ることができるということになって、本当に最高の日韓関係をつくった経験もあります。

しかし2010年になってからは、やはり脱冷戦の国際秩序とは違う新しい構造の変化が出てきました。これがやはり中国の台頭、すなわち2010年という年は本当に象徴的な年であったと思いますが、中国が日本を抜いて世界的に第2位の経済大国になって、そして軍事力も増やして、今は日本と中国のGDPが1.5倍ぐらいの差があるのですよね。3倍でしょうか。本当に大きな勢力の変化がありました。また日本と韓国の国力もまだ日本のほうが大きいですが、以前と比べてもっと対等化して、そして激しい競争をやっています。

このような構造の変化によって、日本と韓国がどんな関係をつくるのかを巡って、試行錯誤しているのではないかということが私の考えで、いつかは解決されると私は思います。信じています。だいたい日韓関係の3.0をつくって、新しいガバナンスシステムをつくって、日韓関係は両国にとって有益で友好な関係になると、私は信じています。

この日韓関係を構造的に理解するということになれば、やはり構造の変化によって日本と韓国がどんな関係をつくるかを巡って試行錯誤し、その末に新しいガバナンスシステムをつくって協力してきた、というのが私の理解です。韓国人の研究者たちも、このような理解にだいたい合意しております。

ここでもう少し詳しく見てみましょう。これは私の研究ですが、韓国での日韓関係研究を踏まえて整理したものなので、韓国の日韓関係に関する認識であるということです。まずは日韓関係1.0を見てみますと、やはりそのときは米ソ冷戦のとき、冷戦に勝利するためにアメリカが戦った時期なので、アメリカは韓国と日本に核の傘を提供する。そして韓国、反共前線国家とも言える韓国で、基地国家とも言える日本との連携性を通じて、東アジアでの反共体制をつくろうとしていました。そしてそのときアメリカはグローバルパワーとして、韓国と日本とは比べられない大きな力を持っていたと思います。

一方、日本という国はやはりリージョナルなパワーでしたよね。今はも

うグローバルパワーですが、冷戦のときにはやはりリージョナルなパワーとして、国内的にも深い対立もあったし、それで冷戦の国内化を避けるためには、実用的な外交をやるしかなかったので、平和外交の側面が強かった。吉田路線はそうだったと思います。そして普通、アメリカでの研究でもこう言いますが、日本は Reactive、すなわち反応する形で外交をやるということで、平和的な国づくりが進んでいった。

反面、韓国はご存じのように北朝鮮と接近しているし、そしていつ戦争が再び起こるのか分からなかった状況なので、やはり反共という価値を前面化したことでした。そして国力の面ではやはり、ローカルパワーが見られませんでした。そしてその反共のため、すなわち北朝鮮と戦うために、国内政治を高めるしかなかったので、権威主義体制を強く維持したのですが、その中で互いに同盟を結びました。従って日米同盟というものは、やはりリージョナルなアライアンスという側面が大きかったですし、米韓同盟は北朝鮮の脅威に対応するためのローカルなアライアンスになっていました。

それでアメリカはこの2つの同盟を連携して、東アジアでの平和を保つようにしたわけですが、その中で日韓関係というものは本当に難しいものでした。まず日本の場合、吉田路線をやっており、そして深く対立があったので、安保協力というものができなかった。それでその代わりに経済協力の形で韓国の安保問題に介入するという形を取りました。

そして歴史領土問題に関しては、やはり日韓関係のため棚上げするとか、歴史領土問題が政治問題にならないようにさせました。これが日韓関係 2.0 で問題になって、いろいろな問題を起こしてはいるのですが、その当時は相当この機能を発揮したと私は思っております。その代わりに平和を追求しているし民主主義国家である日本と、権威主義の韓国と、そして反共というものを前面化した韓国の間で、価値共同体というものは存在できない状況でしたので、ある程度体制摩擦が起こって、金大中拉致事件というものは、もう象徴的なものでしたよね。

しかし、それにもかかわらず日韓関係 1.0 のときには、アメリカを中心として、日本と韓国が結ばれるという形で、共産主義国家に対応するために協力を進めるという形で、日韓関係がいろいろな問題があってもそれを乗り越

えて、日韓関係が安定的に維持されたと言っても大丈夫だと思います。しかし先ほど述べたように、冷戦が終わって新しい時代になって、そして韓国も日本も国内的に構造の変化に直面して、やはり新しい日韓関係をつくるしかなかったのが、その新しい試行錯誤の末に現れた、新しいガバナンスシステムというものはこれではないかと私は思います。

やはりアメリカは、中国と北朝鮮の問題で日米韓協力体制を強化しようとしてきました。そして日本と韓国が、特に韓国は民主化されて経済成長もできて、やはりもう先進国の一員になったわけですが、それによって同盟というものが再定義されます。日米同盟、つまり以前にはリージョナルなアライアンスに留まっていた日米同盟がグローバルアライアンスに発展して、今はもう日本がどこでもアメリカを助けて、自衛隊が派遣されるようになりました。そして韓国も同じですよ。ローカルアライアンスとして韓国には主に北朝鮮問題だけを考えさせるようなことがアメリカにありましたが、冷戦が終わってから韓国もリージョナルな問題、そしてグローバルな問題でアメリカを助けて、積極的な役割を果たすというようなアメリカの都合、そしてアメリカの要求に晒されて、やはり日韓関係は変化を余儀なくされました。

そして日本の国内を見るとやはり、政権交代が可能な両党制が定着されて、そして外交の面では普通国家への試み、もしくは積極的な役割をやらうとする動きが出てきました。そして韓国は民主化されて、経済成長をやって、そして中堅国家、ミドルパワーとして国際的な、そして地域的な問題で積極的な役割を果たそうとしてきました。この中で日韓関係はやはり、価値観を共有するようになって、民主主義、人権、そして資本主義という基本的な価値を共有する共同体であるということになって、いろいろな面で日韓関係が発展するようになりました。

そして日韓関係 1.0 のときには安保協力というものはできませんでしたが、日米同盟と米韓同盟が再定義されることになって、韓国軍も PKO 活動に派兵することになって、業務を担うことになりました。それによって同じところに派兵したにもかかわらず、助け合うことができないというのはおかしいので、安保協力も冷戦のときには始まりました。

そして歴史領土問題も管理しよう。民主化されたので、韓国では歴史問

題の完全解決、これはちょっとおかしい言葉かもしれませんが、それを目指す動きがありました。そして日本側が積極的な役割を果たすためには韓国との関係が重要なので、歴史問題でちょっと前向きに対応しようとする動きもあって、歴史領土問題を管理しようとする動きがあったにもかかわらず、やはり国内的ないろいろな問題により挫折することが繰り返し起こったのですね。とはいえ、歴史領土問題を管理しようとする動きがあったことは確かです、やはり日韓関係の発展のもう1つの象徴であったと私は思っております。

しかし、問題は、米中戦略競争の下で、日韓関係 2.0 のガバナンスがこれ以上は機能できないという状況になっていることです。これを少し詳しく見てみますと、2010 年以降の問題ですよ。日本という国はやはり海洋国家としての悩みが出てきてしまったということです。特に尖閣諸島の問題ですよ。2010 年の尖閣問題、そして 2012 年、尖閣国有化によって中国と日本との間で尖閣問題が、その前には棚上げ方式である程度管理されていたものの、2012 年以降には戦争がいつ起こるか分からないぐらいの摩擦が出ております。

それで日本ではグレーゾーンという言葉で、戦争でもないしそれでも平和的な状況でもないグレーゾーンの下で、どうすればいいのかという考えが出てきましたが、そのグレーゾーンの一番象徴的なところが尖閣であると。すなわち日本では、戦争の意識が出てきたと。そして国内的に見ると両党制が日韓関係 1.0 の大きな特徴でしたけれども、2010 年代以降は、民主党政権から、保守の日本に結集している状況です。

しかし、韓国は、その反対に動いていますよね。半島国家として米中戦略競争というものが本当に悩みの中の悩みですよ。半島国家というものは大陸と海洋の間にある国なので、この対立が韓国の運命を決めるぐらいの大きな問題なので、韓国としては米中対立というものが大きな悩みになっております。その中で北朝鮮との共存というものを躊躇することになって、冷戦時代の韓国に比べると平和維持が深まっております。

そして国内的に見ても、保守の韓国と進歩の韓国という、まるで日韓関係 1.0 の日本の保革対立のような、本当に国際問題が国内問題になるような仕組みになっております。従って中国問題、そしてアメリカ問題が国内的に対

立の種になるのですね。それでちょっと実用的な外交路線を追求しなければ、政治的に不安定になる可能性が高い国になってしまいました。

そして私が注目しているのは、同盟の非同調化です。先ほど申し上げたように、日韓関係 1.0 の場合には米韓同盟であれ日米同盟であれ、同じ方向に動きました。すなわちリージョナルなアライアンスがグローバルアライアンスに発展するとか、米韓同盟の場合にはローカルアライアンスがリージョナルアライアンス、もしくはグローバルアライアンスに発展して、この同盟が同じ方向に動いて、その中で日本と韓国の安保協力が必要であるということになったのですが、今はその反対に動いております。

先ほど話したとおり、日米同盟というものが尖閣問題、すなわち戦争が起こる可能性が高いという意識、戦争意識が出てくることになったので、同盟そのものが戦争を前提にした、最悪の場合戦争が起こるかもしれないので、戦争が起こることを前提において、同盟を発展させようとする。これで日米同盟が一体化されています。

これに関しては少し詳しく話したいと思うのですが、もともと日米同盟というものは、在日米軍と自衛隊の間の結びつきがやや弱かったです。日本は基地国家でしたから、そして平和国家でしたから、これを一体化する必要がなかったし、もし一体化すれば革新勢力が猛反対するので、それをしなかったわけですが、今はやはり尖閣問題で摩擦が起こるかもしれないので同盟を一体化する。従って今、日米同盟調整メカニズムという名前で、在日米軍と自衛隊の指揮権の問題とか共同訓練とかいうことを、同じメカニズムでやることになっています。

代わりに米韓同盟は、その反対に動いているのですね。もうご存じかと思いますが、朝鮮戦争のあとで結ばれたのが米韓同盟でしたから、戦争を効率的にやるために、アメリカ軍と韓国軍は同じ指揮権の下に集められました。すなわち一体化され、在韓米軍と韓国軍は、同じ命令の下に置かれていました。それが米韓連合同司令部ということで、昔はアメリカ軍が司令部の長になりましたが、今は韓国の将軍が長になっています。

そして平時には、韓国が指揮権をもちます。すなわち戦争ではないときには、韓国軍が、すなわち韓国の大統領が在韓米軍を指揮することになってい

ます。しかし戦争になると、この指揮権が在韓米軍のものになります。それを返還させようとして今交渉が行われていますが、そのように、今は在韓米軍と韓国軍が別々の組織になっています。すなわちもともとは米韓同盟が一体化されたわけですが、2000年以降には指揮権が分離されることになって、簡単に言えばだんだん別の軍隊になっているということ。

そして韓国は平和意識があるので、朝鮮半島の平和体制を構築したいことで、北朝鮮が敏感に思っている米韓共同軍事訓練に関して、少し北朝鮮を対話の空間に呼び出すために、共同訓練を延期しようということになって、今日本側が本当にそれを敏感に思っておりますね。すなわち米韓同盟と日米同盟が別の方向に動いているように見えるのですね。それについて私は非同調化という言葉を使っています。

その中で日韓の安保協力というものが、韓国で反対に直面しているのですよね。日本と韓国が安保協力をすれば、北朝鮮が敏感に思っているの、われわれは平和を追求しようとして朝鮮半島における平和体制を構築するに当たって、日本との安保協力は少し避けたいということが、韓国で言われているのですよね。これを見ると、日韓関係 3.0 のコースは日韓関係 1.0 の逆転ではないかと私は思います。もちろんそのまま当てはめられるわけではありませんが、冷戦時期の日韓関係が逆転したものです。

それで、よく見てみますと、冷戦のとき韓国が日本を批判したものは主にそれでしたよね。韓国は北朝鮮や中国と戦っているのに、なぜ日本は北朝鮮と、そして中国と政権分離の下でなんとか付き合おうとするのか。あなたたちは本当に自由主義国家の一員であるかということで、韓国の朴正熙（パク・チョンヒ）政権が日本を激しく批判したのですが、今は逆に日本が韓国に対してそのような批判をやっています。そしてその当時の日本は韓国に対して、あなたたちは戦うことしか考えていないのですかと言って、本当に戦争が好きな国ではないかというような話をしましたが、今韓国は日本に対してこのような話をしています。

そして3番目の問題は、外交への司法の介入が本格的に行われているということ。外交というものはポリティクスなのですよね。しかし正義という、ジャスティスというものが日韓関係をほとんど示してしまうということで、

歴史問題を、その前には管理しようと試みましたが、その管理そのものがない状況になっているということ。すなわち韓国司法の判決は、日本企業、そして日本政府の反人道的な不法行為に関する賠償であるということで、これはこの前の協定とは関係がないということです。法的には、そして人権の面では、私は正しい話だと思いますが、ただし歴史問題というものが、正義の問題を超えて本当に政治の問題なのに、正義という、ジャスティスというものがこの政治的な空間に入って、歴史問題に関する日韓の和解、もしくは外交的な解決を防ぐようなことになっており、新しい対応が必要であるというのが、私の考えです。

そして脱真実、私はこの言葉をよく使うのですが、偏見と誤解、それらとだいたい同じ言葉だと思いますが、脱真実の世論とリーダーシップが大きな問題になっています。日本では嫌韓、韓国では反日、そして相手国は役に立たない。日本では、韓国は中国に傾斜している国、日本に嫌がらせしている国、そして約束を守らない国というようなイメージ。やはり私はこれを脱真実だと思うのですが。

そして韓国は日本に対して朝鮮半島平和プロセスを妨害する国、右傾化する国、アジアの軍鶏（シャモ）、戦うことしか考えていない国というようなイメージを持っています。しかしよく見るとこれは偏見であり、誤解であると思うのですが、韓国の世論とリーダーシップ、すなわち大統領とか政治的な政策決定者が持つイメージは、このようになっているので、なかなか解消の会合ができない。相互信頼がないので話もできないほど感情的になっているような様子です。

しかしよく見ると、本当に韓国と日本は異なる道を行くのかと言えば、私はもう必ずしもそうではないと。そのためにはレトリックとリアリティーを区別すべきだと思うのですね。レトリックを見ると、韓国のタイトルの演説とか韓国の政治家の話を聞くと、まるで韓国が中国に傾斜して、そして北朝鮮と原則のないことをすると、そういう国であると言えますが、リアリティーはそうではないのですね。

そして日本が、演説とかいろいろな文書を見ると、まるで中国と戦いをしようとする国であると言えますが、しかしリアリティーとして日本が中国と

の関係を改善しようとする動きもあったし、韓国と日本という国は国際構造の下で国益を達成するために、多次元的な戦略を展開する国なのに、韓国と日本は一次元的な国であるとされたら適切ではないですね。

例えばわれわれは、日本が中国を牽制しようとする、封じ込めようとする国であると言いますが、実は日本はコロナの前には一帯一路に協力しようとしたし、具体的に合意していました。日本は「韓国は中国に傾斜している国である」と言うのに、自分が韓国よりもっと積極的な中国政策をやっているということになります。

それでちょっと笑い話になりますが、韓国では逆に「日本が中国に傾斜している」と言われたこともあります。今は違いますが、2018年、19年ぐらいは韓国ではなく日本が中国に傾斜している。一帯一路に協力し具体的なプログラムで協力している様子を見て、これはもう日本が中国に傾斜しているのではないかというような話もありました。

そして例えば、ホルムズ海峡への派兵問題で、韓国と日本は同じ形で派兵しました。すなわち韓国と日本はレトリックとしては異なることを言いますが、リアリティー、実際に行動のほうを見ると、ほとんど似ていることをしています。これをよく見る必要があります。そして日本と韓国ともに、米中戦略競争に悩んでいるので、日本と韓国が別の道であると言うことはやはり偏見であると思っております。

われわれの考えでは、協力というものは同じ考えで同じ行動をするということ協力を言う傾向がありますが、日韓関係 3.0 の場合には、このような協力はできないと私は思います。そうであれば、やはり違いがあることを認めて、同じ点を探すといったことが必要ではないか。このためには信頼が一番重要なので、どうすれば信頼を取り戻せるのかということが、研究者としての役割であると思っております。

そして日韓関係の潜在力に関しては、われわれが確かに認識すべきだと思います。これは世論にも働きかける必要もあるし、日本と韓国の政策決定者にも日韓関係の潜在力が高いということ言って、日韓関係の戦略的な価値を認めさせるようなことが必要ではないかと私は思います。

一応、米中戦略競争の中で、米中が実は自国主義中心なので、グローバル

ガバナンスには関心がないと私は思っておりますがね。しかし韓国と日本はグローバルガバナンスが維持されないと経済発展もできないし、韓国と日本は海外に依存しているので、やはり米中の競争の中で関心を払っていないグローバルな、もしくはリージョナルなガバナンスを維持する、そしてこれを発展させるということで、韓国と日本の協力は不可欠であると思っております。

少子高齢化、これはもう日本と韓国も同じ問題であり、互いの経験を共有する必要があります。お互いに役に立つので。そして韓国では第4次産業革命とも言い、日本では Society 5.0 と言いますが、これにおいて協力というもの、もしくは建設的な競争、これも必要だと私は思います。そしてポストコロナの秩序をつくるためには、アメリカと中国に任せてこれをやるということは、やはりできないと思いますよね。コロナがわれわれに示した教訓というものは、アメリカと中国は自国中心であると。今もそうでしょうね。

コロナの克服というものが問題じゃなくて、自分の競争に目を向けて、全世界的なコロナを克服することに当たって役割を果たしていないということで、ポストコロナ秩序をつくることに最もふさわしい国は、やはりカナダとか北ヨーロッパの国とかヨーロッパの国で、韓国と日本のような国がリーダーシップを取らないと、ポストコロナの秩序をつくることができないと思っております。

このような日韓関係の潜在力を、日韓の世論とリーダーシップがきちんと認識して、今の摩擦というものは試行錯誤にしかない。それでこれを克服すれば、乗り越えれば、日韓関係の潜在力を発揮できる、新しい日韓協力の時期がくるといようなことで、われわれは研究をしようとしております。

それで私が4代目の所長になったのですが、このような日韓関係の3.0をつくるために何が必要であるかということ、いろいろな共同研究とか集団研究を企画することによって取り組んでおります。まず日韓関係の構造変化を、もっと詳しく学問的に究明しなければならないと思、2019年から9人の共同研究の下で、日韓関係の構造変化に関して共同研究をおこないました。

そして今年からは7人の共同研究なのですが、朝鮮半島平和構築における

日本の役割の模索ということで、日本側が朝鮮半島の平和構築を妨害するというのが韓国では最も一般的な認識なので、そうではないと。われわれが日韓関係を解決すれば、朝鮮半島平和構築において、日本が役に立つ。そのことがあると。それでわれわれが日本を活用すべきだというようなことをやろうとしております。

そして集団研究なのですが、これは実は去年も申請して落ちてしまったのですが、今年もう一度挑戦するつもりです。その名前は、「朝鮮半島・日本の共生学の定立：和解・連帯・平和」。和解とは歴史的な和解を意味するので、この和解のためには、日本と韓国の国民の記憶、つまり戦争に関する異なる記憶、そして植民地支配に関する異なる記憶を、共同の話ができるようなものにしてゆく必要があります。

そして連帯というものは、協力という言葉とちょっと似てはいるのですが、それはやはり相手国に対する共感がなければ連帯というものができないので、それをどうつくり上げるのか。そして平和。日朝関係も同じですが、朝鮮半島の平和構築というものが、実は朝鮮半島と日本の共生の基盤になるということで、朝鮮半島を巡る秩序、そしてもう一度、ひいては平和をどうすれば構築することができるのかという問題意識の下で、企画書を作りました。

ちょっと長く話してしまいましたが、これで私の話は終わらせていただきます。ありがとうございます。

鍾：崔先生、どうもありがとうございました。非常に内容が濃いが講演で、消化するためには時間がかかると思います。次は山先生にコメントをお願いしたいと思います。山先生、よろしく願います。

山：はい。崔先生、大変中身の濃いが講演をしていただきまして、誠にありがとうございます。まず国民大学の日本学研究所がどういう形でこれまで充実されてきたのかということ、最初に紹介していただきました。2000年代に入って、幾つかの基礎をつくりながら、現在韓国を代表する国際政治学を基にした日本政治、あるいは日韓関係の専門の研究機関として成長されてきたことを紹介していただきました。

その上で、その研究所の活動および先生自身のご関心とも関係がありますがけれども、日韓関係の戦後の歴史を、日韓関係の構造的な歴史を非常にクリ

アな形で整理していただきまして、50年代、それから60年代を挟んで70年代、80年代を挟んで90年代、また2000年代を挟んで2010年代と、ほぼ10年おきに日韓関係の大きな構造的な変化があったというふうには、大変クリアな説明をしていただきまして、はっと、そうだなというふうに、非常に頭に刺激を受けました。

特に興味を持ったのは、先生の整理されている言葉だと思いますが、前線国家同盟化と基地国家同盟化とか、日本と韓国がその主に米中関係、あるいは冷戦構造の変化とともに、その立場がまるで逆のように展開していっていると。それでかつての韓国のような動きを日本がして、またかつての日本のような動きを韓国がしているという変化が、本当に見事に現れたなど。それでお互い、その当時と今とは全く逆のことを主張しているということも非常に面白く、おおなるほど、と理解させていただきました。

それから最近のこういった構造的な変化の中で、アメリカと中国との間で日本と韓国は、最悪の日韓関係と言いつつも、実は試行錯誤の状況だということで、関係悪化というよりは繰り返しこういった試行錯誤の状態が出てきて、これをどのように抜け出していくかということになります。そこで先生が日韓関係の潜在力という言葉が使われていましたが、また日韓関係が全く別の方向にいくということは考え難いということで、そのためには信頼を取り戻して、こうした潜在力をいかに発揮してグローバルな、あるいはリージョナルな関係の中で、それぞれの国益も考えながら多元的に戦略を展開していかないといけないと。

ついつい日本だけを見て、あるいは韓国だけを見て、その2国間だけの関係で見えてしまうのですが、それをちょっと幅広く見ていくと、実は同じような土俵の中で一見違った動きをしているんだけど、しかしながらよく見ると立場が入れ替わっているだけで、のっている土俵はあまり変わっていないというようなことが見えてきたのかなと。これも面白い意見だったと思います。

それからもう1つ先生のキーワードで、レトリックとリアリティーというのがあったと思いますけれども、一見すると政治家の発言、為政者の発言を見るとああそうかなと。非常に極端な立場を、どうしても姿勢を示すわけで

すけれども、実際リアリティー、現実の動きを見ていると日本も韓国も言っていることは反対のように見えて、実はその具体的な動きはあまり変わらない動きをしているというふうなことがありました。

その表現と現実の動きというのを分けて、その現実の動きのほうをよく見て、お互いのほうの理解を見ていくというふうなことの大切さもおっしゃっていました。韓国のほうから見ると、逆に日本のほうが中国寄りじゃないかというふうな意見も、つい数年前には出ていたというようなこともあって、そういったことも指摘されていました。

それからもう1つ興味深い話として、協力とは何かということもあったと思います。先ほどの潜在力との関係から出てきたのですが、そもそもわれわれは協力という言葉、あまり吟味せずに考えているようですけれども、その協力というのを狭義に、同じ考えで同じ行動するというふうに狭く考えるのか、それとも違いはあることを認めて、その上でいかにして協力するのかというレベルで考えていくのか、協力概念を考え、検討し直すことで、新しい協力のあり方を模索できるのではないかというふうなご意見もあったように思います。

またこの日韓関係では少子高齢化の問題であるとか、第4次産業革命であるとか、あるいはポストコロナであるとか、共通の社会課題を抱えていて、こういったことに視野を広げて、お互い学べることは学び合うということなことが、そうした信頼回復につながるのではないかというふうな話もありました。

最後になりますけれども、近年の研究所のご研究のほうを最後に紹介していただきましたが、この朝鮮半島平和構築における日本の役割の模索ということで、韓国では恐らく多くの意見としては日本が平和への妨害をしているというのが、非常に主な意見というか大勢を占めているような考え方だと思うのですが、そういったようなものにちょっと距離を置いて、日本が平和構築に実は役に立つんだというふうなことを、研究として今年度から始められているということで、これは大変私も関心がありますし、重要な、日本認識をあらためていく上での研究所とか研究者の役割として、なかなか難しい課題だと思うのですが、もしかしたらこういった課題を掲げるだけでも、かな

り周囲からの批判とか意見もあると思うのですが、それにチャレンジされているということで、大変そういったことに敬意を表したいなと思います。

それから現在、申請しようとしているこの朝鮮半島・日本の共生学の成立と。和解・連帯・平和と。カッコして記憶・共感・秩序ということがありましたけれども、これも平和構築のテーマと関係が深いと思いますが、この和解というテーマですね。これは非常に現在のキーワードになっているのかなと思います。同じ記憶、記憶が同じでない地域、国、人同士で、そのそれぞれの記憶を認めながらも、どうやってそれに折り合いを付けて、新しく共感みたいなものをつくっていきけるのか。

あるいは共感をつくっていくことで、どうやって異なる記憶の者同士が歩み寄れるのかということ、これは非常に難しい問題で、先ほどの外交への司法への介入といった現代の新しい正義、人道的という、正義というような観点から、国際関係にまで影響を与えてしまうという新しい展開の中で、これは背中合わせの問題だと思うのですが、人道的な問題ということと、この共感とか和解の問題というのは、非常に同じような、セットで出てくる問題だと思うのですが、これをどうやって乗り越えていくのかというのが、これから私たちも抱える共通の、研究者だけではなくて市民の人たちも抱える問題だと思うので、こういった研究が採択されて進められることを期待したいと思います。

あと、今のは先生のお話のポイントを少し私なりに整理させていただいたのですが、私自身の最近の関心としては、日本における韓国に関する報道というのか、メディア情報がずいぶん増えましたね。私は二十数年前に数年間、韓国に留学していましたけれども、その頃から韓流ブームがあったりワールドカップがあったり、ある種の日韓関係が良くなって、それから日本文化の開放ということがあって、どんどん大衆文化というかポピュラーカルチャーのレベルで、お互いに相互理解が進んでいくような契機になったのですが、その後 2010 年代に入ってうんと関係が悪くなっていくと。

関係は悪くなったのですが、お互いへの関心というか情報の行き来はずく増えて、あたかも韓国の政治動向というのが、まるで日本国内の政治動向のように報道されると。日本の中の政治の動きと同じような扱いで、韓国の

情報が日本でも報道される。これは非常に大きな変化だと思っていて。その結果として、韓国での動きが日本の国論を二分するようなことが近年起きているということなのですね。これも、その前までとはずいぶん違った状況かなど。

もちろん金大中大統領の拉致事件とかそういったときに、国論を二分するような日本でもいろいろな運動があったと思うのですが、それとは別に支持派と不支持派がはっきり分けられたりとか。あるいはそれとは全く無関係に、若者文化、そういう大衆文化の人たちはそれには関心があるけれども政治には全くノータッチという、それを住み分けるといふふうな、様々なものがフラットになっているということも、1つの特徴かなといったことを最近感じています。

以上は私の関心なのですが、どうも日韓関係が国際関係なのか、国際問題なのか国内問題なのか、非常に区別し難い状況になっているというのが現状認識かなと思いますので、恐らくこのことは先ほどの人道的な見解が出てくるといふこととも関係があるのかなど。あるいは和解という問題が求められることに関係あるのかなというように、私自身は感じております。ちょっと長くなりましたけれども、以上で私のコメントを終わりたいと思います。

鍾：山先生、どうもありがとうございました。崔先生のお話の重要なポイントを非常にうまく取り出していただいて、復習できた感じです。おっしゃるとおり、これも前回の講演会でも出た話なのですが、複数の社会の間の情報が多くなって、理解を深めていくと、社会的な基盤、相互理解、それから共生の社会基盤が出てくる可能性があるのではないかなと思いますね。特にこのインターネットの時代で、コロナがあって実際のコミュニケーションが少なくなっているとしても、インターネットを通じて相互理解や共通点が増えてくるといった動きが出ていると感じています。

個人的な話ですと、うちの子どもがBTSという韓国のアイドルグループを毎日見て踊っています。このような世代にとっては、韓国人か日本人かはあまり関係ないですよ。多くの人が大きくなって、国境をもっと薄く思えたら、政治問題も政治問題じゃなくなるかもしれません。

それから少子高齢化などのような共通の問題が今世界的になって、韓国も

日本もまた中国もそうですが、昨日読んだデータでは、アメリカも同じことが起こっているそうです。子どもの数が少なくなっていると。なので共通の経験で共通の問題があると、世界的に相互理解の社会基盤が出てくるのではないかなと。そういうような可能性もあると思いますね。これは1つ、私なりの感想です。崔先生と山先生、ありがとうございます。

予定している終了時間、17時半までは15分ですが、議論が活発になる可能性もありますので、5時40分までに質疑討論を延長したいと思います。どうぞよろしくをお願いします。

参加者の方の質問コメントを待っている間に、実はこの国際総合日本学ご担当の園田教授は授業があって早退されていますが、質問を私に送ってられていますので、崔先生に答えていただければと思います。質問は、現在韓国に存在している保守と革新の分断・対立は、国民大学の日本研究所や、韓国における日韓関係研究にも影響を与えているかどうか、というものです。ご回答、よろしくをお願いします。

崔：はい。韓国ではやはり保守と進歩の間で、少し違いがあります。例えば保守の場合には北朝鮮が嫌いだし、北朝鮮を助けている中国にも対応しないといけない。従って韓国、日本、アメリカが一丸になって、そこに対応しなければならぬという考えを持っています。

しかし進歩の場合には、北朝鮮との共存、平和共存が必要であり、北朝鮮に影響力のある中国との関係で、その問題を改善したいということで。その代わりに朝鮮半島で日米韓と中国・ロシア・北朝鮮のこの三角同盟が出てきて、朝鮮半島が冷戦地域のような対立の区間になってはならないという考えを持っているので、やはり外交問題において、国際政治問題において、保守が重視するものと進歩が重視するものは違うのですね。

そして、日本も理解できると思うのですが、保守対立のとき、保守の方の研究と革新系の方の研究が、実は国際問題などいろいろな問題で対立していたではないですか。韓国も少しそのような傾向があるのですが、日韓関係においては、専門家たちにとっては日韓関係が重要なので、日韓関係を改善すべきだという考えを持っているのですよね。すなわち韓国の日本専門家にとっては日韓関係が重要なので改善する必要もあるし、それを学問的に証明

しようとするのです。従ってわれわれが親日派として批判されるのですね。それで進歩がそのような話をやっても、進歩から批判されるのです。

やはりこの2つの韓国の問題が、学問社会にも大きな影響を及ぼしてはいるのですが、これにもかかわらず韓国の日本研究について、日本研究者ではない人たちは批判するのですが、韓国の日本研究内部では、もうそれほど区別がないのです。ほとんど意見が一致しています。

ただし、研究の話題が少し違うのですね。例えば進歩の人たちは、日韓安保問題をもっと勉強したいという思いを持っているのですよね。なぜかというところ、朝鮮半島の平和構築において、日本との安保協力というものが、これをどうすれば両立化させることができるのかという問題意識を持っている。そして保守の方たちは経済問題とか政治問題に関心を寄せている。また進歩の方のほうは歴史問題にもっと関心を寄せている。

しかし保守の方も歴史問題にもいくらか関心を寄せているのです。新しい解決案とか、そこには少し違いはあるのですが、同じことは既存の協定と脅威を尊重しながら、日本と韓国が話し合いの場を持って、外交的にこの問題を解決すべきだということは、韓国の日本研究者たちの大体の合意なのです。

そうすると進歩の対立が、韓国の日本研究にはそれほど影響はないのですが、研究者ではない方、もしくは研究者でも日本を研究していない方は、韓国の日本研究者を反日ではなくて親日として見る傾向はあるのです。以上です。

鍾：ありがとうございます。そのように園田教授にお伝えします。他にご質問、コメント、オーディエンスからぜひお願いいたします。

内田：東京大学の内田です。講演の内容は本当に先ほど、日韓関係を軸に整理するとこういうふうクリアに物事が見えるのかというので、すごく私も驚きというか、何と言うんだらう、爽快感というか、すごく面白く伺わせていただきました。今日のこの講演会のシリーズは、アジアの日本研究ということなので、日本研究というか日本研究に関する教育の現場について伺いたいと思います。

国民大学の日本研究所には、学生さん、つまり学部生だったり院生だった

りする方は所属されているのでしょうか、というのがまず1点。もしいるとしたら、現状の最悪の日韓関係と呼ばれる状況の中で、日本研究に対する関心は上がっているのか下がっているのか、テーマとしてそれがどれぐらい影響を与えているのか、というのが2点目の質問です。よろしくお願いします。

崔：はい。もともと日本学科があるのですよね。日本学科があって、日本学研究所は研究所なので、それが研究機関です。教育機関ではないので入ってはいないのですが、私を始め日本学研究所の方々が日本学科の教授にもなるので、いろいろな行事とか講演とか、特に学生たちが参加するのですよね。そして研究にも補助員として、スタッフとして参加することもあるし、それで日本学科、そして大学院と日本学研究所が実は別の組織なのですが、そういうふうに動くことになります。

それで今、日本学科の学生たちを見ると、日本に対する関心、特に日本を本当に勉強して、自分にとってどんな役割になるのか。自分の人生に本当に役に立つのかというような悩みがあるにはあるのです。韓国で日本に対する認識が少し悪くなったので、そしてコロナもあったし原発の問題もあるので、あるはあるのですが、それにも関わらず韓国の学生たちは特に日本の少子高齢化問題について関心が高いのです。

なぜかというと、韓国の戦略的な需要、すなわち韓国の政府機関とかもしくは福祉問題に関わっている方たちが、日本の経験を見たいということ。そのような政策的な需要があるので、政府の研究機関とか民間の研究機関では、日本研究者を採用しようとする動きが少しあるのですよね。それで韓国の学生たちは、韓国の未来の課題の中で重要な問題が今、少子高齢化じゃないですか。本当に進んでいるので。それで日本の経験をちょっと学びたいという、日本の経験を分析したいということで、自分の未来を考えている人たちが増えてはいます。

そしてそれだけじゃなくても、環境事業に働きたいという人たちも、日本のそのようなことに高い関心を持っています。そして最近日本で外国人の採用が増えたので、われわれは現地就業、あるいは現地就職とも言うのですが、1年の入学者がだいたい30名であるのに対し、1年に5人ぐらいが日本で就職します。だんだん増えていると思われます。今後も増えると思います。

現地就職に関心がある人たちも増えています。韓国での就職率が低く、本当に難しいので、われわれの日本学科では日本での就職を望んで勉強する人が多いです。

そして大学院の場合には、日本学科の大学院も重要なのですが、例えば政治学科の大学院生の中で、日本を研究している人たちが何人いるか、これが重要ではないのでしょうか。われわれはもともと日本に関心がある人たちが入ってくる学科なので。これが私の友達とか政治学科で働いている友達に聞いてみますと、大学院生の中で日本政治とか日本外交を専門にしている人たちが、急激に減ったということなのです。

やはりこれはもう、韓国の雰囲気とちょっと関係があると思いますよね。すなわち「日本を勉強して私は就職できるの？ 教授になれるの？」というような話で（笑）。やはり今は中国であるということ。そうじゃなければもう安保の問題と、このような問題ということになって、日本研究者を志望している人たちがちょっと減ったということは確かです。

内田：ありがとうございます。

鍾：ありがとうございます。それと関連して、日本研究を勉強したいとき、大学院生は特に日本に来るきっと選択肢がありますよね。

崔：はい。

鍾：日本の若い方は、どういうふうに見分けているのですか。それともそんなに違いを見ていないとか、いいプログラムに入りたいとだけ考えているか。どういうふうなことになるんでしょう。

崔：すなわち韓国の大学院生が日本に留学して、もうちょっとそれをやりたいということに関するものですよ。だいたい韓国はアメリカ留学がほとんどを占めているので、日本への留学は自分が日本政治をやるとかということではなければ、ほとんどの人は日本には留学しないのですよね。日本の政治文化とかいろいろなことを論文に書きたいという人は日本に留学するのですが、そうではない人たちが国際政治、一般の国際政治、東アジアの国際政治を勉強するために日本に留学することは、それほどないのですよね。ほとんどがアメリカ留学。そうでなければ、最近では中国留学が少し増えています。中国問題ではないことを主題にしても、中国に留学する人が。

鍾：本当に実はこの最近の動きは、中国へ行くというような動きは出ていますね。日本からも東南アジアの国々からも、南アジア・インドからの留学生も中国で多くなっていると聞いています。そのような動きは、国際政治まではいかないかもしれないですが、崔先生はどのようにご覧になっていますか。

崔：国際政治の中ではもう中国が重要なので、国際問題を専攻する大学院生の中には、中国で勉強したいと思っている人が多いですね。しかし、ほとんどはアメリカ留学です。そして韓国でも今、中国だけではなくインドとかベトナムから、いろいろな方が研究に来ているのですが、ほとんどがやはり工学、エンジニアリングですね。

人文社会の方面で韓国に留学する人たちは、ほとんどが韓国学を専門にしようとする。韓国の文化とか韓国語とか。しかしエンジニアリングのところはそうじゃない人たちが多く、それは結構あると思います。

鍾：ありがとうございます。では最後に山先生、短いコメントをしていただいて、この会を終えたいと思います。

山：はい。今日お聞きしたことで、1つ最後にお聞きしたいことですが、歴史認識ですよ。大きなトゲのように刺さっている問題として、歴史認識問題があると思いますが、今日の先生の整理のように10年おきにこの日韓関係が大きく変わるといふ、クリアな図式化により説明していただきました。そういった10年単位の歴史の区切り方がある一方で、例えば日本に住んでいる人、韓国に住んでいる人の時代区分というのですか、どれぐらいの範囲を1つの時代として区切るかというのも、わりと大きな問題かなと思います。

日本の場合は戦後とか、あるいは年号が変わって平成みたいな形で区切り方があると思うのです。恐らく韓国のほうは、年齢構成も日本よりも高齢化のスピードが激しく、世代構成が違っていたり、さらに、ある種の現代化のスピードが急激に進んでいったということで、時代認識が非常に違うと思うのです。なので例えば、同じ過去の出来事に対する解釈の仕方が違うというだけではなく、その出来事が起きた時代に対する認識、つまり、連続的に今につながるような時代なのか、それとも今とは全く違う、例えばわれわ

れが戦前を見るような、あるいは明治とか江戸時代を見るような、そういう時代の捉え方が結構違うのかなといったことを、私も行ったり来たりして考えております。

それからもう1つ、韓国の「386世代」のように、日本では「団塊の世代」のような1つの世代というくくり方で、その人たちの考え方とか思想みたいなもの、ある世代の政治状況、社会状況を説明するというやり方があると思うのですが、そういった世代ごとに歴史認識の違いがあるのか、核となる世代が違うのかとか気になりました。先生も日本に行ったり来たりされていますので、そういった戦前の問題とか植民地時代の問題に関して、どういった目で見ているからこうなるのかみたいな、その辺のことを少しだけ説明していただければと思いました。

崔：そうですね。まず時代に関する認識なのですが、やはり山先生もおっしゃったとおり、日本は米中戦略競争をそれほど大きな変化ではないと認識していると、私もよく感じたのです。すなわちアメリカの時代がずっと続くというような感覚です。中国とアメリカが競争してはいるのですが、結局日本はアメリカにつくしかないというような話も、感覚もあって、米中戦略競争というものが本当に大きな変化であるのかというような感覚なのですが。

韓国の専門家たちはというと、これは大きな変化であるということをも日本よりははっきりと認識しています。すなわち米中戦略競争によって、国際社会がほとんど変わるかもしれないといった感覚でそれを見ているのです。それがもしかしたら今の日本と韓国の国際認識の違いの大きな原因の中の1つであるかもしれないですね。

単純に韓国が北朝鮮をどう認識するのか、そして韓国は中国をどう認識するのかということではなく、米中戦略競争という時代をどれぐらい深刻に受け入れているのか。韓国は本当にそれを深刻に受け入れているのですよ。しかし日本は韓国ほど深刻ではないと思われます。その意味では時代に関する認識も、日本と韓国は違うということをも少し感じたのですが、これに関してはもっと考えるべきだと思っています。

それから世代の問題なのですが、やはり今の20代とか30代の歴史認識を見ると、生々しい話がない。どの家も昔はお父さんとかお母さんが植民地

時代に何らかの経験があって、子どもたちに話していたので、植民地支配というものを現実的に受け入れたのですよね。しかし今の20代、30代はお母さんとお父さんが戦後の世代なので、やはり歴史を昔、つまり前世代よりもっと理想的に見るのですよ。

日本の立場で言うと、もっと強固な認識を持っているのです。ジャスティスの観点から歴史書を見るしかないのです。なぜかというと、教科書で勉強したことだけが残っているのです。しかし私の場合は両親から、植民地支配にこれこれのことがあったと聞いたこともあるのですよね。そのような方が多かったし、歴史問題を人間の社会の中にある1つの出来事として受け入れたのですが、今の若い世代にとっては本当に教科書の中にある出来事なのですよ。

従って、もっと典型的にそれを理解する傾向があるのですね。すなわち植民地支配というものは、悪ですよ。悪で、そして何と言うべきか、人間の社会の出来事であるということの認識のラインなので、もっと原則的な認識を持っているのです。それで、若い世代では文化交流も盛んに行われているので、若い世代同士の歴史的な和解ができるのではないかと考えた場合、私はそれほど自信がないのですね。逆に認識がもっと遠くなるかもしれません。

すなわち歴史を教科書で学んだ人たちなので、逆にイデオロギー的、理想的に認識する傾向があります。今は韓国の20代と30代が反日の先鋒に置かれているのです。日本をたくさん訪問して、日本の文化を楽しむのですけれども、しかし認識の面では依然としてちょっと典型的な認識を持っています。特に去年の貿易規制のせいで、韓国の若い世代が本当に反日に変わりましたよね。それを私はちょっと不快に思っているのです。世代に関してはそのような話になります。

山：はい、ありがとうございます。

鍾：歴史は遠くなりつつあるということですよ。それをどういうふうにかえるか、チャンスでもあるかもしれませんね。新しい扱い方、考え方、こういった変化に対して必要かもしれませんね。具体性がなくなると、歴史はどういうふうに分身のアイデンティティーとつながっているかという、そのつながり方も変わってくるのではないかなと思いますね。とても興味深いお話でし

た。

今日の講演会はここで終えたいと思います。崔先生、山先生、今日はどうもありがとうございました。

崔：ありがとうございました。

山：崔先生、ありがとうございました。

4

GJS「アジアにおける日本研究」 講演会シリーズ 第3回

—— 権 肅寅（ソウル大学人類学科 教授）

日時：2021年6月22日（火）16：00～17：30

会場：オンライン（Zoom）

発表者：権肅寅（ソウル大学人類学科 教授）

タイトル：韓国人類学の日本研究：1980年代から現在まで

コメンテーター：山泰幸（関西学院大学 教授）

司会者：鍾以江（東京大学東洋文化研究所 准教授）

使用言語：日本語

鍾：時間になりましたので、今日の国際総合日本学の講演会を始めたいと思います。今はもう22名が参加されて、今からもまた新しく入ってくる方がいると思います。多くの方々をご参加していただきありがとうございます。

今日の講演会は、国際総合日本学の活動の一環として、アジアの各国における日本研究を日本語のオーディエンスに紹介して海外と日本国内の日本研究の交流を促進するために企画した「アジアにおける日本研究」講演会シリーズの3回目です。今日は韓国ソウル大学人類学科の権肅寅教授にお願いして、韓国の人類学研究について、日本の人類学研究についてお話ししていただくことになりました。

これまでの企画は関西学院大学の山泰幸教授のお力を借りて実現できたことで、韓国の先生方への講演依頼も山先生にお願いしております。では、権先生の講演会を始める前に山先生に短い紹介をお願いできればと思います。山先生、よろしく申し上げます。

山：ありがとうございます。関西学院大学の山です。

今日は、この「アジアにおける日本研究」講演会シリーズの3回目ということで、ソウル大学人類学科の権肅寅先生にご講演をお願いしています。第

1 回目から説明していますように、日本研究は現在、日本国内の日本の研究者だけではなくて、海外の、特にアジアの日本研究者の層が年々厚くなっています。

そして、その扱われるトピック、研究内容もほぼもうタイムラグなしでダイレクトに、例えば東京大学で学位を取った方がアジアの母国に帰られて、そして、あちらで教員になって教鞭を執るということは昔からあったわけですが、異なるのは、むしろ最新のトピック等も例えば韓国に行ったほうが、日本国内を含む国際的な日本研究の最新の動向、どういうことが取り組まれているかよく分かるような状況がここ 10 年ぐらいはっきり出てきているという認識がありまして、日本の中の日本研究だけでなく、特にアジアにおける日本研究についても、お互いに共有して学んでいこうというのが、このシリーズの主な趣旨になっています。

私は企画の当初からお手伝いさせていただいております。昨年度末あたりから構想しまして、春から毎月やりたいと考えまして、4月、5月、6月のうちで、権肅寅先生にお願いしたのですが、先生は6月がいいということで、今日とうとう当日を迎えました。

簡単に先生の紹介をさせていただきますが、権肅寅先生はソウル大学の人類学科を卒業され、修士号を取られた後、アメリカのスタンフォード大学に留学されて、そして、日本研究、日本におけるフィールドワークで博士号を取られたと聞いています。日本の東北の会津のほうでフィールドワークをされて、当時最も大きな関心を集めていた「ふるさと」とか「地域づくり」等のテーマを扱われたということを聞いております。

ここに私は先生の本をたくさん持っていて、これは日本の地方アイデンティティー、会津地方をテーマにした博士論文をまとめられて、ソウル大学出版部から韓国語で出ている本です。これは最近出た本ですけれども、『現代文化人類学』という、韓国の文化人類学の教科書を代表編者としてまとめられていますし、その他、日本に関するさまざまなテーマ、例えばこれは『ジェンダーと日本社会』というプロジェクトを出版したものの。あるいは、これは『在日韓国人 仕事と生活、生活と世界』というプロジェクトを出版したものの。このように、いろんな研究プロジェクトのリーダーをされていまして、その

他にも『日本の産業体系』とか、あとは『多文化社会日本』とか、『現代日本の伝統・文化』とか、このようにたいへん研究書を出版されて、ご活躍をされている先生で、名実共に韓国の人類学を引っ張られて、特に日本研究の代表的な先生といって過言ではないというふうに思います。

今日はこういう立派なご活躍をされている権先生を講演会にお迎えすることができて、私としても大変喜んでるところです。

では、私からの紹介は以上として、これから先生のほうのご発表に移りたいと思います。では、鍾先生のほうにいったんお返ししましょうか。

鍾：山先生、ありがとうございます。ご紹介のおかげで権先生の本当に素晴らしいご研究を初めて知って、今日先生にここで講演いただけることをとても光栄に思います。

では、権先生、早速お願いいたします。

権：はい。皆さん、こんにちは。山先生は私がびっくりするほど私についていろいろ調べていらっしゃるんですね。本当にありがとうございます。ソウル大学の権肅寅と申します。今日はこのような貴重な発表の機会を与えられた東大の Global Japan Studies プログラムの皆さん、特に鍾先生、それと山先生に感謝いたします。

発表に入る前に1つだけ皆さんに了承申し上げたいことがあります。私が日本語を習ったのは留学していたアメリカの大学で履修した基礎コースだけで、あとは会津のほうでおばあさんやおじいさんとおしゃべりばかりして、それで特に今日のような学術的なセッティングで日本語を使ったことがあまりないのです。ですから、正しい日本語ができないのです。日本を専門にしているといいながら日本語が本当に下手ですから、皆さん、ご理解してください。

それでは、発表に入ります。これからは ppt のスライドを見ながら発表することにします。「韓国人類学の日本研究：1980年代から現在まで」が今日のタイトルです。

はじめに、1980年代以前の韓国の人類学の日本研究から始まります。1980年代以前の韓国の人類学については、文玉杓（ムンオクピョ）さんという韓国の日本研究で有名な方がいらっしゃいますが、文玉杓先生は90年

代に「80年代以前の韓国の人類学はかなり国学的な性格を持っていた」という指摘をされました。その意味はこの下に書いているように、1980年代以前の韓国の人類学は、一部の幾つかの例外はありましたが、大体自分の文化と自分の社会、韓国の文化と韓国の社会を主な研究の対象にしていました。それは何よりも80年代以前の韓国では、まだ異文化への関心を持つには、経済的にも学問的にも余裕がなかったといえます。ですから、人類学の本来の性格からすれば、やはり other culture についての研究ですが、韓国の人類学では80年代前まではその状態にはなっていなかったといえます。

韓国の人類学で本格的な異文化研究が始まったのは、1980年代以降のことです。というのは、80年代に入ってから韓国の社会でさまざまな実用的な理由で、他の社会への専門的かつ、あるいは具体的な知識を必要とするようになったからです。

実用的な理由とは、貿易とか経済とか外交とかということです。そういった理由で他の社会、他の文化についての関心が出始めたといえるのです。

日本はこの時期、韓国の人類学者たちが大きな関心を見せた異文化でした。それはいろんな理由があったと思いますが、一つには日韓間に存在する歴史的な理由がもちろんありました。そして、もう一つの理由としては、日本は私が現実的にアクセスできる幾つかの国の中の一つだったからです。私が留学に出たのは1986年でしたが、今考えてみても、あの時期に自分が人類学を勉強してフィールドワーク、現地調査をする、現地調査ができる国といえば、やはり台湾とか日本とかアメリカなどしか考えられないくらいでした。

ですから、80年代の後半だったのですが、その時は、例えば東南アジアとかアフリカなどはまだまだ遠くてどうしても行けないような感じがしていました。ですから、やはりどこかを選ぶとしたら、日本とか台湾という感じだったのです。でも、そこから4～5年ぐらいたったら、雰囲気全般に随分変わってきました。でも、80年代の半ばまでは行ける所、行ける国があまりない状態でした。ですから、いろんな理由で80年代の韓国の人類学者たちにとって日本は重要な研究の対象になったということです。

そして、1980年代に入ってから、日本で長期間にわたって現地調査、フィールドワークをして ethnography を書き出す韓国の人類学者が登場し

始めました。それは、これらの研究は discipline と area studies、人類学と地域研究の観点から行われたいわゆる専門的な研究でございました。これは、1980年代以前の研究とは随分差がある、専門的な研究という差があったのです。ですから、韓国で行われた日本の人類学的な研究が本格化したのは、厳密には1980年代に入ってからといえます。

そして、今日の発表のタイトルで「韓国人類学」という表現を私は付けており、韓国人類学の日本研究を検討していますが、その「韓国人類学」という表現に一言ちょっと述べておきたいことがあります。それは、厳密な意味での韓国人類学です。それは専門的な人類学のトレーニングを受け、それで、韓国の学界で活動している学者たち。ですから、例えば海外で学問活動をしている韓国人の学者たちは検討対象ではないということです。ですから、日本を研究している韓国人の人類学者、韓国人類学者でこの条件に合う人は今25人ほどいます。

それで、韓国人類学の日本研究のレビューですけれども、このレビューについては、伊藤亞人先生とか、韓国の文玉杓先生とかイム・ギョンテク先生などが、前にレビューをしたことがあります。今日の私の発表はこれら先行するレビュー研究を参考にしながら、韓国の日本人類学の流れと特徴、今後の課題について少し見ることにしますが、私自身も実は日本の文化人類学の招待を受け、2016年に『Japanese Review of Cultural Anthropology』に論文を載せていただいたことがあります。これを書いたのが2014年でした。それから7年たちましたから、少しアップデートして今日は発表を準備しました。ですから、今日、私の発表を聞いている方の中でこの論文を読んだ方がいらっしゃったら、ちょっとつまらない発表になるかもしれません。

次に、2番目です。人類学的な日本研究の形成と発展について見てみます。先ほど話したように、1980年代以前の韓国人による日本研究は、韓国文化との関連性を探したり、あるいは実用的な目的のために短期間にわたる調査に基づいたりした研究がほとんどでありました。そのような点で、文玉杓教授の位置は特別だといえます。

文玉杓先生は今から6～7年ぐらい前に韓国学中央研究院から退職されていますが、一言で言いますと、この厳密な意味での日本研究者としては、文

玉杓先生が「The pioneer」と表現されます。文玉杓先生は、1970年代あるいは80年代の初め頃だと思いますが、群馬県の片品村で2年間にわたってフィールドワークをして、それで1984年にオックスフォード大学で人類学の博士号を取りました。それは韓国の人類学者が長期のフィールドワークに基づいて日本を研究した最初の事例で、その意味で「The pioneer」というタイトルを付けることができます。

文玉杓先生が博士号を取ったのが84年で、1990年代に入ってから韓国の人類学界で日本研究者らが本格的に登場し始めます。ここに書いていますが、この人々が90年から90年の末にかけてあちこちで日本研究の分野で博士号を取って、韓国に戻ってから研究活動が始まりました。

それで、この人々が韓国で研究活動をする事になり、韓国の人類学界ではこれまで以上に日本研究の可視性が増加するようになったのですが、今日の視点から振り返ってみますと、決して長くない韓国の日本研究の歴史の中で1990年代はむしろ日本研究の全盛期ではないかという考えがするほど、90年代は結構大勢の人類学者が日本を研究していたといえます。それと、90年代までは東南アジアなどについてはあまり研究がされていなかったですから、韓国の文化人類学界の中で日本研究が持つvisibilityというのは90年代がやはり一番大きかったといえるのです。

それから2000年代ですが、2000年代に入ってから日本専門家の養成が少し停滞とかあるいは減少しているように見えます。それについても幾つかの理由が考えられますが、一つは1990年以降には、韓国社会が経験するother cultureが急速に増加するのです。ですから、前はやはり日本とかアメリカとか台湾ぐらいだったのですが、92年に韓国と中国の関係がリオープンされたのです。そのように、過去に比べればother cultureが本当に多様化してくるのです。ですから、日本とアメリカが持つ重要性が低下してくるという点があります。ですから、その代わりに、ここに書いているように、東南アジア各地とか中国とかアフリカ、中南米、ヨーロッパ、南太平洋などの地域専攻が日本とかアメリカとか台湾などに比べて急速に拡大しているようになったのです。

それが一つの理由で、もう一つはJapan studiesそのものの流れです。そ

の流れというのは世界的な流れですが、世界的にも日本地域研究の位相が1980年代にピークになるのです。そのピークを過ぎ、90年代に入ってから下落していくということです。ですから、それも韓国の日本研究に反映されていったといえるのです。

とはいえ、2000年以降も日本を研究する韓国人の人類学者は着実に増加したといえるのです。ですから、今、文玉杓先生から数えて日本を専攻している韓国の人類学者たちは大体25人ほどの規模でございます。

これからは、韓国人類学の日本研究が持つ特徴について少し見ることにします。

分類です。先ほど韓国の人類学の日本研究について、伊藤先生、文先生、イム・ギョンテク先生などがレビューをしたとお話しましたが、その方々は韓国の人類学者を幾つかのタイプに分類し、彼・彼女たちの日本研究をレビューしたのです。Typologyというのはやはりちょっと図式的な危険性がありますが、全体的な流れを考察するのに役立つこともあります。ですから、私も先ほどの3人の学者たちが行ったレビューを参考にしながら、日本を研究している韓国の人類学者を幾つかのタイプに分けて紹介してみることにします。

分類の一つが学位を取った場所です。どの国で学位を取ったかということ、その基準で分類することができます。それを整理したら、この表のようになります。全部で24人ですが、この表が示す幾つの特徴を申し上げますと、まずご覧のように1990年代までは西欧と日本に留学した場合が最も多いです。ここです。文玉杓先生が80年代で、90年代は西欧に留学した学者たち、それと日本へ留学した学者たちの方がもっと多いです。ですから、90年代までは留学の方が多ということですよ。

一方、2000年代以降になると海外へ留学した人が急激に減少して、その代わりに韓国の大学で博士号を取った学者たちが増えてゆきます。もう一つ、少し気になっているのは、2010年代以降は日本を研究している人類学の博士が出ていないという点があります。ですから、この表で見ますと、一番最後の博士が16年です。もう5年たちましたが、その間には日本を専攻した博士が出ていない。博士課程で勉強している人類学の学生もいますが、あま

りいない状態です。

もう一つの特徴として、やはりソウル大学と東大への集中が目立ちます。ですから、この中でチョン・ビョンホさん以外は全てソウル大学の学部の出身で、ファン・ダルギさんは一橋で、ファン・ダルギさん以外は全部東大の文化人類学の博士です。

それで、こちらは国内ですが、この中で約2名以外は全てソウル大学の人類学科で博士号を取った人です。ですから、それは学問の多様性という面ではあまり望ましくないことです。あまり望ましくないのですが、もちろんそれは韓国的高等教育に存在している位階です。その位階を反映していると思います。

それと最後に、2010年代以降に韓国の大学で博士号を取った人々が増えていることですが、その背景としてはいろいろあると思いますが、一つはやはり韓国の大学の人類学の教育の水準です。以前と比較したらもっと専門化して、海外の大学における人類学の教育との格差が少なくなっているということです。また、韓国の大学で勉強をしても、様々な制度的な支援があります。ですから、交換留学生として何年間か海外の大学にいて勉強することもできますし、海外のフィールドワークもできるようになってから、学生たちが前と比べて留学する必要をあまり感じない状態になっているからではないかと思います。

それでは、それぞれのタイプに属している学者たちが示す研究の傾向について少しお話しします。あくまでもこれは一般論的な傾向です。ですから学者によって違いますが、一般的な傾向はある程度お話できると思います。

まずは西欧留学型の研究の傾向ですが、その方々は比較的明確な理論的なテーマを持って研究する傾向があるといえます。この場合、理論的なテーマ、理論的な観点というのはもちろん、本人が勉強しているアメリカとかイギリスの人類学界の理論的な観点から日本をケースとして研究するという傾向です。

次に日本留学型ですが、その方々は日本で長期にわたる生活の経験があって日本語が上手で、日本の学界の研究の伝統において訓練を積み、当然のことかもしれませんが、日本の学界の学問的なテーマを持って研究をします。

ですから、そのテーマが必ずしも世界的な人類学的理論と対応しているとはいえないところもあると思いますが、それは日本学界なりのテーマとか理論とか学問的な関心があります。ですから、その意味では、グローバルなレベルの理論的な流れとはズレがあるときもあると感じます。しかし、この方々の研究はやはりこの理由によって、ethnographic depth という面では強みを見せています。

そして国内型ですが、韓国で博士号を取った方々は、韓国の社会科学界の興味とか韓国の歴史と関連があるトピックについて研究する傾向を見せています。

それで、2番目の分類ですが、これは世代による分類ですが、第1世代と第2世代に分けることができると思います。第1世代は70年代から80年代に韓国で学部の教育を受けて、90年代に入って博士号を取った学者たち。それで、第2世代は90年代に学部の教育を受けて、2000年代に入ってから博士号を取った場合です。第2世代の学者たちの一部は実際に第1世代の学者たちの弟子でもあります。ですから、この方々を第1世代といえることができます。私は94年で、こちらです。一方、2000年以降に博士号を取った人々を第2世代と呼ぶことができると思います。

次に行きましょう。世代に分けて分類して、この方々がそれぞれ見せる研究の傾向、それを少し見てみましょう。

第1世代の場合は、大きな枠組みで「日本の共同体と地域社会」というテーマを持って研究したといえます。それには2つほど理由や背景があると思います。第1世代はそれぞれ具体的なテーマは違いますが、共通しているのは大きな枠組みで日本の共同体と地域社会への関心があったといえます。一つの背景としては、先ほど述べたように、彼・彼女たちが韓国で本格的な日本研究を初めた最初の世代だったのですが、あの時期、80年代や90年代は、韓国社会では日本についての知識がまだ非常に不足していました。その状況で研究が始まったのですから、日本社会に関する最も基本的な疑問から研究をし始めたといえることができます。

もう一つの理由はもっと学問的なことなのですが、80年代、90年代当時の人類学という学問のパラダイムの問題です。80年代の末まではまだ、村

研究のパラダイムとか共同体研究のパラダイムというものが人類学の中に残っていたのです。その時期に研究をした世代としてある程度は当然なことですが、日本の共同体の問題とか地域社会の問題に興味を持っていたといえます。

次に、第2世代です。2000年以降に博士号を取った方々ですが、この学者たちの研究のテーマや現場は非常に多様です。本当にいろんなトピック、日本のいろんなテーマについて研究をしています。多様性といえる特徴、傾向を持っています。また、少し興味深いことは、第1世代のフィールドワークのサイトは大抵は関東です。広い意味での関東地域でしたが、第2世代になると北海道から沖縄までです。ですから、日本のあちこちでフィールドワークをしている。「多様化」というような表現がこの第2世代の日本研究の傾向をよく示すといえます。

次に少しお話ししたいことは、共同研究と個人研究の問題です。日本もある程度同じだと思いますが、人類学者たちは地域の専門家としての個人的な研究に加えて、同じ学問、あるいは隣接している学問の地域専門家との共同研究をする場合が少なくありません。韓国でも90年代に入ってから海外地域研究が本格化し、日本社会を社会科学的に研究しようとする動力が拡大してきました。このような過程で、人類学者たちは学際的、いわゆる interdisciplinary な共同研究へ招待されることが少なくなく、これは現在まで続いています。ここでは隣接する学問との共同研究以外に、人類学者たちだけで構成されている共同研究を幾つかご紹介しながら、韓国人類学の日本研究の一つの側面を見たいと思います。

日本に関する共同研究の最初の事例は1980年代の半ばだったのですが、3年間にわたって行われた日本の観光文化に関する研究でありました。ある意味で面白いです。最初の研究なのに、観光文化について4人が共同研究をしたということです。先ほども述べましたが、90年代半ばは韓国社会で地域研究への関心が高まり、その研究費支援が始まったばかりの時点です。海外地域研究に研究費が出たのは、私が覚える限り90年代に入ってからです。ですから、90年代以前は海外地域研究という概念そのものがあまりなかったと思います。

とにかく日本の観光文化の研究なのですが、この研究は韓国の学界で人類学と地域研究が結合されて行われた最初の共同研究でありました。4人が参加して、その研究の結果は『日本人の旅りと観光文化』というタイトルで本として出版されました。これは優秀な本ということで賞も取れました。

次は1990年代の末から20年代の初めまで行われた共同研究でしたが、これは日韓の共同研究でありました。これは、韓国を研究している日本の人類学者5人と日本を研究している韓国の人類学者5人が一緒になって研究チームを構成し、共通の研究テーマを一緒に選定して、そのテーマについて相手の国を研究する形でありました。研究の結果として自然に韓日間の比較ができるような、そのような企画だったのです。それで成果が2つの本として慶應義塾大学の出版部と韓国の高麗大学の出版部から出版されました。

それで、2000年代の初めは、韓国の民俗博物館の課題だったのですが、「日本の関西地域の韓人同胞の生活文化」、そして「関東地域の韓人同胞の生活文化」という共同研究が、日本を専門にしている韓国の人類学者たちによって行われていました。

私は幸いといたしますか、この3つの共同研究に全て参加する機会があったのですが、共同研究にはもちろん難しい点もあります。難しい点もあったのですが、今振り返ってみますと、やはり仲間の学者たちと一緒に研究するのは楽しい面が多かったです。楽しくて、また、そのシナジー効果があるのも確かなことです。

次に、これも少し興味深いのですが、先ほど紹介した共同研究の事例の後には過去のような共同研究が行われていません。それは少し不思議です。先ほどお話したように韓国で日本を専攻している人類学者の数は着実に増えていますが、一緒に研究する事例が現れなくなったというのはやはり少し興味深い点ではないかと思えます。

その背景とか理由として私が考えているのは、一つには、韓国の人類学者たちが置かれている制度的な環境によるものです。人類学者たちに要求されている制度的あるいは学問的な競合が日増しに増えているのです。

ですから、私の考えですが、若い世代の人類学者たちは、それぞれに属し

ている組織の境界を超えて他の組織に属している学者たちとネットワークを作る余裕がなくなっているのかなという感じがします。

それでもやはり、制度的な環境という理由や背景、これだけを答えとするのはやや十分ではないでしょう。他の説明が必要だと思いますが、正直に言って、私ははっきり分からないのです。ですから、もしかして世代の文化のせいかないという考えもあります。というのは、最近の若い研究者たちは共同で研究するのを忌避している傾向があるかなと思うのですが、日本の場合はどうですか。とにかく 25 人の学者がいるのになぜ共同の研究がされていないかということは、やはりもう少し共同研究が必要ではないかと考えています。

ですから、共同研究は最近あまり見えないのですが、一方、各自が研究した結果をまとめて出版する方式のコラボレーションは今でも出ています。ですから、自分のことを申し上げてしまい申し訳ございませんが、例えば先ほど山先生からご紹介いただきましたけれども、私の場合は自分の研究と他の人類学者の研究を集めて、『ジェンダーと日本社会』とか、今年の秋には『在日韓国人の人類学』という本が出される予定であります。個人的な希望ですが、近いうちに第 2 世代の学者たちが中心になって面白い共同研究を進行されることを期待しています。

最後になりますが、これまで説明したように、韓国で人類学的日本研究が本格化してから 30 年ぐらいになり、日本社会と文化に関する知識の蓄積に意味のある重要な貢献をしてきたと思います。特に長期にわたる現地調査と理論的分析学の研究は日本への理解を深め、客観的かつ専門的なアプローチをするのに大きな役割を果たしたと評価したいです。

でも、一方で限界と課題も存在しています。単純なことから申し上げますと、近年、日本を研究する新規の博士があまり出ていないということです。その理由としては、日本地域研究への世界的な関心の低下ということがあって、韓国の大学院生の間に見える海外地域研究への関心の低下、それはもうはっきりしています。

例えば、うちの大学院の学生たちの場合は、最近は韓国を専攻している学生たちが最も多くて、海外の地域ですと最近は東南アジアを専攻している学生たちが着実に増加していますし、その代わりに日本とか中国への関心は、

日本と中国を専攻している学生たちは急減している状態です。その理由としては、最近の韓日、日韓関係があまり良くないということもあって、新規の博士が少なくなっているということです。特に現在は第1世代の学者たちが退職し始めていますから、critical massの問題があります。critical massの維持のためにも、新規の博士がもっと欲しいという感じがします。

それで、課題の2つ目は、先ほど共同研究についてお話したように、学者たちの中でお互いに対話とか協働の作業があまりされていないような感じですか。ですからこれもやはりアカデミック・コミュニティの形成とか、共通の問題意識を発展させていくという面では、もう少しあってほしいという感じがします。

それで、最後ですが、一番重要な課題と思いますが、やはり韓国的日本研究のアイデンティティーという質問が残ります。ですから、例えば先ほど西欧とか日本について話しましたが、西欧の日本研究あるいは日本の日本研究とは違って、韓国的な日本研究の特徴は何かという質問ができると思います。

それについて少しだけお話しますと、もちろん一般論的な話になりますが、西欧の人類学はやはり理論的な議論の発展ということを最も大切にします。それに比べれば、日本の人類学は、私の感じとしてはミクロ的で実証的なデータ、そのような実証的なデータに基づいて研究を蓄積していく強みが日本の学問の力として感じられますが、西欧の学問としては理論的な議論の発展こそが一番共通している点です。

それに対し、韓国の人類学の日本研究は、西欧の人類学に比べれば日本というフィールドに隣接しているため、データの深さなどに有利な点はもちろんあります。それと、日本の人類学に比べれば、日本という研究の対象からある程度は距離を保つことができます。

より幅広い、あるいは東アジアの観点から日本にアプローチする、あるいはもっと普遍的な理論的な視点から日本を研究する、それが可能ではないかと考えられます。ですから、日本と西欧の日本研究の流れの間のどこかに韓国の日本研究があるのではないかと考えています。

今日は時間の関係上、結局は全体的なレビューにとどまり、詳しいことはちょっと紹介できなかったのですが、私が見ているのは、現在活発に活動し

ている幾人の若い学者たちです。40代あるいは50代の人類学者たちがしている日本研究に期待を抱き待っているような感じです。ですから、先ほどもお話したのですが、彼・彼女たちは本当に多様なテーマで、あるいは自分の理論的な観点から日本を研究している状態です。

例えば、記憶の政治、Politics of memory の観点から日本の特攻隊の記憶を研究しているイ・ヨンジンさんや、戦後日本のジェンダー秩序と介護の問題、それと家族の問題を研究しているジ・ウンスクさんや、中学校がやっている階級の選別機能について研究しているパク・ジファンさんや、フーコーの governmentality という理論的な観点から日本の高齢者たちを研究しているキム・フィギョンさんや、科学技術の人類学の観点から日本の防災文化を研究しているイ・ガンウォンさんなどをご紹介します。

これからもし10年ぐらい後にまた東大の Global Japan Studies プログラムで今日と同じようなタイトルでどなたかが韓国の日本研究について発表したら、もっと明確な特徴とか、あるいはもっと具体的な成果を伝えることができるのではないかと期待しています。

不十分ですが、今日はこれで私の発表を終わらせていただきます。聞いていただきありがとうございます。カムサハムニダ。

鍾：権先生、どうもありがとうございました。とても興味深いお話でした。次は山先生に短いコメントをしていただきたいと思います。山先生のほうからコメントをお願いします。

山：はい。今日、権肅寅先生をお迎えして、韓国の人類学、特に韓国の学界で活躍されている人類学者の方々がどういうふう to 日本を研究してきたかという歴史について、非常に分かりやすく世代ごとの特徴などを示していただけたと思います。

日本では90年代以降、近代の学知、学問の歴史を批判的に見直すということが進みまして、当然、人類学や、それから民俗学といった学問も、特にオリエンタリズム批判などと重なりながら植民地主義批判といった形で、人類学や民俗学の歴史も非常にたくさんの研究者が検討してきたことがあり、日本の学者が当時の朝鮮半島をどういうふう to 研究していたのか、どういうふうなまなざしで見えたのか、といったことは研究されており、研究者も

多いのですが、ではそれ以降、1945年以降はどうだったかということについては、まだ同時代的な部分があったからかもしれませんが、実はあまり知られていないのです。

特に1965年の日韓国交正常化以降、東京大学であれば泉靖一先生を中心に、戦前のご縁等もありながら、韓国との人類学・民俗学の交流が復活していく。そういった人脈の中で、日本では伊藤先生とかそういった先生方が韓国の専門家として交流されていくという流れがあるわけです。

一方、韓国の研究者がどういうふう to 日本を研究してきたのかということについては、実はあまり日本の研究者は意識していなかったり分かっていなかったりするところがあると思います。それを今日は詳しく教えていただき、大変勉強になりました。

まず1980年代に文玉杓先生がオックスフォードで博士号を取られて、それが群馬で2年間、本格的なフィールドワークをされた。これがいわゆる現地調査の長期間にわたるフィールドワークの最初の成果だということです。それが1980年代の半ばですから、実はまだ35年ぐらいということですよ。そう考えると、まだ非常に最近の話なんだということですから驚きますし、韓国が日本を見る、ある種の調査対象として日本が人類学の対象になってきたという非常に大きな転換点かなと。それは韓国の経済成長であるとか国際関係が変わってきたということが大いに関係あると思いますが、どのような研究が出てくるかということにそういった社会的背景が如実に反映されているように思いました。

その後、韓国の方々が西欧に留学して、そこで人類学の訓練を受けて日本を調査するというのが90年代です。特にそのタイプが中心になって、権先生もその世代に当たるということですが、その後また少し空いて、2010年代に日本研究の人類学者が国内型として結構たくさん出てくるということでした。確かに東京大学に留学して、日本に留学して日本の研究で人類学で博士号を取った人がぼつぼつといますが、全体としてはやはり少ないのです。意外ですが少ないです。アメリカなどに留学して博士号を取った90年代のタイプと、その後で国内型が増えているという特徴があるとおっしゃっていました。

また、古い世代の特徴ということでしたが、共同研究の文化というのがあって、それも日本人の旅行と観光文化という旅行研究が最初で、4人から始まったということで、これも非常に興味深いお話です。こういったことは実は記録に残りにくいのです。やっていた人が近くにいたりとかしないと分かりにくいことだと思うのですが、その後の主な共同研究は、私も大体、韓国で日本に関する研究が出たら韓国に行き本屋でできるだけ買うようにしています。

そういった共同研究の文化があったのですけれども、あと面白いのは、やはり人類学というある種の普遍的な discipline と、日本地域研究という地域研究との関係がどうなっているのかというのが結構難しい問題です。今日の終わりのほうで韓国的日本研究のアイデンティティーということでご紹介いただいた、若い人たちの研究テーマを見ると、確かに日本研究なのですがけれども、一方では普遍的なテーマを研究しているというか、これをぱっと見る限り、日本の研究者がこのようなテーマの研究をやるとすると、たぶん人類学より社会学のほうが非常に近い。あるいは、Cultural studies とか、そういった分野のほうが近い印象を受けると思うのです。

これは常々感じているのですけれども、韓国の日本研究の人類学者が日本の研究者と学術交流、共同研究をおこなうときに、どの分野の人と一緒にしたほうがより効果的なのかという問題です。意外にも人類学者同士だとあまり進まなくて、こちらの受け入れ先は社会学とかそういった文化研究のほうがいいのかといった印象も受けたりします。

また、この後の若い人たちの就職の問題です。これも少し気になりました。つまり、これを見ると、確かに日本研究だけれども、この方々は日本学とか日本研究という枠で就職していかれるのか、それとも人類学の discipline で人類学科に就職されていくパターンになるのか、両方あると思うのですが。

権：やはり両方です。

山：その選択肢がどちらのほうに寄っていくのかとか、そういうことも少し気になりました。それが恐らく、この世代の人たちが弟子を育てていくときに、その弟子はどこから出てくるのかという。日本学科に所属している先生から人類学を学んだ場合は、その方々はその後どういう展開になるのか、あ

るいは人類学科の中で日本研究という立場で人類学の日本研究を学んだ弟子はどう展開するのか、違いが出てくる可能性はあるかなど。先生は先ほど10年後とおっしゃっていましたが、10年後にどういうふうな弟子の再生産が行われるのかというのも少し関心を持ちました。

私は権先生に初めてお会いしたのが2～3年前ですね。直接お会いしたりして、日本に来ていただいた時も一緒に調査に行ったりしましたけれども、やはり権先生が素晴らしいと思ったのは、大変話しやすいし親しみやすい。そして、フィールドも一緒に行ったのですが、やはり地域の人にもすごく好かれる。コミュニケーションがお上手なのです。

権：いやいや。

山：やはり人類学者の方は、そういうファーストコンタクトというのですか、地域の人と触れ合ったりして楽しく何となく交流しながらフィールドに入っていくこと、その辺りが本当に素晴らしくて、すごく感動もしたのです。そういったことは元々の性格もあると思うのですが、やはり人類学のdisciplineとうまく合って……

権：私は合っていないのです。私はいつもつらいのです（笑）。

山：合っていないのですか。

権：合っていないのです。

山：僕が気になるのは、若い世代の人たち、普遍理論でやってこられた方々が、そういういわゆるフィールドワークとか、日本の文化・社会に入っていくときに、ある種のトピック主義的になってしまわないか。フィールドワークのときもどんな形でやっているのかとか。

権：フィールドワークもちゃんとしています。いろんな面で私より本当に優秀な世代です。私がここに書いている方々は理論的にも強いし、フィールドワークもちゃんとしています。

山：ということで、世代間の何か違いがそういったところにあるのかなど。そもそも日本の文化や社会に関心があって研究されているのか、それとも理論的関心から先に入られたのかによって違いがあるのかな、ということも気になったのでお聞きしたいと思いました。

権：ありがとうございます。いろんなコメントを本当にありがとうございます

す。就職の問題に関して、もちろん日本学科と人類学科の両方がありますが、人類学科に就職している場合が多いです。パク・スンヒョン先生のように日本学科に勤めている場合もありますが、日本学科はやはり地域学の課程で博士課程は本当に弱いほうです。私はそう信じています。

discipline と地域研究を比べれば、修士課程までは地域研究が持っている強い面があると思います。それに対し、博士課程はプロの学者を育てる、トレーニングする所です。ですから、discipline の観点と discipline の方法論と理論がものすごく重要ですので、地域学で博士号を取った場合と、人類学のように discipline で博士号を取った場合とを比べれば、少なくともその学問の場では、大学の場ではやはり discipline のほうが地域学よりは色々とあれだと思えますが、どうでしょう。でも、先生の質問に直接お答えするならば、今までは人類学科に就職したケースが本当に多いです。

それと、普遍的な理論から日本を一つのケースとしてアプローチすることなのですが、私の場合は私自身が理論的にあまり強くないと思います。それは私が留学していた所の学問的な雰囲気も少しあったと思いますし、私の個人的な性格の問題もあったと思いますが、やはり今は 40 代、50 代の若い世代の人類学者たちは普遍理論的な関心がうんと強いのです。ですから、私の個人的なものだけではなく、やはり世代の差です。私の世代の人々と比べれば、40 代と 50 代の人類学者たちはやはり普遍的な理論に興味が強いほうです。

でも、ここで紹介した韓国の人類学者たちは全員、日本での長期間のフィールドワークをちゃんとやった方々です。ですから優秀な方々で、理論とデータを集めて博士論文を書いたのですが、問題になるのは博士論文以降の研究です。私自身もその経験をしました。

ですから、人類学という学問は方法論として本当に難しいところがあります。やはり博士論文のためには最低 1 年間、長期間の現地調査をしますから、何とかある程度ベースを持つデータができますが、博士号を取ってから、特に就職してからフィールドワークというのは、本当になかなか時間が取れなくて足りないのです。ですから、データを使って理論的な分析を加えて論文を書くというのは、本当につらいことです。

でも、博士論文のレベルでは、この方々は理論的にもデータの的にも本当に優秀な研究者だといえます。回答はこのぐらいで、ありがとうございます。

山：ありがとうございます。

鍾：ありがとうございます。権先生、今、チャットのほうに東京大学東洋文化研究所の園田教授から質問が出てきています。お答えいただけますでしょうか。

権：はい。ご質問は、「韓国の日本を対象にした人類学者は、誰を読者として仮定して活動していますか」というものです。

ありがとうございます。韓国で日本を対象にして研究している人類学者が読者として考えているのは誰かということですが、もちろん一番大事な所は、アカデミックサークルですよね。人類学界の学者たち、アカデミックサークルの中で議論を発展させていくのに役に立つというのが学問的に一番重要な点ですし、それを広げれば人類学界だけではなく韓国の社会科学の中で日本研究という学問的な目的に役立つということがあります。

ですから、両方の学者たちが最もプライオリティーの高い読者になります。それ以外にも、やはり一般的な reader たちを考えて本を書いたりすることもあります。今のような学界の雰囲気ではなかなか難しいです。なかなか難しいということには2つの面があると思いますが、1つには、やはり教授として大学で生き残るのは大変です。ですから、やはり有名なジャーナルに論文を載せて、それを点数に換えて、assistant professor から associate professor へ、あとは教授になること、この過程がすごく大変になっています。ですから、一般の読者のことを考えて、日本についてもっとポピュラーな本などを書くだけの余裕がないほうが多いのです。このように、学問的なパフォーマンスを一番大事にしている今の大学の雰囲気は、100パーセントいいとはいえない面があります。

ですから、それが一番大事な背景であると思いますし、もう一つは、やはり学者の個人的な能力、talent の問題です。一般の人々のために面白くて意味のある本を書くのは誰にもできることではありません。

私の場合も、例えば『ジェンダーと日本社会』という本を編著したときは、preface の中で、この本は大学の学部生や大学院生や学者たちおよび、

educated journal reader、educated journal audience などに向けて書いていますと述べたのですが、韓国の一一般のオーディエンスはあまり多くないのです。ですからその点でも、学者としては、一般のオーディエンスをターゲットにして本を書くモチベーションがなかなか湧かないのです。

ご質問に戻りますと、韓国で日本について研究している人類学者たちがターゲットにしているオーディエンスというのは、あまり多くないといえるかもしれません。仲間である人類学者と、もっと広い範囲での社会学者です。

ですが、地域研究、area studies という面では、人類学者たちの具体的な研究は、他の例えば社会学とか政治学とか経済学などができない日本文化とか日本社会の特徴を具体的な事例から分析してみせるという点で、隣接する社会学者たちから結構よく受け入れられているのです。先ほど共同研究という問題について話しましたが、隣接する社会学者から共同研究へ招待されているケースは結構多いのです。人類学者1人ぐらいはぜひ、という感じです。

園田：大変よく分かりました。ありがとうございます。

鍾：権先生、ありがとうございました。時間になりましたので、今日の講演会はここで終わらせたいと思います。権先生、山先生、今日はどうもありがとうございました。

5

GJS「アジアにおける日本研究」 講演会シリーズ 第4回

—— 劉岳兵（南開大学日本研究院 院長・教授）・
王中忱（清華大学日新書院 院長、中国言語文学学部 教授）・
林少陽（香港城市大学中文及歴史学部 教授）

日時：2021年7月20日（火）15：00～17：30

会場：オンライン（Zoom）

講演者：

劉岳兵（南開大学日本研究院 院長・教授）

王中忱（清華大学日新書院 院長、中国言語文学学部 教授）

林少陽（香港城市大学中文及歴史学部 教授）

講演タイトル：ラウンドテーブル 方法としての「日本」？ 中国における日本研究の課題と可能性

司会：鍾以江（東京大学東洋文化研究所 准教授）

使用言語：日本語・中国語

鍾以江：3時になりましたので、今日のGJS講演会を始めたいと思います。こんにちは。東京大学東洋文化研究所国際総合日本学講演会担当の鍾以江と申します。本日司会を担当させていただきます。多くの方にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。ご招待の先生方の講演の前に、少し説明をさせていただきます。

今年度、国際総合日本学はアジア各国の日本研究の講演シリーズを企画しており、本日のイベントはこのシリーズの一部となります。中国における日本研究について3名の先生方にお話をお伺いできればと思っております。アメリカなどの西洋の国では、日本研究はどんどん元気を失っているような状況の反面、中国の日本研究では規模でも水準でもどんどん上がってきているように感じています。このような上昇期においていろんな可能性もあれば、問題も多く出てくるのではないかと思います。本日の3名の先生方は、どなたでも中国における日本研究の現状、問題、可能性について深くお考えを持

たれている先生ですので、今日はぜひいろいろご意見を伺い、活発な討論を行い、中国の日本研究への理解を深めていけたらと考えています。

3名の先生方をごく簡単にご紹介しますと、まず香港城市大学中文及歴史学部の林少陽先生と、南開大学日本学研究院の院長を務められている劉岳兵教授と、清華大学中国言語文学学部でしょうか、中国では「系（シー）」と読みますが、学部あるいは研究科の王中忱、王先生です。

最後に研究会のスケジュールを簡単にご紹介します。本日のイベントは全部で2時間半あり、5時半に終了の予定です。これから3名の先生方にはお1人10分ずつお話ししていただき、その後ラウンドテーブル討論に入ります。およそ1時間の討論が終わりましたら質疑討論に入り、どなたでもご意見やコメントがあればぜひ共有していただければと思います。

本日の会議の使用言語は日本語と中国語です。ただ日本語は主要言語ですので、全ての参加者が分かるように私は中国語を簡単に日本語に翻訳する場合があります。その場合、少し時間はかかりますが、ご理解いただければ幸いです。

では早速講演会を始めたいと思います。まず南開大学日本学研究所所長劉岳兵先生、ご講演よろしくお願ひします。劉先生の講演タイトルは、『日本研究の喜と憂、或は杞憂？——最近学界の所見と自分の作業をめぐって』です。

劉岳兵：私は一番若いですから、最初にお話しさせていただきます。

对不起啊，我用中文说。怎么说呢，我觉得还是出于一个日本史的研究者的专业自觉吧，我下面要说的呢，主要是国内日本史学界的一些最近的基本情况。我在这里就是想跟大家分享一下我所见到的一些事情和我现在做的一些事情。其实啊，这个日本史学界应该是非常高兴的事情，为什么这么说呢？我谈谈出版方面的事情。

从日文翻译到中文出版的日本史已有几套。你看这个是早稻田大学日本史。有10来本翻译过来了。还有一个岩波日本史，这个也翻译过来了。但是我都没有把他们写到这个PPT上，我写到的是讲谈社的日本史。为什么这样呢？我觉得因为像早大这个日本史，它是非常旧的一套书，刚才你看，对吧？这都是很老很老的，都是这个领域比较经典的。我的意思就是说，像这些书，它不需

要做宣传。它就是经典。还有比方说这个岩波日本史，之所以叫岩波，是因为它是岩波新书里面出的是吧？它在日本也卖得很好。我觉得这两套书都非常好，但是在国内基本上没有人宣传，但是讲谈社，就我所知道的，至少有过四五次宣传。当然这个宣传很大程度上可能都是出版社在做，它说“用一套书，读懂日本历史”。这个我觉得完全是出于这个出版社。那个目的很明显。

参与这些书宣传的当然都是这个领域非常有特色的一些老师，不过讲谈社这套书有一些不是研究日本的学者，比方说大家都知道的，我所知道的，当然具体他们说甚么我没有去追踪。像上海的葛健雄先生好像有一次也参加了。我觉得这个对于大家了解日本来说都是非常好的事情，同时对促进刺激中国日本史学界也是非常好的事情。当然对这个书怎么评价，有10本我们还没有仔细的去，实际上是可以仔细的去做一些书评。宣传是一回事，学术是一回事，这也是我最近在做的一个事情，宣传很容易与现实连一起。这是我一直所敬而远之的东西。但是对于一般的日本史研究者来说，和对一般的读者来说，我觉得宣传是一个好事情，可以引起他们对这个历史的关注、学习。而且它本身好像是一套比较通俗的书。这个我是作为一个好事来介绍的。

再下面一页。这套书《日本中国绘画史》我也要介绍一下，我虽然没有做甚么事情，但是因为和主编江静教授很熟悉，我在浙江大学工作期间，和江静主编是一个研究室，一个屋子里面对面坐了三年。她现在在浙江工商大学里面做这个事情。这套书是日本学者研究中国专门绘画历史，这个现在出了10本，还有5本书要出，这也是非常有意义的一个工作。有很多种丛书，很多东西都放进去，弄得很杂，但是这一套书不一样，全部是非常专业的，而且选的这些作者也都是非常专业。所以这套书出来以后，对中国绘画和中国艺术的研究都非常有意义。

下面说我自己的事情。昨天晚上正好告一个段落，就是我们准备做一套叫《善美原典日本研究文库》，这个事情筹备了很久，今年九月份可能第一辑可以出，就是画面上说的四卷本的《井上哲次郎儒学论著选集》。大家都知道井上哲次郎三部曲，影响非常大。可以说是奠定了研究日本儒学范式。当然选择他来做也是有各种各样的机缘。但是最基本的出发点，和刚才江静教授编的那套书实际上是一样的意思，就是比较专业。在这里介绍一下，你说是一种宣传吗？也不是一种宣传，我觉得是先发出来让大家知道这个事情，让大家知道有人在做

这样的工作，先给它发出来在六月份的中华读书报上面。下面一页好吧。

这段以“回归原点，与史料肉搏”为题的文字是已经排好版放到里面去的，实在很短，一千多字，虽然说是是一千多字，但是我多年来的一些想法都放在这里面。比方说最重要的，往下翻吧。有中文和日文版，日文的最关键。对，就在这里。最重要的，是关于“原典”，为什么叫原典呢？我特别喜欢这个词，这个画面大家都能看到是吧？大家看就好了，我不一定照着它讲，不一定照着它念。咱们这个会的题目叫做“作为方法的日本研究”是吧？作为方法的日本，这个我说实在话看到以后有非常复杂的感情。我2015年写了《“中国式”日本研究的实像和虚像》，可能有的学校把它作为研究生的教材。这本书探寻中文的日本研究到底是怎么回事，主要是着手在日本思想史和中日文化交流史这两个领域。但是大家都说作为方法的甚么甚么，好像是这个东西很时髦。作为方法的中国等等。甚至是用一个人名，一个事件来作为方法。对吧，我觉得当然理论或者是研究方法，或者是怎么看这个问题，都是很重要的。但我觉得中国研究日本，有比这个更重要的东西，就是我一直以来强调的，就是要把日本本身作为目的，要把它作为一个本体。你如果不了解它的话，你把它作为方法干甚么？对吧？那就不是你要去了解它本身，你是把它作为方法来别的事情，对吧？我觉得这个至少对于日本研究者来说，这个不一定，当然可以讨论，但是就我来说，我不觉得这是一个好的方法。我不觉得是好的一个提法，可能很容易引起误会。所以我觉得不管怎么样，一定要直接去面对它。

从这个意义上，我重视原典这个词，这个词是来自日本，叫《新编原典中国近代思想史》七卷本（岩波书店2010-2011年）。对吧？就是这个原原本本的，是需要有这个能力的。你要有这个能力把它原原本本的提示出来，因为你不可能和日文的东西提示出来对吧？你要用它，要把它翻译成中文，要非常准确的，非常客观的让人家可信的对吧？把它原原本本的提示出来，所以我觉得这个原典，一个是原，原始的原，它必须是第一手，它必须是原始，必须是最初。还有一个，就是典，典是甚么？典是一个典型对吧，它是有代表性的，不是说所有的。当然你研究不同的问题，所有的材料它都是史料对吧？但是史料这么多，我们要最具有代表性的，对某一个具体问题最具有代表性的一些材料，把它提示出来，这是一个。还有一种方面，就是说一定要使提供的原典，一定要是系统的，而不是零散的。所以我刚才说好多中国翻译的日本的东西，有很多，甚么东西

都往里抓，那人家觉得，这个东西很杂乱对吧？但是刚才所说的江静教授编的那套，它完全很限定的，就是一个领域里面的给它做深入对吧？我的理想中也是这样，一个是原始，一个是典型的，还有一个就是系统。我希望这一套书，这是第一辑，我希望还会有第二辑，还能够接着做下去，能够真正的作为目的的能够提供一些最基础的工作。我不要去创造甚么东西，我也创造不了甚么东西。我只是提供一些最最基本的材料，系统的提供。我也不想去创造甚么东西，对吧。

但是我也不是完全否定理论。还是有一个最基础的东西。我记得谁说过，理论的东西也不断的在变化对吧？但是史料的东西，它总在那里，但你对它的了解，总是片面的。当然史料和理论可能不能完全分开，比如说我在《日本近现代思想史》的书里面写的好像让人感觉到我是排斥理论的，但实际上我不是排斥，我是反对理论先行的。就是说你要和史料去肉搏的过程当中，你能够对这个问题有所体悟，能够提供出你自己的观点，我觉得这个才是有意义的。我觉得以江兄这个“作为方法的日本”题目出得非常有意思，是一个比较经典的题目。作为方法的，这个有很多话题可以讨论。

当然还没有说这个忧是吧，实际上忧也在这里。就是说，这个作为方法的日本，是不是可以这样去推广的事情，这个忧本身在这里。还有一个就是说，我们这个面对这些翻译的东西，我们应该怎么定位这些东西。我们怎么加强自己的研究，对我而言是一个非常让人忧虑的事情。所以今天我觉得很高兴，我很少参加这种活动，基本上不参加。但是少阳、中忱老师都是非常好的朋友。我没有办法。谢谢三位，我先说到这里，开个头，抛砖引玉，谢谢。

鍾以江：谢谢刘老师，开了一个非常好的头，提出来具体的批评，这样吧，我非常简单地把几个要点给大家介绍一下。

劉先生のいくつかのキーポイントをここでご紹介します。1つは劉先生が常に強調されている点ですが、歴史研究の面では史料が一番大事だということです。それから、この講演会のタイトルは、「方法としての『日本』？」となっていますが、これは史料を一番大事にせず、まさに理論を先行させるといった考えを表しているのではないかと劉先生のご心配です。このタイトルはたしかにそういうように聞こえます。劉先生はこれについては保留がある

ということです。理論と史料の関係について、歴史研究者としては常に考えないといけないというご指摘だと思います。これはまさにこの後よく議論していきたいポイントです。

劉先生が今取りかかられている研究で、「原典」という言葉が使われていますが、原始的な史料、原始的なものという意味での史料と、典型的なものという意味での史料と、まとまりがあり systematize されている資料の編集が歴史研究の第一歩だと先生はおっしゃっていて、先生ご自身が今取りかかられている「善美原典日本研究文庫」というシリーズを紹介していただきました。この原点シリーズ文庫の中の最初の翻訳作品は、明治時代の哲学者井上哲次郎の著作です。これは今先生が取りかかられているプロジェクトで、そろそろ出版社から出るころのようです。劉先生、もし私が間違えておりましたら後で直していただければと思います。

劉岳兵：ありがとうございます。

鍾以江：ありがとうございました。では早速次の王先生にお願いできればと思います。

王中忱：ご紹介をいただいた王中忱と申します。まずこのシンポジウムをよく用意してくださった鍾以江先生にお礼を申し上げます。劉岳兵先生、鍾以江先生も久しぶりに同じテーブルを共有し話ができまして、とてもうれしいです。

私の問題提起としてお話をいただければと思います。中国と日本との関係については、20世紀、90年代に既に「政冷経熱」という言い方で表されています。21世紀に入ってから、両国間の政治・外交関係については、短期間の対話があったにもかかわらず、今でも冷たい状態が続いていると思っています。経済貿易面においてはどのような状態になったか、その領域の門外漢ですので何も言えませんが、ここで主に文化の面からお話させていただきます。とりわけこの20年間の中国における日本書籍の翻訳出版という面から見た「政冷文熱」という現象を取り上げて、文熱現象の起きた背景を分析しながらその問題点を指摘しておきたいと思います。

しかしまずお断りする必要があるのは、ここで述べる日本書物の翻訳出版ブームということは、全体的な統計でデータに基づいたものではなく、あく

までも私の個人的な印象に基づいたものであります。統計データを挙げる
ことができないため、とりあえず私にとって印象深く覚えているいくつかのシ
リーズを例として見てみたいと思います。

まず「阅读日本书系」というシリーズですが、これは中国の社会科学文
献出版社と日本の笹川平和財団によって企画された「中日民間文化出版プロ
ジェクト」として、2009年から発足して2017年までの8年間、日本の政治、
経済、文化といった各領域の書物100種類余りが翻訳出版されました。この
プロジェクトに参加した出版社は7社あり、翻訳者、監訳者および本の選定
委員を合わせて100人を超えていると思います。2017年10月9日、中日
国交正常化45周年の記念行事の一環として、このシリーズの出版記念座談
会も開かれ、中国新聞社というメディアが報道したということです。

2番目ですが、商務印書館の「日本学術文庫」と中華書局の「近代日本人
中国遊記」という2つのシリーズです。前者の場合は2004年に企画し始め
た時には、10年間で150集を出すと言いましたが、今点検してみれば当
初の目標にまだまだ達していないと思います。ですが、このシリーズはまだ
まだ出版し続けているところですから、主催者たちがまだまだ頑張っている
と考えられます。後者は2007年から2009年まで、既に12集ぐらい上梓
されましたが、今後は続けるかどうか分かりません。ですがこの2つのシ
リーズは、いずれも在日中国人学者によって企画されたもので、翻訳者も在日中
国人学者や日本留学経験者を主体としています。とても目立った特徴として
は、全てに学術的な解説を付していることです。

3番目は先ほど劉先生も取り上げられましたが、講談社の「中国の歴史」
と「日本の歴史」という2つのシリーズが、中国の2つの出版社によって出
されたことなのですが、一応前者は「理想国」という民間の文化企画系会社
によって企画されたもの、後者は「新経典」という民間の文化企画会社によ
って出されたものと言われています。

もちろん以上のシリーズ以外にも挙げられるものが多くあります。例えば
京都学派の中国史研究者である内藤湖南と宮崎市定、民俗学者である柳田國
男の代表作がほとんど翻訳出版され、明治文学の代表的な小説家、夏目漱石
の小説はさまざまな訳本で繰り返し刊行されています。村上春樹は今でもべ

ストセラーになっていますが、それと同時にポストモダニストと見なされている島田雅彦、多和田葉子のような先鋭的な作家の作品もよく翻訳されています。これらの例だけ見ても、「文熱」という現象が確かに中国に起こったと言ってもよいのではないかと思います。

ではなぜこのような文熱現象が起こったかについて、もちろんいろいろな視点、いろいろな角度から分析できますが、簡単に言いますと、やはり出版市場の底流には、多くの中国人読者が日本を知りたいという意欲があるのは間違いないだろうと思います。そして20世紀80年代から中国と日本の文化教育交流を通して育てられてきた人材が、今現在の「文熱」を支えているのではないかと私は考えています。

しかし中国語に訳されたこれらおびただしい日本書物を調べてみると、気が付いたこともあります。先ほど申し上げた「日本学術文庫」「近代日本人中国遊記」および講談社の「中国の歴史」、その3つのシリーズを除けば、数多くの中国語に翻訳された日本書物、例えば既に刊行された100種を超えた「閲読日本書系」の各訳本には、解説にあたるものがほとんど付いておりません。この体系全体に関する「月報」のようなものも発行されていなかったのです。これは中国における日本書物の翻訳出版の常態、すなわち平常の常態であります。それは出版社と翻訳者の怠慢を表すというより、むしろ中国の日本研究の遅れた状況を表しているのではないかと思います。言い換えれば、先ほど申し上げた「文熱」とは裏腹に、そのおびただしい書物を解説・分析できる研究はまだまだ用意されていないと言っても過言ではないと思います。

このような状況を踏まえて今回のシンポジウムの趣旨、中国における日本研究の課題と可能性を考えると、日本研究に携わっている者としては気持ちが重たくなっていますが、もちろんそれと同時に今回の議論の趣旨の重要性、必要性も深く感じています。以上、問題の提起として申し上げます。以上です、ありがとうございました。

鍾以江：王先生、どうもありがとうございました。非常に興味深いお話で、出版事情と研究状態とつなげて問題を提起するというアプローチは、非常に興味深く感じました。出版のような社会情勢との関連で、全体的に中国にお

ける日本研究の問題とこれからの発展の可能性を見ることは、非常にいい視点じゃないかと感じます。ありがとうございます。次、林先生、よろしくお願ひします。

林少陽：ご紹介をいただきました林と申します。まずは少しここまで2人のさっきのご登壇者の先生方との違いについてちょっとお話をしますと、さっき劉先生は学部はどちらかといえば中国哲学出身の研究者であり、王中忱先生はどちらかといえば中国近代文学のご出身だったのですが、2人どうも日本研究を中国で代表するような研究者でもありますが、私はこの2人の先生と若干違うのは、日本語科が学部だったということで、博士までは制度的にはどちらかといえば中国研究というよりは日本研究の訓練を受けたという背景なんです。今度のPPTが日本語である場合は私は中国語で、PPTが中国語である場合は日本語でという形です。

这里我自我介绍的话，我自己是日语系出身，受的是日本研究的训练，但是我实际上在近二十年主要还是中国研究，同时日本研究也在做，所以我自己的认同基本上是一个东亚的研究者，当然作为一个这方面的不足，我是不懂朝鲜语，对朝鲜半岛的知识也自觉不足。

今日は話はずれないように、具体的なテーマから始まったほうがいいのではないかということで、ちょっと発題のテーマを「日本の知識人と戦争責任の問題、戦後思想と現代思想との間に」という題目をとりました。戦後思想の主体は日本の「リベラリズムの知識人＋、マルクス主義の影響下にある知識人、具体的には後者は共産主義者と社会民主主義者」、という構成の知識人からなっているというものです。

この数十年間の日本においては、日本語として「現代思想」というキーワードが頻出するようになり、そして大学の学科的制度生の中でもごく一部の大学なのですが、一つのディシプリンとして固定するようになりました。例えば、東京大学の駒場のほうには、後期課程として「現代思想」というコースが数年前からあるようになりました。その文字面の意味は漢字的には近現代思想という意味なのですが、しかしこれは俗流的にはポストモダンと呼ばれてる、フランス現代思想を主とする欧米現代思想の現実化された後のもの、とその影響下にある人文科学諸領域の再解釈を広く指していると理解できます。

この欧米現代思想は、70年代中期から2010年代中期辺りまでは、約40年間日本の人文科学、特に部分的には社会科学のほうにおいても流行し、その時間の幅が大きいということ、そしてその影響の強さということは見逃すことができない。そしてこれは単なる外来思想としてではありますが、近代日本の知識人の文脈もあるとして、知識人思想史の文脈から伺うべきだということ、ちょっとここで強調しておきたいと思います。

例えば成田龍一さんの最近の本の中では、次のように語っています。

这部分是日文的引文，所以我日文的画面就用汉语讲，反过来我就用日文讲。他就指出从80年代开始，现代思想就开始有了支持，慢慢从所谓的战后思想往现代思想转移。在讨论战争责任时，以往是以丸山真男所说的“悔恨的共同体”为基础进行讨论，但是从80年代开始到90年代，这一“共同体”开始模糊，理論資源上却是以现代思想，比如说列維納斯（Emmanuel Lévinas）和漢娜·阿倫特（Hanna Arendt），这些理论为基础去讨论战争责任，那么这里就有了一个变化。

ここで私が現代思想という言葉を目指した場合、その流行のポストモダン理論を指しているというよりは、そのような理論を自覚的に日本の歴史的な問題、現実的な問題と合せながら応用するような批判的なりべラルな知識人の思想傾向を指しているという点を強調しておきたいと思います。その中では戦後思想との連続性にある戦争責任の問題も大きく含まれています。

「現代思想」という名前自体は「戦後思想」という名前から外れてはいるように見えますが、その中身からはむしろ「長い戦後」の構成部分でもあるという点を指摘しておきたいと思います。戦後日本の共通な関心は新日本の再出発という点で、またそれと密接に関わっている戦争責任の問題、国家主義の問題、それから天皇制の問題に対する批判でありました。その中で丸山真男が「悔恨の共同体」という概念を取り出したわけで、共鳴をたくさん呼び起こしているという点です。

「戦後思想」という言葉を使う場合は、「もはや戦後ではない」という、1956年の政府の白書にも言い方があったのですが、「長い戦後」という見方とは正反対の言葉として今日でも引用されている点なんです。「もはや戦後ではない」という言い方の問題は、戦後の問題ははるかに経済的な問題とい

うよりは国際政治の問題であり、さらには倫理的な問題でもあるという点を見逃しているという点です。長い戦後というのも仕方がないといえば仕方がないです。そして経済の成長も、アメリカの朝鮮戦争がたくさん貢献している点も周知のとおりなんです。この点についてはジョン・ダワーの「敗戦を抱きしめて」という本の中でもご指摘があったように、これはジオポリティクスな理由によることではあるんです。それだけではなく、ダワーの指摘した通り、日本は当時、戦時中の遺産として、唯一余ったエンジニアリングとテクノロジーの生産高を持て余している産業国でもあったという点も、深い関係があるという点なんです。

ここで常識なことかもしれませんが、知識人の戦争責任に対する考えを巡る要素として、いくつかの次の要素がご指摘されるのではないかと思います。まず第1点は冷戦構造なんです。特にその中で起こった日米関係の確立という点なんです。朝鮮戦争の爆圧のあった1951年にサンフランシスコ条約が調印され、それをベースにして日米安保条約が調印されました。これらの条約は深く日本の戦争責任の問題に影響を与えてるという点は、言うまでもありません。

ここで私が言いたいことの1つは、日本の戦争責任に含まれている戦後の政治、それから国家権力を批判する側に立っている知識人の思想史を理解するためには、それらを日米関係の中に、そして日米の関係の中にある日中関係というマクロなシチュエーションの中に位置付けしなければならないのではないかというのが、私が強調したい点です。

2番目の要素はもちろん経済的に韓国、中国の台頭です。これは相対的には日本のアジアの経済的主導者の地位を相対化した点です。そのような情勢の中では、東アジアが一方では経済的に協力し、融合し、他方ではアメリカがそのような台頭する中国を相対化するために日米関係を軍事的に強化し、日本の支配層もそれを利用して保守化に向かっているという点です。さらに重要なのは、経済的に軍事的に台頭する現実の中国も、もともとリベラルな立場にある日本知識人におけるアメリカ認識と中国の認識、あるいはアメリカの想像と中国の想像に対して大きな影響があるという点です。言い換えれば戦後日本のアメリカ認識と中国認識は連関関係にあるという点が重要な

ではないかという点が、私は強調しておきたいと思います。

3番目の戦争責任に対する可能な様相は、日本国内政治にある55年体制の変化という点です。55年体制は進歩する側は、いわゆる「護憲・革新日米安保条約反対」のスローガンだったのですが、他方それに対して保守側の政党は「改憲・保守 安保条約維持」というスローガンで立ちました。このような対立体制は1995年に解体し、日本が保守化するというふうになりました。

他方、さっき現代思想が現れている情勢の中で、その背景についてまず言いますと、それは西側にあるマルクス主義の退潮という点です。ここは僕にとっては「マルクス主義」とマルクスを区別すべきなのですが、と同時に西側の「マルクス主義」といわゆる括弧付きの「社会主義陣営」の「マルクス主義」とも区別したいと思います。戦争責任を追及する丸山真男によって代表される「戦後思想」の中にある進歩という理念や、民族という枠組みなどが現代思想の支持者により相対化されるようになった点が重要だと思います。これはなぜ重要かと言いますと、現代思想の新しい理論では民衆離れのような傾向も起こるようになったからです。これは説明するのに時間がかかりますので簡単に言って終わりますが、他方マルクス主義が相対化された中で、新しい倫理的な枠組みも若い世代にとっても必要になったという点で、その現代思想の新しい理論を求めるようになったという点です。なぜならばマルクス主義かどうかは別として、マルクス主義自体はある種の倫理性に基づいている点が異論されないとしたいと思います。ということで、新しい倫理性を維持する理論を求めるために、「現代思想」の登場がその結果だと言えると思います。日本の知識人思想の特徴としては、西洋の外来理論を頼りにしすぎている傾向が丸山真男にも指摘されています（丸山『後衛の位置から』）。これはまさに丸山真男がかつて指摘したように、日本の模範国家は古代においては隋唐なのですが、その後、長い間政治が支配する太古の中国、幕末維新以後は欧米になっているという点です。

そして丸山真男による指摘もあったとおり、ニーチェからサルトルまでの難しい哲学が翻訳され、その発行部数が中数万部もある、戦後日本のみならず戦前もそうであった。「マルクス/エンゲルス全集」が1928年に創造社

によって刊行されました。2年にわたって全部終わりました。そのような現象はソ連にもなかったんです、全世界においても唯一であったというほどでした(同前掲丸山著書)。この点は現代思想においても、もっと極端な形になってくるといえる点で私は指摘したいと思います。

以上のことで私が指摘したいのは、今日のテーマである、「中国の文脈における日本研究」を考える上で、私が言いたい点は、日本は東アジアの中にある日本であると同時に世界の中にある日本なんです。それも中国に対しても全く同じ言い方が言えると思います。結論としてはグローバルな視点が必要だという点で、私が言いたい点です。これはより良い日本研究をするためには客観的には日本語以外の外国の知識、外国語の知識も必要だという点に関わってくると思います。

今日の話の中で私の頭の中にあるのは、3つの国の日本研究の比較意識が多少あると思います。これはまずは日本の日本研究、それからアメリカの日本研究、これ戦後のアメリカですが、それから中国の日本研究という3つの比較を念頭に置いています。

まず私が言いたいのは、中国の日本研究は人数からも、就職の楽観さからも、学問自体の活発さからもある種の「朝陽学科」だという点が言えるのではないかと思います。とても元気がいいという点で私は言いたい、就職が悪くない。これは客観的には中国の資本主義と日本資本主義、あるいは中国の日本語教育・日本研究がグローバルな資本主義との協力関係にあるという点が背景にあるという点は言うまでもないでしょう。

もう1つは学問的には中国の文脈における日本研究は、中国における中国人文研究と深い対話関係にあるという点がさらに大きい点だと思います。中国の中国人文研究がほかの国の、例えば日本の日本文学研究と違うのは、日本日本文学研究が必ずしも主流的ではないといえるのではないかと思います。それは人数からも、規模からもそうだと思います。というのは日本の人文研究・社会科学研究は基本的に外国語の上に立てているという点が特徴だと思います。それは外国語でない日本語は恵まれていないということの意味をしています。しかし中国の中国研究は、規模がわりと大きいんです、外国研究がわりと小さいんです。その中で日本研究はそういう主流にのっとること

が可能となります。これは数十年前の学術の「孤島」と目されている外文系のイメージを一変されました。少なくとも日本語科に対しては僕は言えると思います。数十年前の中国の日本研究の遅れてる様子、閉鎖されている様子と比べてみれば、これは簡単に分かる事実だと思います。

もう1つはたくさん日本から留学して帰ってくる人、それからアメリカからも帰ってくるかと思いますが、それに中国の日本研究はさっきの劉先生の出版事情からも考えるように、相当な成績があります。中国自身の研究から言いますと、その強みは例えば明治維新以前の部分、例えば文学と歴史、それから漢文古典の部分、儒教研究とか江戸研究、特に江戸研究の人数の多さは、恐らく既に日本を超えてるのじゃないかというのが私の推測です。

中国の日本研究で注目すべき業績を挙げているのは、例えば、近代日本文脈のある魯迅解読に対する研究や、江戸日本の儒学研究などがあると思います。部分的には満州国の歴史に関わってる研究もそうだろうとおもいます。今日ご登壇されている王中忱先生の、例えば満州の農村問題との関連とかも、とてもユニークだと思います。

それに中国の日本研究は体制上、昔の中国の日本語科が文学と言葉を重視するような傾向が大幅に訂正された点が一大の進歩だと思います。ある程度開放されたという点です。しかし他方、上に置いてある日本の日本研究とアメリカの日本研究との比較の中では、次のような克復しなければならないような問題もあるのではないかというのは指摘したいと思います。まずは学科があまりにも狭くて細かく分けられている点です。要は学際的ではない点です。これは最悪の問題ではないかというのが私の考えです。

もう1つ、中国の日本研究でわりと弱い分野について言うと、日本の社会科学に対する理解、または日本の文脈にある西洋の社会科学の影響に対する理解の部分が不足しているのではないかと思います。マルクス主義の影響もそうですし、マックス・ウエーバーとかの影響もそうです。必要な西洋学の知識も必要となります。また中国中心主義と中国の日本研究はまだ同時に克復しなければならないのは、日本の西洋中心主義に対する相対化を求める一方、中国中心主義にならないようにという点も重要な点です。

日本の日本研究の問題の1つは、僕から見れば1つは中国語を勉強してい

る研究者があまりいなく、漢字文化圏の学術・思想伝統に対する理解がまだまだ余地があるという点と、もう1つはちょっと西洋中心的な部分があるという点です。と同時に中国の日本研究は、中国中心主義と西洋中心主義を同時に克復しなきゃならないというのは、同時に指摘しなければなりません。これも私のPPTタイトルである「東アジアにある日本、世界にある日本」という点で、ナショナルな枠組みを相対化することが重要じゃないかと思います。と同時にアメリカの日本研究や中国研究において社会科学の影響が大きいと言われています。アメリカにおける日本研究に対する社会科学の影響が、例えばアメリカの日本研究において見えていると思います。中国の日本研究もそのような日本研究に教わる点が多いのではないかと思います。ミシガン大学の日本研究において社会科学を強く発揮できてる部分もその強みではないかと思います。もちろんアメリカの日本研究の社会科学を生かしている部分も失敗する部分も同時にあるんです。例えば戦後50年代、60年代の近代化理論の問題もあったのですが、そのなかには失敗例も少なくないですが、基本的にこれはアメリカの日本研究の特徴ではないかと思います。

と同時に戦後日本はどちらかといえばアメリカの政治が国際政治がリードしている日本でもあるので、特に日本政治を理解するためには、戦後アメリカの国際政治に対する知識も重要だという点です。もちろんアメリカ日本研究の不足のもう1つは、東アジアの中にある日本に対する視点も、今後また解決しなきゃならない課題も多いという点もです。

最後に私が言いたい言葉の1つ、「方法としての日本」はさっき劉先生もご指摘があったのですが、方法のみならず実態としての日本語が必要だという点は私は賛成なのですが、若干違うのは「方法としての日本」もとても重要ではないかと思います。日本研究はたまたま中国の研究だけでなく、中国の知識人思想史を活発化させるためにも重要な視点、「方法」だと思います。

それと関連するのは鏡としての日本です。これは劉先生のおっしゃってる実態としての日本。日本のネガティブな過去、ポジティブな過去です。特にポジティブな面については戦後思想、現代思想において中国の知識人が日本の知識人に教わるべきことが多いのは私も指摘したいと思います。それだけでなく、もちろんアメリカの日本研究においても例えばジョン・ダワー、

キャロル・グラックなどとか、そのようなりべラルな批判的な知識人も多いです。

私の発表はこれで終わりにしたいと思います。時間を超過してしまってすみませんでした。

鍾以江：超過していません。必要な時間で話していただいて全く大丈夫です。今日の時間はたっぷりありますので。ありがとうございました。先生の最後のお話は非常に分かりやすく、もう既に劉先生と対話を行ってるところですね。方法としての日本、鏡としての日本という意味では、まさに劉先生の意見を伺いたいと思いますが、もう直接討論に入りたいと思いますが、大丈夫でしょうか。休憩とかも大丈夫でしょうか。では討論に入りたいと思います。もう3名の先生それぞれ問題提起もしていただいて、もうたくさんの話題が出てきたんではないかと思っています。まず先ほどの日本というものをどういうふうに描くか、想像するか、扱うかという意味で、劉先生と林先生の違う意見に対してお話から始めようと思いますが、どうしましょう。また王先生にもお聞きしたいんです、このことについて。まず劉先生から林先生の先ほどのご発表の中の内容についてお答えしていただいて、次は王先生にお伺いしたいと思います。まず、劉先生、よろしくお願いします。

劉岳兵：王先生と林先生の話聞いていただいて、よく勉強になりました。王先生の話の中にはたくさんの翻訳集が出てきて、しかし解説とかなかなかないというの、私は実はそういう感じもあるんです。確かに研究不足ではないか、翻訳だけ、これは随分前の20年代、大正デモクラシーの時代の時、今僕の頭の中には全く井上哲次郎のものがいっぱい、あの時は彼はすごく鋭く翻訳思想、翻訳哲学、東洋哲学じゃなくて翻訳哲学を批判しました。確かに中国の今の状況は、ある部分同じではないかと感じて、王先生のおっしゃってることに賛成します。

林先生のお話はすごく専門的なもので、いろいろ私は戦後の一応思想史は思想史ですけど、あんまり勉強不足でいろいろ勉強になりました。ありがとうございます。戦争責任という話題は非常に重くて、古くて、大事な話題ですよ。

林先生は戦後の、つまり戦争責任をどういうふうに見てるということですよ。

ね。例えば誰々の理論によって研究しているとか、認識しているとかそういうことを話したんですね。それはもちろん重要なことなのですが、僕の今関心は戦争責任という、責任は責任あるんです、もちろん責任はあるんです。いかに解釈、究明、あるいはどういうふうに徹底的に認識できるのは非常に難しい問題です。

私今考えるのは、例えば井上哲次郎、「陽明学派之哲学」という本を書いた時、ちょうど1900年に出したもので、あの年は義和団事件あったんです。八国联军、八か国連合軍です。あとは日本の思想界にはすごく、国民道徳論、国民道徳論があるんです。彼は日本軍が天津や北京で非常に素晴らしい道徳心を示して振る舞ったということを以て、日本の素晴らしい道徳を証明するんです。ですからこれはうそでしょ、事実はそうではないんです。これは史料を少し調べればわかることです。しかし井上哲次郎の目で見れば、あの時代に彼はこの情報をいかに得たのは別にして、ある旅行者、侵略者、不管甚么样的国家、どんな国でも自分の国の軍人は素晴らしいと報道します。新聞はみんなそう言うではありませんか。もちろん日本もいい面ばかりを報道して、実はそうではない。そういうことに井上はたぶん後で気が付いたようで、調べてみると、1920年代には序文にそういう内容はなくなりました。

なくなりましたが、実は具体的に言えば1942年、「教育勅語」の最終版の釈明、「教育勅語衍義」という本を出したんです。その中に今回は中国の戦場で東南アジアの戦場で日本人の素晴らしい道徳、あるいは素晴らしい表現をもって日本人の優越を証明するんです。それはどっちか削除したんだ、文字としては削除するのは簡単です。しかし頭の中にそういう考え方を削除するのは難しい、無理です。ですから自然にそういう言葉が出てくるんです。

私が言いたいのは、やはり歴史家として一番重要なのは歴史の事実です。例えば井上哲次郎はそういう事実、戦場の日本人の文にはどういう表現があるか。真実が分かれば学者の良識があれば、そういう考え方は多分できないのではないですか。陶徳民先生は私が非常に尊敬している方なのですが、彼は私のために書評を書いてくださいました。私が紹介したのは、この書評のタイトルなんです。

事実清楚、道理自然会明白。事実が究明したならば、この道理、自然に明

らかになる。しかし事実の真相、難しいですね。ですから僕が考えるのは、やはりたくさんのいろいろな側面で歴史の事実を明らかにするという事は一番大事なので、それは戦争責任が誰々の理論、誰々のなんとかの理論を見るのはつまらない。事実が分かれば自然にこの道理は分かると思います。極端に言えばですね。歴史学者としては、歴史の真実、信じている故にそういう話をするんです。いかがですか。

鍾以江：歴史とはやはり、常にこのような理解と史料との闘いという感じがしますよね。王先生、いかがでしょうか。

王中忱：劉先生のお話を聞きまして、劉先生の原典主義には大変賛成します。実は何年も前から劉先生が原典を大切にすべきとおっしゃっている話を聞きました。私はそのことにとっても同感を持っています。私も実は日本の中国研究、中国歴史研究者たちによって編集された原典中国近現代史をよく読みまして、やはり印象深く覚えています。

そういうことと、中国の多くの日本史、特に日本近現代史の教科書を見てとても不満を持っています。というのは、全く原典が付いていないということなんです。私は主に文学研究ですから、文学テキストを読まないと文学史を語れるかということですが、なぜ近現代の日本史の教科書だけ原典が付いていないかということは、常に疑問を持っています。ですから劉先生が今原典の翻訳シリーズに着手して、とてもいいことだと思います。

林先生が中国の日本研究についていろいろ提言しましたが、特に中国の日本研究がどうすべきかということ、中国の日本研究の学科の細分化された状況を指摘したことに私も同感を持っています。それについて少し補足しておきたいのですが、私が少しの資料も用意していますから、ちょっと画面で見せてもらいたいです。

実は2009年に中国日本学会、劉先生がいらっしゃった南開大学日本研究院が日本国際交流基金の委託を受けて、この報告書をまとめて出したのですが、その中に特に1990年代末ごろから中国の大学改革が進めていく中に、学科統一建設という方針が強調されたことを書いており、そのような改革が中国の日本研究に対するどのような衝撃を与えたかということが書いてあります。簡単にまとめて言いますと、もともと独立したたくさんの日本研究機

構が、その改革によって組織が弱体化されまして、研究者も各分野の学科に分散されました。その報告書のまとめた方たちの立場が、そういう現象に対してはやはりマイナス的な評価をしていますけれども、私にとってはむしろこの各分野の学科に分散された日本研究者が、新たな職場でどのような問題にぶつかったかということをもし調べていただければいいじゃないかと思います。

けれどもその調査報告書がそこまで言えなかったのですが、私はもともと専門的な日本研究機構に属していない人間ですから、日ごろには実はそのような問題に面しています。私の知っている限りは、中国の大学においては例えば歴史学科におかれている日本史は、実は世界史という学科に分類されています。日本文学がもちろん日本語日本文学学科にありますけれども、実は私がある中国言語文学学科にもあります。その中文の中に置かれた日本文学は、実は比較文学と世界文学という学科に分類されています。したがって中文にある日本文学が、やはり中国文学と比較しながら、先ほど林先生が言ったように東アジア、あるいは世界文学の中の日本文学とは何かということは、教室では求められています。もちろん授業ではそのような問題が答えられるかどうかは別として、教室ではこのような問題が避けては通らないことになります。

考えてみると社会科学の領域においてはどのような状況になったかよく分かりませんが、恐らく法学部、経済学部の中に日本の政治、経済、法律、社会などが研究対象として扱われたとしても、日本政治学、日本法学、日本社会学というような授業科目がないだろうと思います。これらの学科専攻としての日本研究、あるいは専門的な日本研究機構に収められていない日本研究はどう見ればよいのか、これからの日本研究の可能性、未来性についてどのような意味を持っているかということが考えなければならないのではないかと思います。

結論から言えば、もし日本語日本文学学科や日本研究院、日本研究所のような専門的な日本機構が、日本という個性性にこだわりすぎると言えるならば、専門学科と研究機構としての日本研究に収められない日本研究は一般的な枠組み、つまり普遍的な見方、広域的な視野を持っているのではないかと

思います。

一方、もちろんそのような広域的な視野を持っている日本研究が、専門的な日本研究のような日本語の習熟に基づいた実証的な研究を欠けているところは見ないといけないけれども、中国の日本研究の可能性、未来性という課題を考えているときには、この2つの日本研究がどのように融合できるか、うまく連携していけるかということを考えなければいけないだろうと思います。

最後には、先ほど問題として話されたのですが、方法としての日本、それはもちろん竹内好や溝口雄三の方法としての中国、方法としてのアジアからできたものですが、それはどのように検討すればよいのでしょうかとはこれからのことだと思えます。

私の個人的な印象ですけれども、中国の日本研究、日本の中国研究は1つの共通な特徴があるのではないかと思います。つまり研究すればするほど他者への理解、他者との共生にはあまり役に立たず、自国中心主義的なナショナリズムを補強するような役割を果たしてしまったというような傾向がずっとあるのではないかと思います。私がその中の1人の人間、つまり両方とも関わっている人間ですけれども、常にそういう問題に悩んでいます。以上です。

鍾以江：王先生、どうもありがとうございました。非常に深いお考えですね。各学部に分散されている、日本というテーマを扱っている先生と、研究所とかの実体ある日本研究の組織という2つの存在があることは、まずポジティブに捉えないですね。どういうふうにかこの2つの日本研究の特徴を生かして弱点を克服して、これをベースにして発展させていくかという問題提起だと思います。ビジョンがあったらこれから少しずつ具体的なものが出てくるということでしょうか。

あと個人的な感想になりますが、王先生が最後におっしゃったことは本当に同感します。他者に対する研究、研究すればするほどその壁は結局厚くなるばかりですよ。そういうふうになんか感じています。アイデンティティというもののがやはり問題ではないかなと思います。これも今後克服したい問題として考えていきたいと思えます。

すごく刺激的なお話ができて嬉しいです。次は林先生のご意見を伺ったほうがいいと思いますがいかがでしょう。先ほどの2名の先生のコメントに対して。

林少陽：ありがとうございます。基本的に私はさっき劉先生のおっしゃったことは、中国の日本研究がブームですかという私の仮説を補強することができるのではないかと思います。さっき王先生の話の中にあった、昔たくさんあった日本研究所が解散されて、今数カ所しか残ってない現状なのですが、僕はそれ自体が中国の日本研究が発達した印の一つだと思います。

例えば清華大学の日本研究がどこにあるかといえば、もちろん外文系の日本側の中にもあるのですが、しかしもっと目立っているのは王先生の中国文学学科の中に、日本研究の学生、博士課程の学生、あるいは日本の視点を持つ中国研究者が十数人もあるという点です。中国にある一部の日本研究所が解散される一方、南開大学のみが日本研究院という機構を「所」から「院」へという形でゲタを上げた点が、象徴的な意味を持つようになると思います。

そしてさっき僕がアメリカの日本研究とも交流を積極的にするべきだと申し上げたのですが、実は劉先生はそういう日本研究機関の責任者としてわりとそういう問題意識の強い方の1人で、数年前に私の知ってる限りではアメリカの日本研究者との交流をした点を、ちょっと付け加えてご指摘したいと思います。これはまず1点目です。

もう1つは実は中国の日本研究者は今外国語学科にある日本研究者がその一部のみであり、もっと多いのは中国のさまざまな学科に分散されてる点が大きな1つの進みだと思います。例えば歴史学科にも日本研究者がおり、哲学学科にも、社会科学の学科にもあるという点が、これは昔なかったことなんです。例えば僕自身も今日本研究は授業としても学生も残念ながらまだ日本研究の院生を持ってはいないのですが、中国研究の中にあります。だけど僕はアイデンティティとしては私は日本研究者でもあります、制度的には。だからそういう現象は香港なのですが、中国全体としては言えるのではないかとこの点が言えると思います。

最後なのですが、さっき劉先生がおっしゃった井上哲次郎が、僕は井上哲次郎や井上円了こそ、この2人が近代中国における中国哲学という学科の起

源にさかのぼる際に、必ず出てくる人物だと思います。そういう意味においてはナショナルな枠組みにおける日本研究と、ナショナルな枠組みにおける中国研究が成立できなくなってる点でもあるんです。なぜならば、これは日本と中国が近代的につながっているのみならず、他方井上哲次郎におけるドイツの影響が強い点が無視できないです。中国の中国哲学という学科自体が、ドイツ関連と深い関連が前提にあるということです。ドイツとの深い関連が日本語を介在して近代日本の出発点にあるようになったわけです。

2点目は戦争責任というキーワードを改めて言う場合、例えば高橋哲哉氏が、戦争責任の範囲を大きくした点も改めて指摘しておきたいと思います。要は戦争というのは、日本の中国における15年戦争だけではなく、近代日本が台湾や沖縄、朝鮮半島などでやった植民地支配全体の戦争責任に広げられたという点も指摘したいと思います。その中で井上哲次郎について戦争責任に関連するといえば躊躇するにちがいないですが、広い意味での戦争責任という場合、明治知識人自身の倫理も俎上に置くべき部分があると思います。

いずれにせよ、私が強調したいのは日本という対象を研究する際に西洋の知識がなければどうやって研究できるのかという単純な問題だけなんです。

僕は劉先生が取り上げた井上哲次郎が、今後中国の文脈でとても意味のある存在だと思います。ぜひ劉先生の指導の下で、この明治哲学と近代中国との関連を広げていただけたらといことを願っております。以上です。ありがとうございました。

最後に1つ、最近中国は東アジアの歴史ブームがあって、最初は日本の中国史の研究の成果でしたが、この数年間は日本の歴史、あと韓国の歴史がとてもブームになってる点が、出版商品として言えるのではないかと思います。これは社会全体の関心が東アジアに回ってきたという点も、合わせてご指摘しておきたいと思います。これも中国の日本研究がブームになる証拠、あるいは前提、あるいは保証の1つだと言えると思います。以上です。

鍾以江：林先生、ありがとうございます。話を非常に多面的にお持ちいただいて、過去と現代、過去と今、分野も複数にまたがって話をしていただいて。難しい話ですが、はい、劉先生、どうぞ。

劉岳兵：我们现在教师评职称，学生授学位，都要到各个学科去评，我们有过

这样非常痛苦的经历。我们的老师，非常优秀的，还在第一位，但是到别的学科去评，人家不给你投票。因为每个单位都要优先解决自己的职称的问题，但是体制上，现在我听说北大有交叉学院，他们成立了自己的学术委员会，当然我觉得我们也可以，就是有可能成立自己的。但是你成立委员会的话，这个学科叫甚么名字，现在日本研究院有世界历史，有世界经济，有国际关系，有三个学科都是一级学科，而且都能够带博士。所以这样的委员会，怎么样的人才可以进到这样的委员会呢？当然不可能是本院的教授，他得是全校的，甚至是全国的，甚至还是要到全世界去找，我现在正在为这个事苦恼，希望能够成立这样的学术委员会，如果能够成立的话，那我们在引进人才，教师职称评定，学生培养方面都将有更大的发展空间，对吧。这个方面没有，现在很烦恼。

鍾以江：王老师，您是不是有回应？

王中忱：特にはないですが、劉先生の悩みがよく分かります。

鍾以江：この話は結構、学者として、組織としてもなかなかうまく思いどおりにいかないですね。

ちょっと違う話に持っていきたいのですが、先ほど劉先生と王先生との出版についてお話しされました。特に王先生の場合、出版と研究の状態をつなげて問題提起をされたのですが、林先生も先ほどおっしゃったように、翻訳、日本の作品はいっぱい読まれることで、日本研究が盛んになることとつながっているとおっしゃったのですが、中国における日本研究の将来という意味で、今の出版情勢はどういう特徴があるか、それからどういうふうに変化していけば日本研究が有利になるかということ、もしご意見が伺えればと思います。王先生、いかがでしょうか。

王中忱：確かに林先生が指摘されたように、今といってももう20年以上続いている状況なのですが、日本の書物、各領域の本ですけれども、確かに中国では出版のブームになったんです。私も随分前に日本文学を翻訳したことがあるんですけれども、ご存じのように中国の大学では翻訳が業績としてはほとんど評価されておりません。ですから実はアカデミーの人間としては、翻訳したりとかはだんだん少なくなっていますけれども、一方、最近私が少し調べたんですけれども、職業としての翻訳者が出てきました。それはやはり中国の出版市場の新しい現象ではないかと思います。

ですからそんな勢いが良い日本の書物の出版については、これから無視できない状況になって、その自体も研究の対象になると思います。こういう点から見れば確かに林先生が言ったように、これは日本研究のブームになる前提になった条件として整ったのではないかと思います。

鍾以江：ポジティブな動きと見て大丈夫ですよ。

王中忱：そうですね。

鍾以江：劉先生の場合、原典、史料の収集という意味ではやはり出版が非常に重要だと思います。先生は今取りかかっている出版事業について、どのような問題があるのでしょうか。組織の面また経済的な面など。先生は基金という組織を利用されてるんですよ。

劉岳兵：基金はもちろんずっと研究院を支えてきたのですが、今はだんだん少なくなってるのですが、しかしずっとありがたく感謝の気持ちでいっぱいです。翻訳ということは、僕は王先生とちょっと見方は違うかもしれませんが、やはり若者、研究者はこの研究に入るとき、やはり原典もちろん素晴らしい原典です、研究書とか、小説でもいいし、専門によって違うのですが、若者としては学術訓練、学術の感覚の訓練、それは1番大事なことです。僕は博士号を取った後、1冊の東大の佐藤慎一先生の本の翻訳書を十何回再版したんです。確かに翻訳は若者、自力で著作を書く能力はまだないのですが、しかし非常にいい訓練。僕もチャンスがあれば学生に翻訳してくださいというのがたくさんあるんです。ですから多分職業としての翻訳者はあるのですが、若者の学者としてもずっと続けているのではないかと思います。それは1番いい訓練だと思います。

鍾以江：そうですね。王先生、どうぞ。

王中忱：補足しておきますが、私個人としては翻訳の作業はとても評価していますが、今中国の学術評価の状況としては、大学ではやはり翻訳より論文のほうが高く評価されていますので、研究者たちが研究、翻訳の重要性を知っていてもなかなかそっちに向いていけば評価されていないという厳しい状況に置かれています。いろいろな場でそういう状況がやはり変わらなければいけないということです。以上です。

鍾以江：このようなある意味で普遍的な状況かもしれませんね。日本もある

程度あると思います。アメリカでは確かに翻訳はあまり業績にならないです。林先生、もし香港について出版事情とか何かもしご意見、コメントあれば。

林少陽：私は特に香港に着任して2年足らずですし、香港も狭いので特にこちら辺は補足することはございません。

鍾以江：そろそろ5時になりますので、もし王先生、劉先生、林先生、互いにコメントとかなければ質疑討論に移りたいと思いますが、いかがでしょうか。

それではこれから質疑討論に入りたいと思います。どなたでも挙手して、あるいはチャットでコメントとか問題や質問を書いていただいて発言して大丈夫です。5時半までなので、あと30数分あります。

王中忱：好像李梁老师也在现场，是吗？

李梁：陈立卫老师也在。

王中忱：陈老师，李老师你们好。

李梁：你们好，我经常在网上见到王老师。咱们在地面见不到，但你演讲我都听过。

王中忱：哎呀真是很高兴。

李梁：今天你们三人演讲都非常充满了刺激。大変刺激的です。

王中忱：ありがとうございます。

李梁：很受教，这边我觉得少阳提的问题比较大，比如说对于那个中国的日本研究和美国的日本研究，和中国的中国研究，这样比较研究，我们好像似乎没在做这个研究，这个其实是一个很大的题目，刚刚刘老师也说了，他作为院长的苦恼，国内的日本研究我已经离开几十年了，不太清楚，但我以前在历史系的时候，就是属于日本研究这个方向，我们叫亚非史方向，日本史。但是没有学科独立，不知道现状怎么样。既然有这个研究院，那么研究院没有财权，没有人事权，那当然你很难发展自己的学派，这是很大的问题。

これはなかなか考えられない、日本では。

那我就问一下少阳，你说日本研究现在是个朝阳研究，就是说他很有希望的。那么从哪个角度这么说呢？

林少陽：谢谢李梁老师，我是用中文答好，还是用日文答好？

李梁：随便。

鍾以江：我先把李梁老师的问题用日语说一下吧。

先ほどの質問は林先生に対して発されたのですが、先ほど林先生は中国における日本研究は上昇している段階にある、「朝陽産業」であるとのこと指摘があって、それはどういう意味での指摘ですかと。

林少陽：我还是用日文回答好吧，比较省时间是吧。

鍾以江：对对。

林少陽：さっき弘前大学の李梁先生が日本に留学する前は、北京大学歴史学科でした。李先生のご質問は、なぜ中国の日本研究が「朝陽産業」と言えるのかという私に対する質問なのですが、次のように答えられるかと思います。

まず1点目は人数が多い。それにさまざまな学科に散在しているという点可言えると思います。2点目は就職が悪くないどころか、とてもいいといえるかもしれません。

これはさっきも申し上げたとおり、中国の資本主義と日本の資本主義は一体化しているという点です。そういうことが背後にあるのではないかと。他方中国の知識人が日本の知識人思想に対する関心が高いという点です。

3番目は学問的な理由なのですが、日本の中国研究は中国の中国研究と深い対話関係に、あと相互補完の関係にあるという点です。これはちょっと付け加えますと、中国の中国研究者の多くの若い方が、今日本語を勉強しています。日本という視点が中国研究にとって貴重だという点が分かってきたからです。と同時に、中国の中国研究が日本における日本研究と比べて規模がもっと大きい、相対的には。日本の日本研究がさまざまな外国研究の中のわりと大きい一環にすぎないのですが、中国の人文研究の中で中国研究が1番規模が大きく、中国の外国研究は相対的に弱いという点が背後にあると思います。これは3番目。

4番目はやはり古い体制の関係で、中国の日本研究はわりと外国語学科に位置付けられ、外国語学科では言語と文学にのみ重点が置かれてきました。しかし最近では体制がとても変わりまして、とても開放されましたし、それに中国の日本研究者が必ずしも外国学科にいるわけではないという点がとても重要だと思います。4番目は世代代わりが既に起こりました。最近出てる本の中で「東アジア研究」と名乗っている本がたくさんあるようになり、朝鮮

研究も日本研究もそうなのですが、全然知らない准教授とか、助教とかそういう若い方々がたくさん輩出されている点が背後にあると思います。4番目は中国の最近の一般読者が、東アジア重視であるという点が背後にあると思います。

以上の点で少なくとも僕個人的には「朝陽工業」、あるいは中国語で言えば「朝陽工業」「朝陽学科」という点を挙げられるのではないかと、個人的には楽観視しています。以上です。

李梁：ありがとうございます。とても納得します。これはちょうど日本の中国研究とは逆方向に行ってるんですね。日本の中国研究は先細りで、私は日本の大学に勤めていますので、1番の問題は財源の問題、経済力の問題ではないでしょうか？

林少陽：李先生、ちょっとこの点で補足させていただけたらと思いますが、日本における中国研究の問題の1つは、もはや「中国」が「方法として」できなくなってしまったという事実にあるという点です。これは経済力とはあまり関係はありません。なぜならば50年代の日本は貧乏だったのに、中国研究は日本知識人思想史の中でとても重要な存在でした。ある意味では日本の戦後の1番頭のいい日本の知識人はドイツ研究、フランス研究、中国研究という3つの領域を選びました。それは「方法としての中国」、また戦争責任の問題とも関わっているのですが、その戦争責任に対する反省において中国という被害者に対してどのように倫理的な関心をもつべきかという問題があると同時に、丸山真実の「悔恨の共同体」という言葉にもあるように、共同体を作るため、言い換えればリベラルな知識人の政治的な共同体、日本国内政治のための1つの方法なんです。

だからそういう中国は、中国は今世界の資本主義体制の中で、僕は個人的には中国は社会主義だとは思わないのですが、資本主義の1つのタイプなんですね。中国が世界資本主義の中で1番重要なメンバーの一員になったにもかかわらず、日本の中国研究が昔のように元気がないという点を、一人の日本思想研究者としてどのように解釈すべきかについては関心を持っています。だから僕はむしろ「中国」はもはや、あるいは少なくとも現在では「方法」ではなくなったという次元に面しており、今後どうするのか、恐らく日本の

中国研究者も悩んでる問題の1つだろうと思います。

他方、日本の中国研究は世界的にみても、特に中国史研究の分野においてはものすごく重要な貢献をしてきました。そのような貴重な伝統を現代の若い世代の、日本の中国研究者は無視するわけにもいかないはずだと思いますので、これはどういうふうに解決するのか、多分学科の問題というよりは日本思想史の問題だと思います。

李梁：とても大きな問題です。ありがとうございました。

鍾以江：王先生がご指摘のように、他者を研究するために自分を確認するという意味で、今は中国を「方法」として位置付けられなくなっているということですね。その枠自体が超えられないでしょうか。他者を見るときは、やはり自分を見たいという考えは、可能性があるとしたらどういうふうを超えられるかということですよ。李梁先生、答えはこれで大丈夫ですか。

李梁：すみません。刚才我去倒水了，没注意听到您的话。

鍾以江：林老师的回答，足够不？

李梁：林先生の答えは、非常に参考になると思います。これは逆に大きな問題を提起したと思ってもよろしいかと思います。

鍾以江：そのとおりだと思います。

李梁：いろいろな面で参考に、示唆に富む話題だと思います。ついですが劉先生に伺いたいのですが、劉先生、先ほど講談社の「中国の歴史」シリーズという本について何かおっしゃったようですが、今現在ではそのシリーズに対してどう思ってるんですか、一般学科では。

劉岳兵：僕はあまり読んだことはないので発言できないのですが、しかし先ほど私が言いたいのは、出版社としての宣伝はすごいです。いろいろな日本の関係があるかどうかは別にして、とにかく有名な人を引いてなんとか宣伝しようとしている。

李梁：私が知る限りでは、これはかなり読まれているみたい。買われているんです。

劉岳兵：いいものですね、やはり。

李梁：その本に対してはいろんな角度からものを言えるのですが、出版社の商業的な行為は当然あるのですが、でも歴史家は一般に向けて分かりやすい

歴史を書くのも大事だと思うんです。逆に中国人研究者もこのようなシリーズを書けばいいかと思います。

劉岳兵：それが1番問題なんです。頑張らなくてはいけないですね。

鍾以江：王先生、どうぞ。

王中忱：李梁先生のお話について少し補足させていただきます。講談社の2つのシリーズなんですけれども、「中国の歴史」と「日本の歴史」があり、「日本の歴史」シリーズの中国語版が出たばかりで、今読まれ始めたのですが、「中国の歴史」シリーズの中国語版が7年前に出されたのですが、実は企画人が1人、同じ人物だと聞きました。確かに李先生のご指摘にあったとおり、「中国の歴史」シリーズの各冊とも、中国の著名な歴史研究者たちによる解説が付されています。やはり先生のおっしゃったように、歴史研究のパラダイム、新しいパラダイムを示してくれましたから、中国の歴史研究学会に歓迎されたのではないかと思います。以上です。

鍾以江：ありがとうございます。ほかの方、いかがでしょうか。聞きたいことがあれば、何でもご自由に。

劉雨珍：南開大学の劉雨珍です。

鍾以江：劉先生、こんにちは。

劉雨珍：時間はありますよね？

鍾以江：あります。

劉雨珍：劉岳兵先生からいろいろご報告がありましたので、南開大学の事情も。今日のお話の中に出てないのですが、劉岳兵先生が2019年に南開大学の創立100周年の時に19冊でしたか、南開日本研究のシリーズ叢書を刊行されたのも付け加えておきます。先生方、本日はとても面白いお話をいろいろ聞かせていただきましたので、それほど時間はないですが、王先生と林先生にそれぞれちょっと質問をさせていただきます。

王先生は先ほど「阅读日本书系」、「日本を読む」シリーズを紹介してくださいましたが、たしかあれには笹川平和財団が関わっているんですね。だからあれはやはりあくまでも出版基金なのか、それとも本の選定に絡んでるのか、それから解説を書けない、書いていないというのもそれと関係あるのかどうか、ちょっと簡単に紹介していただければありがたいのですが。

王中忱：劉先生、ありがとうございます。実はそのシリーズには私も関わっていますから、選定委員の1人として少し知っており、ご報告させていただきます。やはり笹川財団の基金によって、7社の出版社によって企画出版されました。基金があるから刊行しやすくなる面もありますので、各出版社が急いでやったんです。分量も100種類以上だから、研究者たちはなかなか追いつけなかったと思います。とても残念なことだと思います。これは一例ですが、実は中国における日本書の出版はほとんどそのような状態になっているのではないかと私は気が付いたんです。

劉雨珍：ありがとうございます。次に林先生のお話についてですが、先ほど林先生には「朝陽産業」と例えていただいて、いい面と足りない面が両方指摘されているのですが、補足として例えば中国における日本の教育者の人数は多分世界一ですよ。それから日本語の学習者の人数も世界一です。特に最近の若者はアニメで育ってきた世代ですので、そういう人たちが日本に興味を持っている、それがやはり下支えになっているのではないかなと思うんです。

それから近代以降の中国、日本とは切っても切れない関係ですから、例えば雑誌として『抗日战争研究』や『今日戦争研究』という出版物もあるし、だから日本研究と中国研究、両方がやはりいろいろな意味で絡んでいると。ですから必ずしも日本語文学科だけではなくて、文学、歴史、哲学、いろんな面で日本研究をやっておられる先生が出てきたのと、それから1つ補足させていただきますと、最近の外国語言語学、僕はその所属ですけれども、そちらのほうでも大きく方向転換を迫られてるといえるのか、それはこれまでの言語と文学だけではなく例えば文化、異文化コミュニケーション、それから翻訳学、特に最近翻訳も研究者が増えています、これは英語の場合特に顕著です。それからもう1つはやはり国と地域の研究、これは要するに外国語、外国語言語学、一級学科、一級学科の下で5つの方向が今後の研究の中心になっていくと。ですからこれまで、多分あくまでも外国語を勉強する1つの手段、あるいはそういう教育としてメインだったのですが、しかし今後はこういう5つの方向に向けてそういう研究に力を入れていくことになるのかなと。最近外国語学の中には11の言語、それぞれ例えば英語とか日本語とかロシア語とかありますので、ですから日本語文学科も多分そういう方向

転換を迫られていると思うんです。

林先生、先ほど非常に面白い話というか視点を示してくださいましたが、要するに方法としての日本だけではなくて鏡として、ミラーとしての日本というのは、ポジティブなところも捉えつつ、逆にネガティブなところも捉えるべきという両面があると思います。中国ではよく歴史を鏡とするという言い方もありますが、僕らにとって中国のこれから、鏡とするところも多々あると思います。以上です。

林少陽：劉雨珍先生は僕に対する質問というよりは、僕の仮説を別の角度から補強してくださったと私は理解しております。そして最後のほうですが、劉先生のご確認に対して私の答えは「はい」ということで、ネガティブな側面とポジティブな側面、両方合わせての鏡という近代日本だと思います。

劉雨珍先生は中国日本語教学研究会の副会長をなさってると思いますし、長く日本に留学されてから、すぐ日本語教育の現場にいらっしゃる方ですので、先ほど僕が示した楽観的な仮説に対して、劉雨珍先生は賛成なさるかどうか。逆に僕のほうからお伺いしたいと思います。大胆な仮説だったので自信があるわけでもないのですが、どうでしょうか。

劉雨珍：答えてよろしいですか。僕の考えとしては、学生にとって日本語教育というと、単純にこれまでのように外国語を勉強していくのではなくて、もっと多面的になっていると思うんです。

ですから長らくの例からいうと、例えば世界史プラス日本語、それから国際ビジネスかな、要するに言語プラスほかのもう1つの専攻、そういうところに学生はどんどん興味が行っている。だからこれは劉岳兵先生とも話をしたのですが、その中で例えば日本史に興味を持っている、そうしたら低学年の時に日本語の教育を受けて、3・4年生の時に世界史の専門に入る、それがこれからの中国における日本研究の人材育成にすごく役に立つのではないかと。南開大学の今年の卒業生の中で、駒場に進学した学生がいます。言語学の専攻として、彼は非常によくできる子です。要するに大学の日本語科に在籍していても、必ずしも将来日本言語文学科に進んだり、日本研究に進んだり、そういう学生はそれほどいない、むしろ法律とかほかの分野に進む傾向が見られる。

だけど一方ではこのように外国語を習得した上で、また日本史とか、あるいは哲学でも文学でもいいのですが、そういった方面に進む。ですから日本語教育自体も正直前よりは萎縮しています。ちょっと前は全国で500以上の大学で日本語科を設けているのですが、最近は山西财经大学などでそういう学科がなくなったのが、多分コロナとかいろんな事情により、少しは萎縮しているのが現状です。

ですからこの傾向からいうと、将来的に若者が日本のことをいろいろ知ろうとする勢いはおそらく衰えない、そういう意味では林先生の仮説は正しいかなと私は思っております。補足は以上です。

林少陽：ありがとうございました。

鍾以江：ありがとうございました。劉雨珍先生。これについて劉岳兵先生にもお伺いしたいのですが、先ほどご紹介いただいた「善美原典日本研究文庫」の出版事業についてですが、今この出版事業は始まったばかりで、これから先生はどのような企画、どういうふうにも史料を選んで出版される予定でしょうか。お伺いできればと思います。

劉岳兵：それについては後で答えますが、最初は林先生の「朝阳产业」にコメントします。私は実は正直に言いますと、そういう実感がありません。実感が無いのですが、1つの励みとしてありがたくいただきますという感じです。実は日本研究は中国の学術の中では非常に周縁化されており、それほど重要なことではない感じです。

ですが、研究者は日本研究を一生懸命頑張っていい成績を出せば、必ず林先生のおっしゃったようになると思います。「善美原典」、「善美」は私が書いたように、日本人の名前なんです。梅田善美ですね。この方は私が浙江大学時代に関わった人物ですが、亡くなられたので、奥さまはお金を寄付して基金を設立されました。当初、私は井上哲次郎ではなくて神道に関する「原典日本神道思想史」というものを出しましょと構想しました。いろいろな先生が参加された大きなプロジェクトですが、来年か再来年ぐらいにできると思います。出版社の友達から私に依頼があり、日本儒学に関する何かいいものを出版できるという企画があって、私はそれを、この文庫に入れていただきました。次は英語の日本哲学思想資料集、今中国語に訳して中国で出版

しましようという考えがあります。もしできればこの中国語版もこの文庫に収録できればと思います。

鍾以江：ありがとうございます。あと数分ありますが、ほかに質問とかコメントはあるでしょうか。手を挙げている方、どうぞ。

金子：失礼いたします。現在国際交流基金で働いております金子と申します。現在、日本研究の仕事をまさにしておりまして、今日は先生方のまさに最前線の現場のお話をお聞きして大変参考になりました。ありがとうございます。

王先生にお伺いしたいのですが、中国の日本研究と日本の中国研究、それぞれ研究すればするほど自国中心的になるといいますか、うちに閉じこもっていくような傾向があるということで、これは私も非常に納得といえますか、実感するところがありました。これに関連して、現在日中間の留学生や学者・研究者など人の往来が遮断されて1年ぐらいになるわけですが、中国の日本研究において内にもりがちな傾向がある中で、もしコロナの影響が何かあれば教えていただけますと幸いです。

王中忱：ありがとうございます。確かにコロナによって、両国の交流、特に留学生の交流が大きな影響を受けました。うちの大学では何人かの学生が日本に留学する予定がありますが、なかなかまだ行けないという状態です。

清華大学が日本からの留学生も受け入れていますが、なかなか来られないという状況です。そういう困難な状況の中でお互いの交流を続けていくために、今のようなオンラインを通してフォーラムをしたり、シンポジウムを開いたりなどの努力が行われています。去年のことですが、何年か続けている清華大学と東京大学とのフォーラムが一応開かれ、林先生にもご参加いただきました。今年もできれば続けていきたいということです。以上です。

金子：分かりました。往来はなくなりましたが、オンラインで貴重な機会が作れるわけですので、私どもも引き続きそういう場を作っていければと思います。どうもありがとうございました。

鍾以江：ありがとうございます。次の方どうぞ。

関立丹：北京語言大学日本語科の関立丹です。先ほどの劉雨珍先生のお話を

補足させていただきます。それから林先生の先ほどのお話の答えにもなるだろうと思いますが、中国では日本研究は「朝陽産業」とは言えないかもしれませんが、学習的な観点から言えば今は徐々に進んできたのではないかと思います。例えば日本語科は外国語学部の下に置かれていまして、外国語の語学別に分かれるわけではなく、今教育部の指針としては先ほど劉先生が紹介されたとおり、外国語、言語学、外国文学、翻訳学、国別研究というふうに5つぐらい分かれています。全体的にはまだそういうふうには完成されていないのですが、そういう目標を設定しているようです。それに先ほど林先生は学科が狭いとおっしゃいましたが、私の感覚では今は広がっていると思います。例えば私は日本文学専攻ですが、日本の政治とも関わって作品を見てきております。それから例えば王中忱先生のいらっしゃる中文系、中国文学の研究者は王先生のように日本語の達人な方もいらっしゃいまして、哲学とか政治学など日本語のできる方、独学で勉強された方、それから日本へ留学された方、あるいは学部では日本語学科を卒業してから大学の別の学科に移動したりする方がいらっしゃいます。20～30年前と違い、今は外国語ができないとちょっと無理ではないかという観念が定着してしまい、こういう視点で言えばすごく進んできたように思います。だから学者としては、とても学術的に地味に頑張っていると私は考えております。

それから私は学部と修士課程は南開大学で修了したのですが、日本研究院というのはとても憧れていたところなので、林先生どうぞ、ぜひ頑張ってください。以上です、補足させていただきました。ありがとうございます。

林少陽：ありがとうございました。

鍾以江：ありがとうございました。時間は少し超過していますが、先生方がでしょうか。よろしければ、今日の話はここで終わりにしたいと思います。本日、たくさんの参加者の方々に来ていただいて、ありがとうございました。今日のイベントはこれで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

著者紹介（アルファベット順）

崔喜植（チェ・ヒシク／ Choi, Hee-Sik）

国民大学日本学研究所所長・教授。

専門は現代の日韓関係。

趙寛子（チョ・クワンジャ／ Jo, Gwan-ja）

ソウル大学日本研究所・副教授。

専門は日本思想、日本文化。

権肅寅（クオン・スギン／ Kweon, Sug-In）

ソウル大学人類学科・教授。

専門は近現代の日本社会、日本文化。

林少陽（りん・しょうよう／ Lin, Shaoyang）

香港城市大学中文及歴史学部・教授。

専門は近代中国と日本の文学史・思想史・学術史。

劉岳兵（りゅう・がくへい／ Liu, Yuebing）

南開大学日本研究院院長・教授。

専門は日本思想史、中日思想文化交流。

徐禎完（ソ・ジョンワン／ Suh, Johng-Wan）

翰林大学日本学研究・所長。

専門は東アジアの芸能、日本文化。

王中忱（おう・ちゅうしん／ Wang, Zhongchen）

清華大学日新書院・院長、中国言語文学部・教授。

専門は中日現代文学、東アジア現代地域文化史。

山泰幸（やま・よしゆき／ Yama, Yoshiyuki）

関西学院大学・教授。

専門は災害復興、地域防災。

鍾以江（しょう・いこう／ Zhong, Yijiang）

東京大学東洋文化研究所・准教授。

専門は近現代日本の宗教。

ブックレット GJS Vol. 5
「アジアにおける日本研究」講演会

2022年3月31日発行

発行者 東京大学東洋文化研究所

東京都文京区本郷7-3-1(東京大学本郷キャンパス内)

著者 崔喜植・趙寛子・権肅寅・林少陽・劉岳兵・徐禎完・王中忱・
山泰幸・鍾以江

編者 板橋暁子

印刷所 株式会社サンワ

ISSN 2436-5254

INDEX

1 はじめに

鍾 以江 / Zhong Yijiang

2 GJS「アジアにおける日本研究」講演会シリーズ 第1回

徐 禎完 / Suh Johng-Wan

「韓国における日本研究の現状と課題：翰林大学日本学研究所の目指すところ」

趙 寛子 / Jo Gwan-ja

「ソウル大学日本研究所の活動：日韓における生活世界の危機を直視し、
新たな連帯を求める」

山 泰幸 / Yoshiyuki Yama, 鍾 以江 / Zhong Yijiang

3 GJS「アジアにおける日本研究」講演会シリーズ 第2回

崔 喜植 / Choi Hee-Sik 「韓国の日本研究：国民大学日本学研究所を中心に」

山 泰幸 / Yoshiyuki Yama, 鍾 以江 / Zhong Yijiang

4 GJS「アジアにおける日本研究」講演会シリーズ 第3回

権 肅寅 / Kweon Sug-In 「韓国人類学の日本研究：1980年代から現在まで」

山 泰幸 / Yoshiyuki Yama, 鍾 以江 / Zhong Yijiang

5 GJS「アジアにおける日本研究」講演会シリーズ 第4回

「ラウンドテーブル 方法としての「日本」？ 中国における日本研究の課題と可能性」

劉 岳兵 / Liu Yuebing

王 中忱 / Wang Zhongchen

林 少陽 / Lin Shaoyang

鍾 以江 / Zhong Yijiang

著者紹介